

650
25

事故本
クバージ
p.147~152
s. 59. 2. 7.



0008157-000

650-25

大日本消防発達史

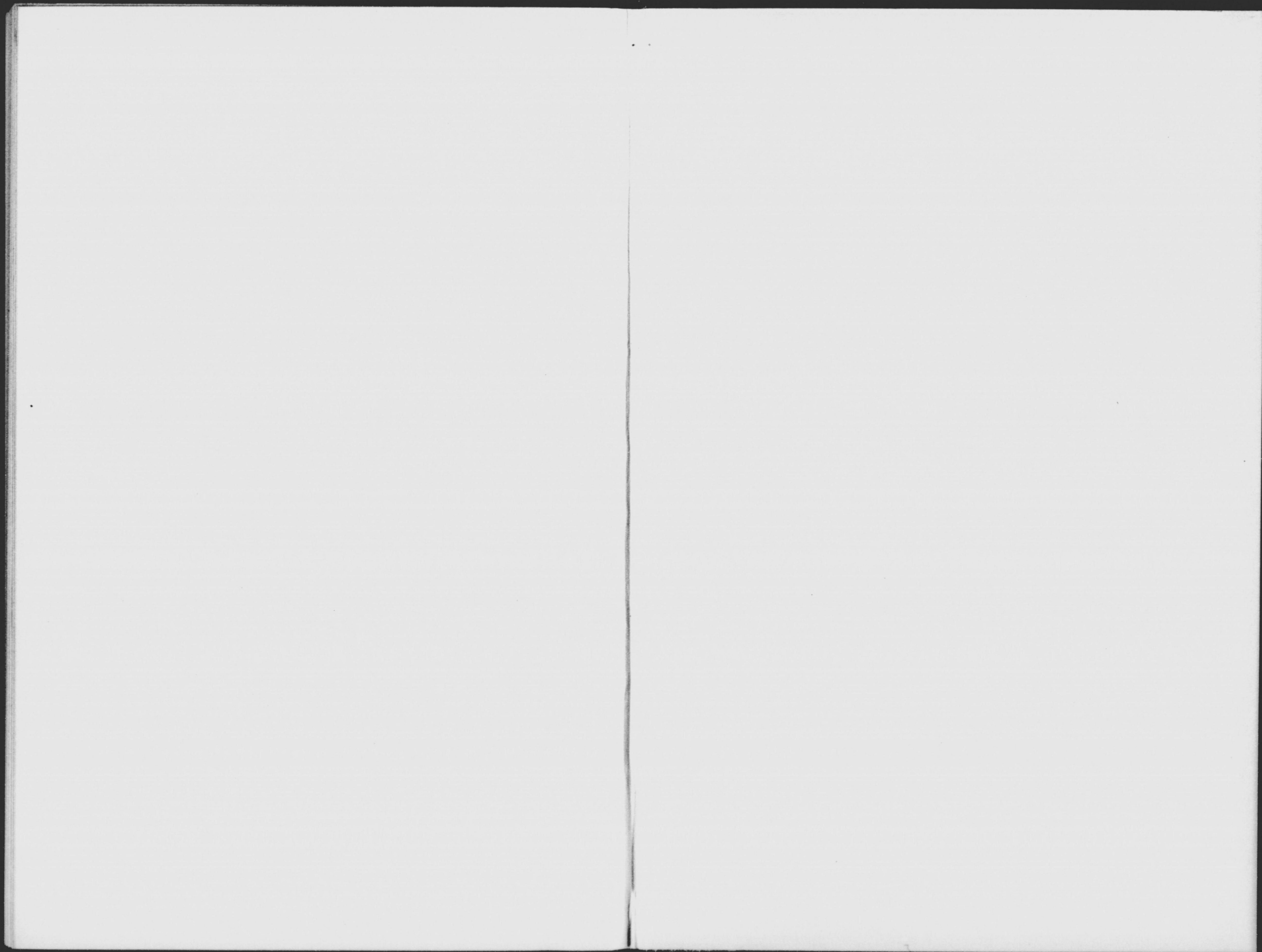
大日本消防発達史編纂協会・編

大日本消防発達史編纂協会

第2編

昭和10. 7

ABH



58585



消防發達史

第二編

千葉縣
栃木縣



650
25



大日本消防協會總裁
梨本宮正守殿下

令 旨

水火ノ災タル社會ノ生活ヲ脅威シ、産業ノ發達ヲ阻害シ、國力消殄スルコト甚タ大ナリ。之ヲ警戒シ之ヲ防禦シ、以テ生命財産ヲ擁護スヘキ職司ニ在ル諸子ノ責任タルヤ、極メテ重シ。宜シク一面ニ於テ警火思想ヲ普及徹底セシメ、火災ヲ未然ニ防遏シ、一面ニ於テ施設ノ充實ヲ圖リ、消防ノ訓練ニ勵ミ、之カ改善ト發達トヲ期シ、一旦水火災厄ノ發生ニ際シテハ、急速難ニ赴キ、克ク其ノ機能ヲ發揮シテ禍害ヲ最少限度ニ止ムルニ努メ、以テ國民ヲシテ其ノ堵ニ安ンセシムコトヲ期スヘシ。輓近ニ於ケル社會情勢ノ推移ヲ見ルニ、其ノ言動、動モスレハ浮華輕佻ニ陥リ奇矯過激ニ走ルモノナシトセス。諸子ハ宜シク穩健中正ヲ旨トシ義勇奉公ノ精神ヲ發揚シ、率先範ヲ鄉閭ニ示シ、以テ國運ノ伸張ニ寄與セムコトヲ期セサルヘカラス。因リテ左ニ消防組員タル者ノ常ニ服膺シ遵守スヘキ綱領ヲ示サム。

一、國憲ヲ重ンシ、國法ニ遵ヒ、忠誠報國ヲ以テ各其ノ本分トスヘシ。

一、犧牲ノ心奉公ノ念ヲ旨トシ、終始ヲ一貫シ、一旦危急ニ際シテハ身ヲ挺シテ難ニ赴キ、其ノ事ニ從フヤ沈着ニシテ機敏、噓レテ後已ムノ覺悟アルヲ要ス。

一、規律ヲ重ンシ、克ク上司ノ指揮命令ニ服從シ、上下同僚ノ間、互ニ相敬愛シ、和衷協同彼我一體ノ實ヲ舉クルニ努ムヘシ。

一、品性ノ陶冶ニ努メ、廉恥ヲ重ンシ、禮節ヲ尊ヒ、信義ヲ敦クシ、質實剛健ノ氣風ヲ養ヒ、職務ノ内外ヲ問ハス其ノ言行ハ一ニ鄉閭ノ模範タルヲ期スヘシ。

一、常ニ團體的訓練ヲ怠ルコトナク、學理ノ研究技能ノ練磨ニ努メ、以テ不斷ノ向上ヲ期スヘシ。

昭和九年五月三日



大日本消防協會會長
後藤文夫閣下



前千葉縣消防義會總裁
岡田文秀閣下



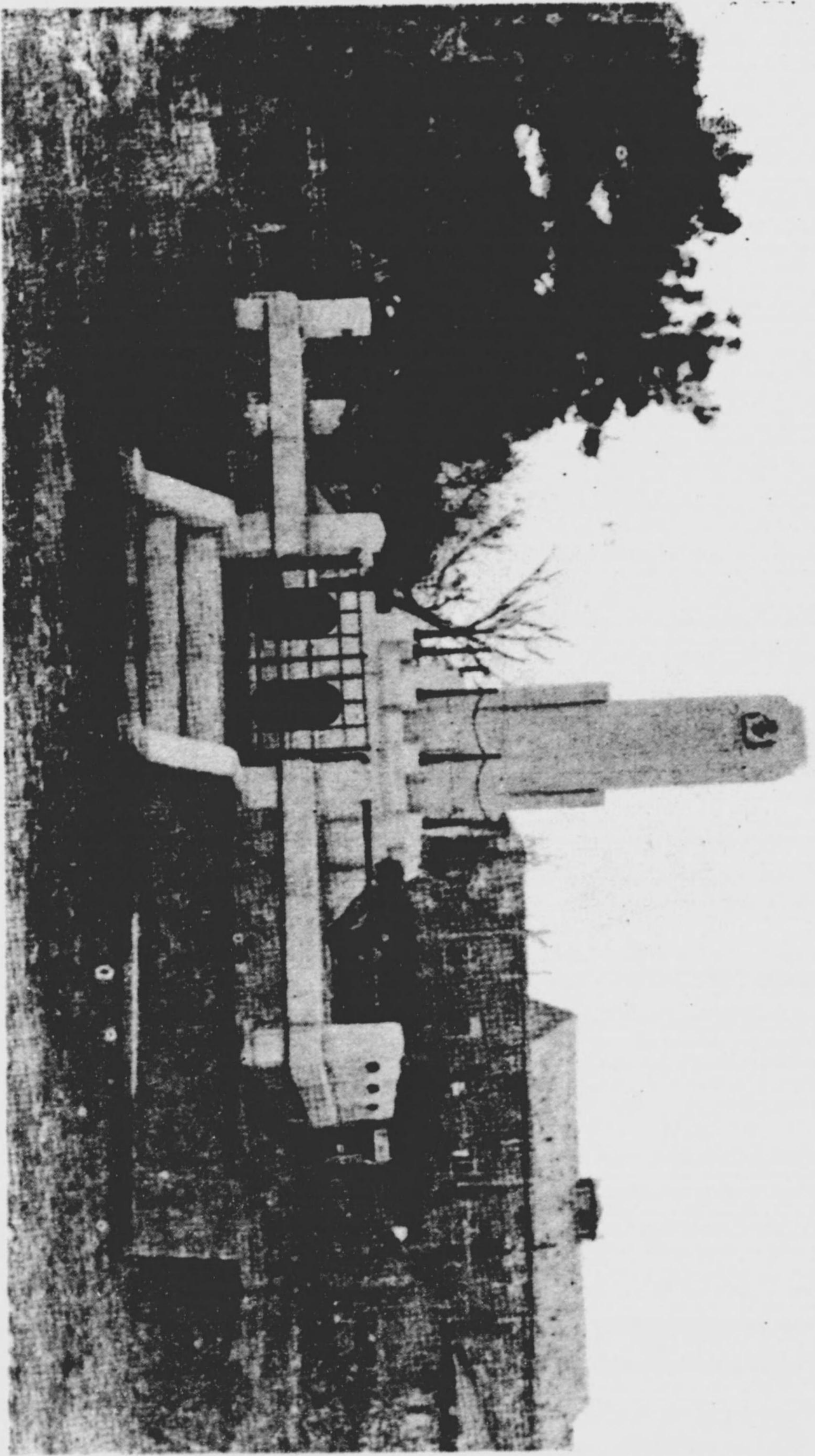
元千葉縣消防義會會長

玉田昇次郎氏

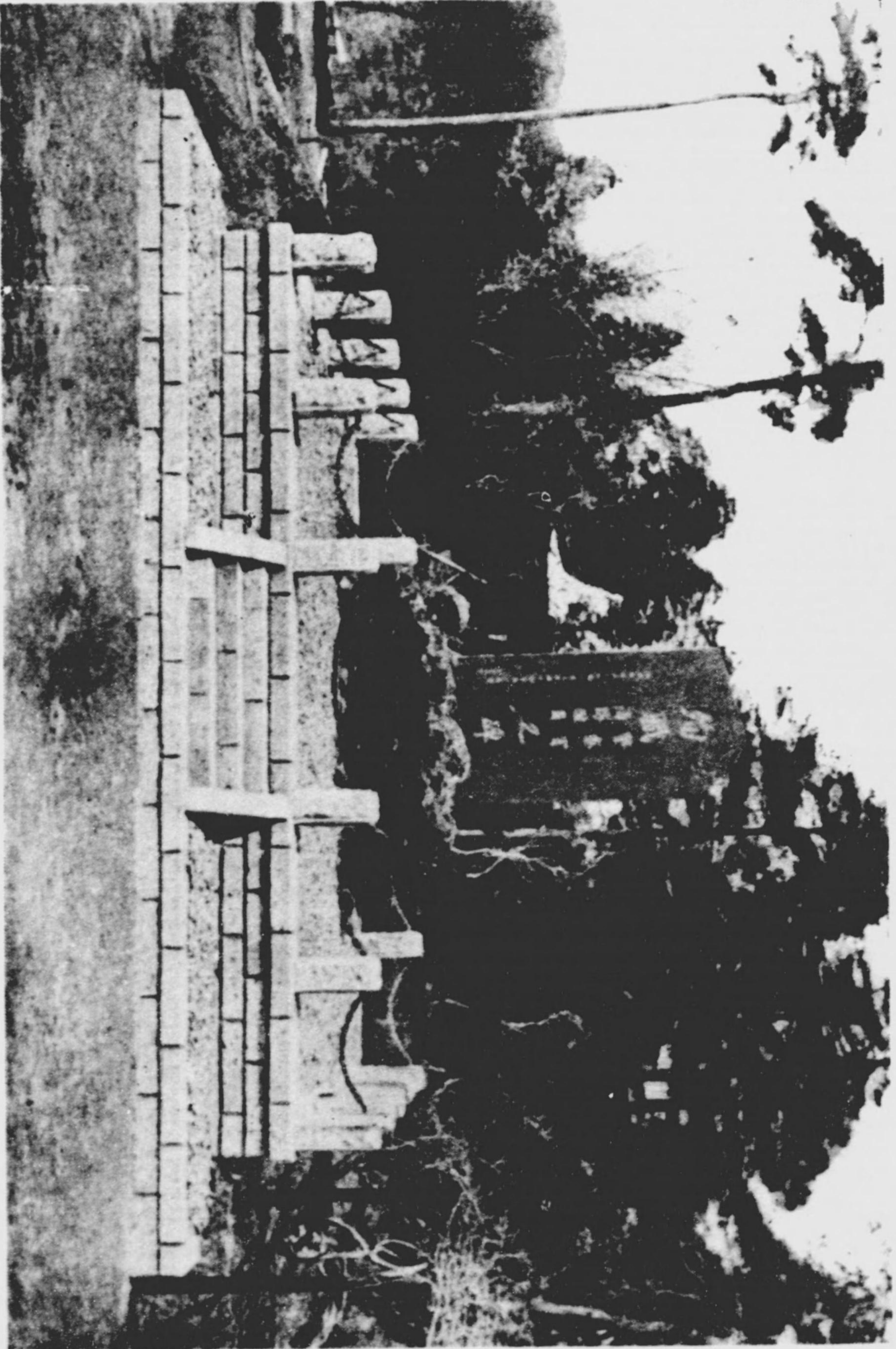


元千葉縣消防義會常任理事

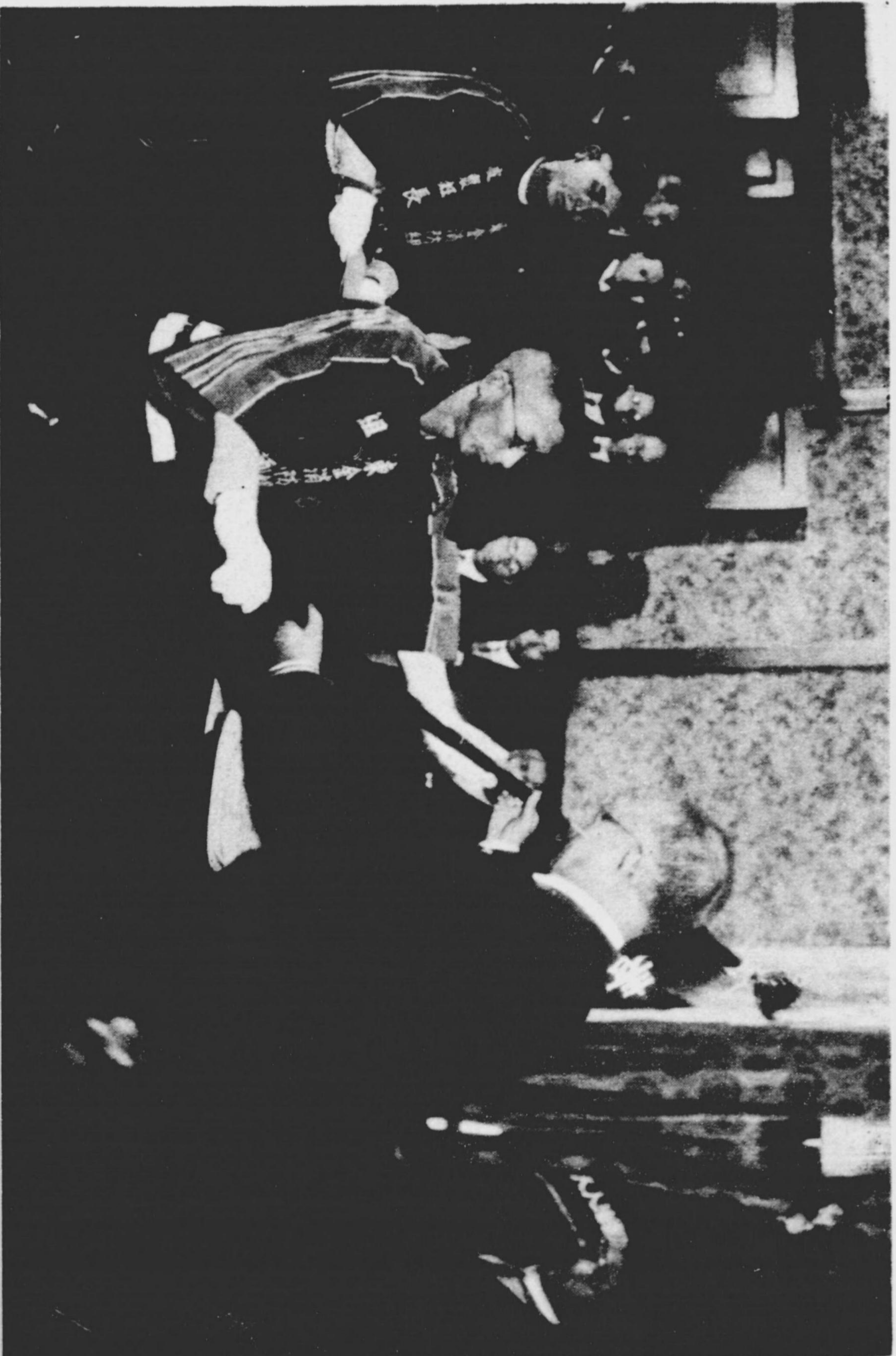
佐久間 尙氏



千葉縣殉職消防組員之碑



栃木縣殉職
警察官
消防組員
之碑



内務大臣官邸に於ける千葉県東金町消防組に對する
大日本消防協會表彰旗授與式

千葉縣
菅澤 靜氏



同上

佐久間菊雄氏



同上

宮崎四郎氏



千葉縣
今井三之助氏



豐濱村(勝浦)
島津治助氏



上野村(同上)
渡邊嘉助氏



久賀村 (千葉縣多古)
加瀬 實氏



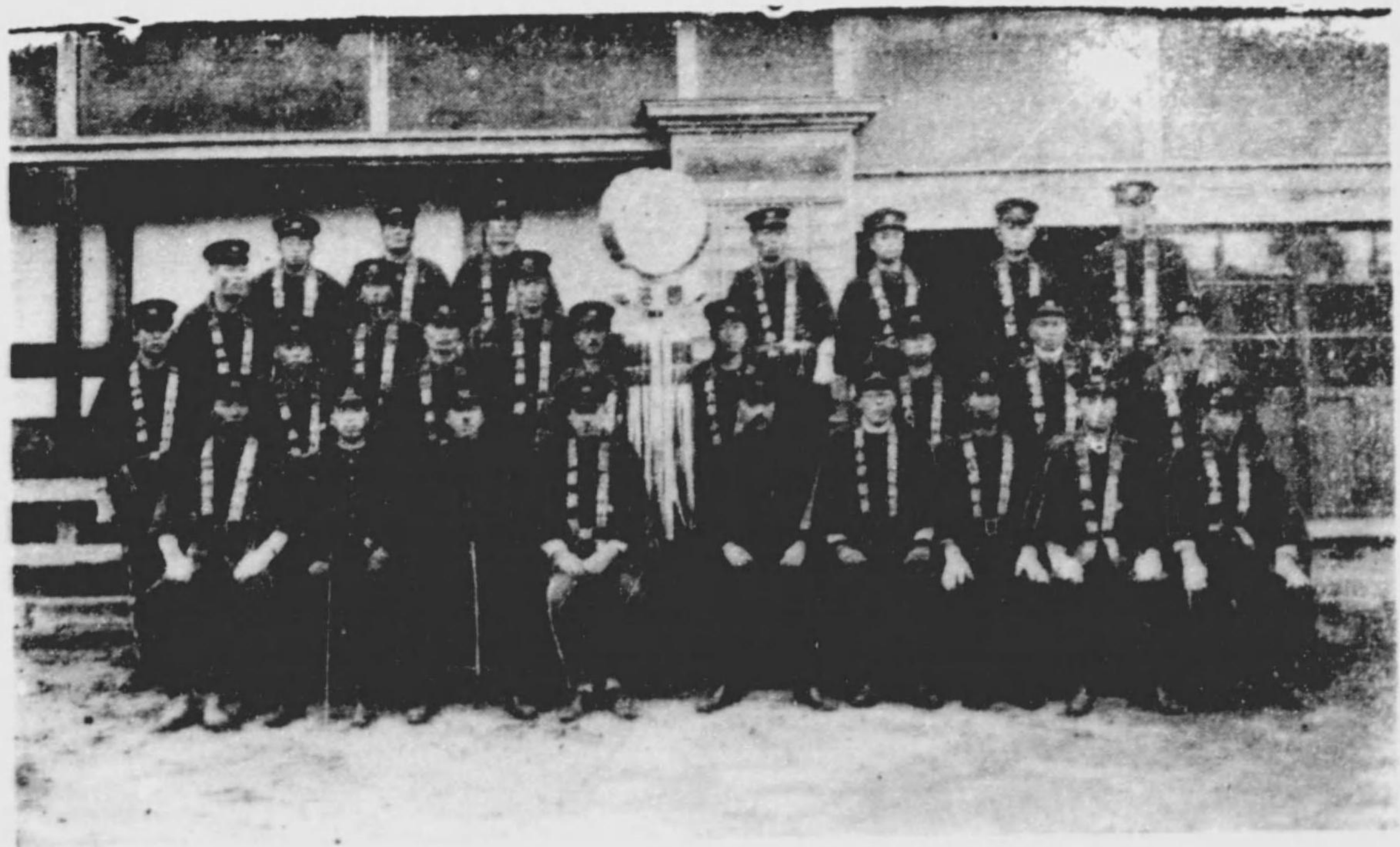
久賀村 (千葉縣多古)
土井茂三郎氏



多古町 (同多古)
石神井 清氏



豊海村 (同東金) 消防組幹部



四街道 (千葉縣佐倉)
吉田辨一氏



同上
高橋左近氏



同上
大川寅治氏



四街道 (千葉縣佐倉)
村井徳太郎氏



同上
金子金藏氏



同上
糸日谷定吉氏



旭村 (千葉縣佐倉)
小川廣三郎氏



八街 (同上)
兼坂己之助氏



松戸町 (千葉縣松戸)
田中與助氏



松戸町 (千葉縣松戸)
深山榮一氏



馬橋村 (同上)
齊藤新藏氏



富勢村 (同上)
飯田輝三氏



田中村 (千葉縣松戸)
寺田正俊氏



同上
飯塚徳太郎氏



小金町 (同上)
鈴木喜太郎氏



八本村 (千葉縣松戸)
楠見住太郎氏



同上
花の井孝之助氏



湖北村 (同上)
小池喜一郎氏



木下町 (千葉縣木下)
坂卷權太郎氏



大森町 (同上)
山口平吉氏



船橋町 (同 船橋)
植草佐吉氏



船橋町 (千葉縣船橋)
廣瀬恒太郎氏



行徳町 (同 市川)
篠田喜市氏



旭町 (同 旭町)
加瀬健治氏



三川村 (千葉縣旭町)
島田佐一氏



矢指村 (同上)
八本良作氏



横芝町 (同 成東)
吉岡清氏



太富村 (千葉縣成東)
渡邊政一氏



東金町 (同 東金)
佐久間繁氏



源村 (同上)
故並木和三郎氏



白里村 (千葉縣東金)
松島洋司氏



大倉村 (千葉縣佐原)
香取清次郎氏



栗源村 (同 佐原)
石橋武右衛門氏



橋村 (同 小見川)
飯田暉一氏



本大須賀 (同 上)
長竹知則氏



西村 (同 茂原)
桐谷暉氏



西村 (千葉縣茂原)
松崎七一氏



同 上
齋藤信吉氏



應南町 (同 茂原)
白鳥平一郎氏



神戸村 (千葉縣北條)
小澤熊次郎氏



富崎町 (同 上)
宇津木修司氏



北條館山町 (同 上)
島津鍋太郎氏



館山北條 (千葉縣北條)
石井總三郎氏



岩井町 (同上)
沼田清一郎氏



金谷村 (同上)
能城治助氏



佐貫町 (千葉縣湊)
三平 良氏



浪花村 (同 大原)
吉田三郎氏



御宿町 (同上)
中村 和氏



瑞澤村 (千葉縣大多喜)
小川 中氏



總元村 (同上)
酒井兵治氏



大多喜町 (同上)
兒安甚三郎氏



上澤村 (千葉縣大多喜)
山本武司氏



中川村 (同上)
藤井 澁氏



國吉町 (同上)
小高俊海氏



西畑村(千葉縣大多喜)
岡田丑之助氏



同上
三上正巳氏



白濱町(同 千倉)
高木仙松氏



千倉町(千葉縣千倉)
押元才司氏



和田町(同上)
間宮博吉氏



同上
小泉定次郎氏



豊田村(千葉縣千倉)
吉田淵氏



鴨川町(同 鴨川)
杉山才治氏



同上
田原安太郎氏



天津町(千葉縣鴨川)
吉野清氏



同上
北浦靖三氏



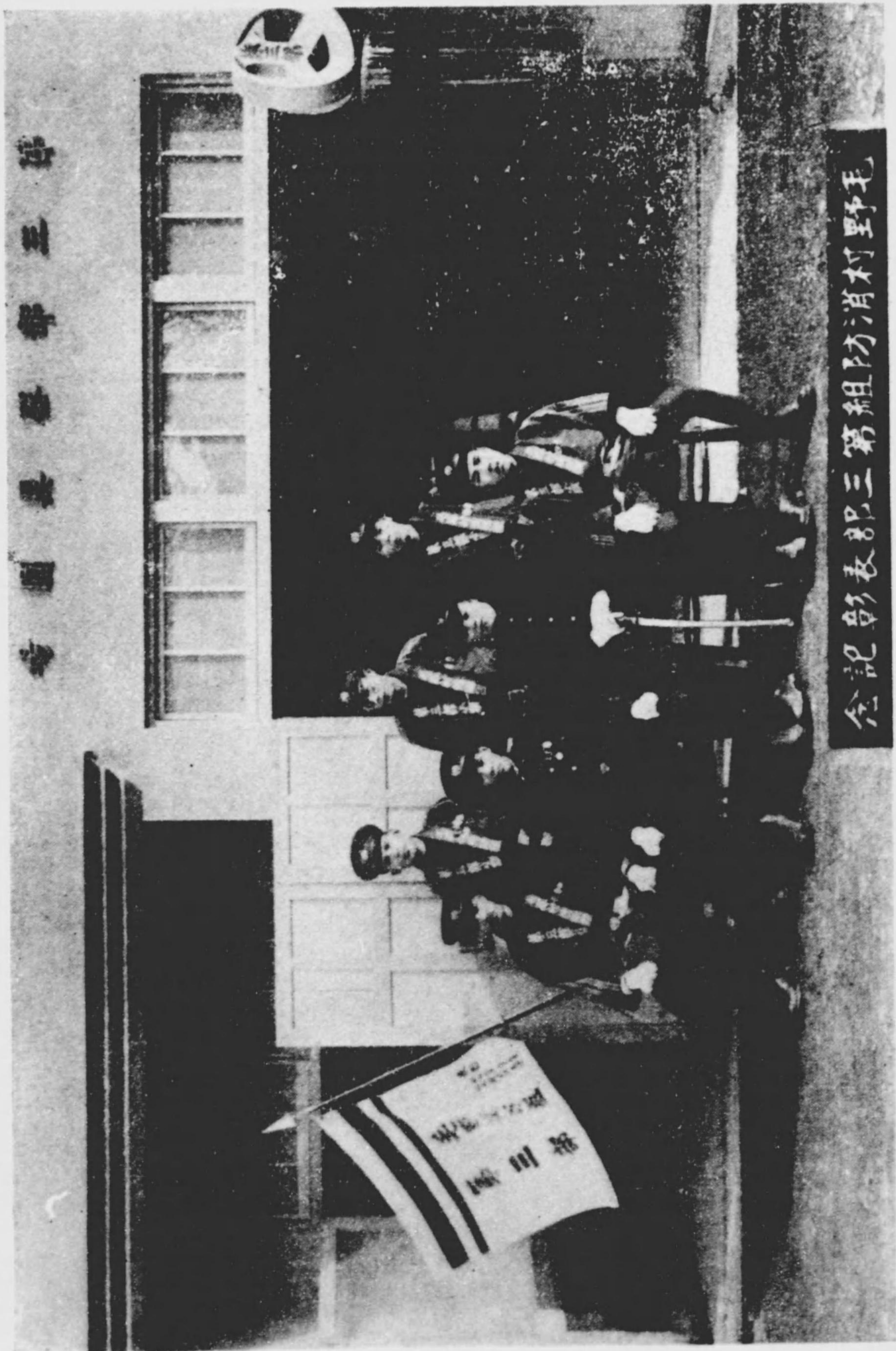
共和村(同、日市場)
大塚傳藏氏





大伏町(栃木縣佐野)消防組幹部

りよ右てつ向列前
りよ右てつ向列後
氏司光 木茂 氏郎次助倉熊 氏郎六 橋板 氏軍三常部矢
氏平勝 瀬佐・氏治輝 澤永・氏七保 潮廣



野毛消防組第三部表彰記念

部 幹 之 旗 彰 表 部 三 第 組 防 村 野 毛 (利 足) 縣 木 栃

宇都宮市(栃木縣宇都宮)
齋藤太兵衛氏



同
池田幸吉氏



同
高田運平氏



宇都宮市(栃木縣宇都宮)
宇塚正三九氏



同
長野作次郎氏



瑞穂野村(同
上)
増淵平右衛門氏



田原村(栃木縣宇都宮)
木村大吉氏



國本村(同
上)
本澤藤三郎氏



羽黒村(同
上)
手塚勝氏



城山村(栃木縣宇都宮)
鈴木史郎氏



平石村(同
上)
福島武宣氏



同
上
竹村松男氏



本郷村(栃木縣上三川)
小口隆次氏



穂積村(同 小山)
小林福重郎氏



同 上
小野寺利雄氏



同々田町(栃木縣小山)
柿沼熊藏氏



同 上
日向野豊次氏



栃木町(同 栃木)
廣澤辰三郎氏



栃木町(栃木縣栃木)
松本松藏氏



同 上
小橋利吉氏



同 上
高橋清一郎氏



藤岡町(栃木縣栃木)
繁岡海雲氏



同 上
阿部利三郎氏



同 上
三ツ井與四郎氏



豊田村 (栃木縣栃木)
田村新藏氏



同
柏瀬善一郎氏



同
福田覺市氏



豊田村 (栃木縣栃木)
岡泉徳左衛門氏



同
相川新一郎氏



飛駒村 (同 佐野)
恵田五一氏



赤見村 (栃木縣佐野)
割田儀三郎氏



同
金井龜吉氏



同
四十八願恒吉氏



赤見村 (栃木縣佐野)
關根忠治氏



同
大士菊三郎氏



大伏町 (同 上)
熊倉助次郎氏





鹿沼町 (栃木縣鹿沼)
山本仁吉氏



飛駒村 (栃木縣佐野)
龜山喜八氏



西大芦村 (同上)
古澤傳七氏



常盤村 (同上)
奈良部利一氏



南摩村 (同上)
牛久甚左衛門氏



西方村 (同上)
中新井和一郎氏



田沼町 (栃木縣佐野)
池澤千代松氏



水室村 (同上)
影澤谷司氏



新合村 (同上)
齋藤恒吉氏



植野村 (栃木縣佐野)
岡田半氏



同上
淺野清一郎氏



界村 (同上)
出居徳一郎氏

筑波村 (栃木縣足利)
飯田貞太郎氏



足利市 (同上)
殿岡利助氏



御厨町 (同上)
土屋莊次郎氏



御厨町 (栃木縣足利)
齋藤聯治氏



同上
小竹甲作氏



同上
笠原昇一郎氏



御厨町 (栃木縣足利)
橋本四郎氏



同上
稻村清三氏



同上
石川保二氏



御厨町 (栃木縣足利)
橋本求馬氏



同上
丸山善吉氏



菱村 (同上)
和田寅吉氏



毛野村 (栃木縣足利)
小林 英夫氏



同 上
須永 銀藏氏



小俣町 (同 上)
龜山勝太郎氏



小俣町 (栃木縣足利)
大川 義勇氏



同 上
石井 喜一郎氏



同 上
須藤 廣吉氏



小俣町 (栃木縣足利)
金子 巳之吉氏



同 上
伊藤 才次郎氏



同 上
香山 次助氏



山邊村 (栃木縣足利)
小此木 久七氏



同 上
松葉源 太郎氏



同 上
山浦 富藏氏



山邊村 (栃木縣足利)

河田吉太郎氏



同上

大關幸一郎氏



同上

前田敏一郎氏



山邊村 (栃木縣足利)

田島傳次郎氏



同上

須永傳次郎氏



葉鹿町 (同上)

大屋兵七氏



北郷村 (栃木縣足利)

眞尾新吉氏



同上

阿部章一郎氏



三和村 (同上)

殿岡正作氏



梁田村 (栃木縣足利)

阿部二郎氏



同上

石川定治氏



山前村 (同上)

大野初三郎氏



山前村 (栃木縣足利)
田野源七氏



同 上
武藤勇吉氏



三重村 (同 上)
穴原彌助氏



三重村 (栃木縣足利)
小林茅之助氏



同 上
穴原祐司氏



同 上
岩川竹次郎氏



三重村 (栃木縣足利)
岩川總太郎氏



同 上
牛窪武男氏



茂木町 (同 茂木)
渡邊武平氏



上江川村 (栃木縣喜連川)
加藤賢重氏



同 上
森長四郎氏



氏家町 (同 上)
渡邊富八氏



氏家町 (栃木縣喜連川)

粕谷仙吉氏



北高根澤村同 (喜連川)

岡本正雄氏



同 上

加藤喜一氏



烏山町 (栃木縣烏山)

荒井貞次郎氏



下江川村 (同上)

齋藤秀雄氏



(千葉縣)



序

凡そ諸制度の改善發達を圖るには其の制度の歴史を極めて經とし近代科學の精を盡して緯とせざるべからず。近時行き詰れる我國の直譯的自治制度の更新に、舊幕時代の五人組制の研究せらるゝ亦故なきにあらざるなり。

我國消防に就て見るに、紀律訓練及び消防機械器具其の他の諸設備に於ては、今昔相比すれば天地雲泥の差ありと雖、昔日の組織制度亦捨て難きものあり、之れが研究は消防發達上極めて肝要のことに屬す。然りと雖、消防歴史の研究は未だ一般的ならず、之れに資すべき纏りたる圖書の稀なるは余輩の遺憾とせし所なり。

會々大日本消防發達史編纂協會に於て大日本消防發達史第二編千葉縣栃木縣編の刊行を企圖し千葉縣廳に來りて之を謀る。余輩即ち其の學に賛し激勵する所ありしが、同會にては刻苦年を重ね今や漸く稿成り上梓するの運となり、余輩に其の序を乞ふ稿を見るに、消防の重要性、消防觀念の發生に筆を起し、全國的消防發達の狀と之に伴ふ重要記事を叙し、制度法規の改廢、機械器具、水利道路、服裝、災害豫防に關する法規並に施設後援機關、應援團體、消防組及消防組員の表彰等の變遷を録して防空と消防に及び、現代消防制度特に消防機械器具の使用法、保存法等、消防人の必要文字に力を注ぎて詳述し、千葉縣消防に關しては氣候風土の地理的考察を基礎として其の發達の跡と將來の動向を示し、海國千葉縣と山國栃木縣との對比も面白く、其の内容余輩をして満足せしむるに足るものあり。

二
今や我國消防人は昭和四年一月以來地方に依りては數回に亘り長くも 聖上陛下御親閱の光榮に浴し、昭和九年五月大日本消防協會總裁として 梨本宮守正王殿下を奉戴するの榮譽を賜り、等しく感奮興起して各自の最善を盡して其の本分を全ふし、以て 聖旨に副ひ奉らんことを期し、之れと同時に日に就り月に進む科學と社會組織及國際關係の複雑化とは、消防組の活動範圍を擴大し、其の施設と戰術に改善發達を促して止まず、消防組の改善整備、計劃されつゝあるなり。此時に當り消防發達史の刊行せらるゝは極めて時宜に適するものにして、殊に消防發達史にして消防全書の觀ある本著の斯界に貢獻する所尠少なからざるべきを信ず、敢て一文を草して序とす。

昭和十年七月

千葉縣地方警視

佐久間

尙

序

余淺學菲才を顧ず、義に大日本消防發達史第一編埼玉縣編を刊行し、今又其の第二編千葉縣栃木縣編を世に送らんとす。

想ふに我國消防は、時運の進歩に伴ひ非常の發達をなし、殊に昭和年代に於て驚異に値するものあり、是機械器具の進歩改良と、大正大震災火災其の他の變災の與へし教訓に因ると雖更に大なる原因は、天皇陛下より御親閱の光榮を賜りたると、大日本消防協會總裁として 梨本宮守正王殿下を奉戴するの榮譽を擔ひたるとに感奮興起せる消防人の、皇恩に酬ひ奉らんとする熱誠より出でたる努力にありと謂ふべし、而して方今愈益消防改善の企圖せらるゝに際し、本書が聊かにても之に貢獻する所あらば著者の本懐之に過ぎざるなり。

本書は當初千葉縣編とし、昭和九年十月を以て發行の豫定なりしも、後之を變更して千葉縣栃木編に改め、第一章以下四章に亘り消防人の須要事項、即ち我國消防組織の沿革、消防機械器具其の他の變遷、我國消防界の重大事件(第二章)、防空と消防(第三章)、現代消防組織、仰筒取扱法(第四章)等を網羅し、第五章に千葉縣消防史、第六章に栃木縣消防史を收むるの計畫の下に、内容の充實を期し、資料の蒐集に最善の努力を盡したりと雖、著者の寡聞にして調査研究未だ至らず、不備脱漏尠なからざるものあるやを恐る、諸賢之を寬恕し、叱正高教を垂れられんことを切望して罷ます。而して千葉縣保安課、千葉縣消防義會、栃木縣保安課、兩縣下各市町村消防組其の他各方面より提供せられたる貴重なる資料は、各位の芳志に報するため、豫定の頁數を増大し、之れが輯録に努めた

りと雖、紙數の増加には自ら限度あり、遺憾乍ら拾按配したるを以て、是亦諸賢の意に添はざるものあるや計り難し、偏に諒せられんことを希ふ。

本書刊行に當り、元千葉縣警察部長現埼玉縣總務部長玉田昇次郎氏、元千葉縣保安課長現千葉警察署長佐久間尙氏、栃木縣保安課長朝比奈太郎氏を初め、兩縣下各警察署長、各市町村消防組幹部各位より甚大なる援助と激勵とを賜り、千葉縣保安課々僚渡邊警部、千葉縣消防義會書記永澤武次郎、同北條角太郎、栃木縣保安課消防主任加藤警部補、同課渡邊警部補の諸氏は、公務多端なるに拘らず、資料蒐集に多大の便宜と教示を與へられ、千葉縣圖書館長宇都宮圖書館長千葉市小原大衛、宇都宮市田野邊政次郎、田代善吉、二荒山神社宮司森口奈良吉、宇都宮測候所長杉山一之、日光東照宮社務所濱口爲三、輪王寺事務所新井周一郎、日光町齋藤孝、櫻井才次郎の諸氏よりは、或は資料及資料蒐集の便宜を、或は有益なる教示を受けたるは、著者の感謝措く能はざる所にして、記して以て深厚なる謝意を表す。

昭和十年乙亥盛夏

著者識

大日本消防發達史

第二編

千葉縣
栃木縣

目次

第一章 緒論	一
第二章 消防發達總論	五
第一節 消防組	五
第一項 總說	五
第二項 徳川時代	八
第三項 明治時代前期	一四
第四項 明治時代後期	二五

消防組規則の發布—消防組點檢規則の發布—公設消防組と私設消防組—火災場取締規則の制定及改訂—消防組の改善—特設消防署—公設消防組の發達

第五項 大正時代..... 四六

消防組基本財産の禁止—道路法施行令及道路取締令—消防主任警察官の設置—消防後援機關の擡頭—消防補助團體の芽生—大正大震災の教訓—全國消防組頭會議—大正時代公設消防組發達の狀況

第六項 昭和時代..... 六

大日本消防協會成る—天皇陛下御親臨—消防及び防火思想の普及—消防組員服裝の全國的統一—特種消防研究の必要—三陸地方の震災と海嘯—函館の大火と其教訓—人口十萬以上の都市に特設消防署設置の議—總裁官殿下の奉戴—消防組の現状

第二節 消防機械器具..... 六八

第一項 總 說..... 六八

第二項 水 運 器..... 六九

初期の消防器具—天水桶—長柄杓—玄蕃桶—水籠—水運車—バケツ—水袋—水槽自動車

第三項 唧 筒..... 七〇

第一款 唧筒種類上の發達..... 七〇

總說—龍吐水—雲龍水—腕用唧筒—馬鞍唧筒—甲號唧筒と乙號唧筒—蒸汽唧筒—瓦斯倫唧筒—自動車唧筒—オートバイポンプ—ケミカルポンプ—消防船

第二款 唧筒構造上の發達..... 七〇

唧筒の種類—往復唧筒—單動式往復唧筒—空氣室の作用—複動式往復唧筒—往復唧筒の長所—同上短所—ロータリーポンプ—ロータリーポンプの長所—同上短所

第三款 唧筒附屬品..... 七二

唧筒附屬品—吸管—ストレーナー—フットバルブ—スタンドパイプ—水管—接合管—管鉗—放水銃—水管車

第四項 表 識 器..... 七二

第一款 繩..... 七二

第二款 旗..... 七二

第三款 提 燈..... 七二

高聲—小提燈

第五項 破壊消防器具..... 七三

總說—刺叉—鋸口—ツル嘴及十字鋸—斧—鋸—掛矢—ハンマー—鋸—カシヤ—引綱—ジャッキ—スタンブラー—破壊自動車

第六項 梯 子..... 七三

竹梯子—機軸梯子—放水塔

第七項 救助用器具..... 七四

總說—繩梯子—救助繩—緩降機—救助袋—救助幕及救助網—擔架—浮袋—防煙具—壓縮酸素マスク—液體空氣マスク—酸素發生劑マスク—防毒面

第三節 消 防 水 利..... 七六

第一項 總 說..... 七六

水利施設の必要—水利調査と利用方策の必要—水利の分類

第二項 天然水利と其利用要項..... 七六

海水—湖沼—河川—天然水利—用要項

第三項 人工水利

第一款 貯水池及濠

貯水池の起源—貯水池の發達—貯水池構作上の注意

第二款 用水堀

用水堀の發達—用水堀構作上の注意

第三款 井戸

井戸の發達—消防井戸に就ての注意

第四款 水道及水道消火栓

水道の意義—水道の起源—現代水道の嚆矢—現代水道施設の概要—水道消火栓

第四節 道路

第一項 道路の意義

第二項 消防と道路

第三項 道路の發達

第四項 道路取締と消防

第五節 消防用服裝

第一項 總說

第二項 徳川時代

第一款 武家火事裝束

一三三

一三三

一三五

一三六

一三六

一三六

一四〇

一四〇

一四〇

一四一

一四一

一四二

一四二

一四五

一四五

一四七

一四七

概説—火事羽織—胸當—石帯—兜頭巾—陣笠

第二款 町人火消裝束

概説—火事羽織—頭巾—股引

第三款 火消人足火事裝束

火事法被—刺子絆天—地方火事裝束

第三項 明治及大正時代

第四項 昭和時代

第六節 警戒及び警報施設

第一項 總說

第二項 警戒の方法

概説—警邏—火の香—見張

第三項 火之見

火之見梯子—火之見櫓

第四項 警報

第五項 災害通報設備

概説—火災電話—火災報知機

第七節 災害豫防

第一項 總說

第二項 消防組の災害豫防行爲

一八四

一八四

火氣取扱場所點檢—消防及警火思想の普及
 第三項 災害豫防防止に關する法規……………一六

第一款 犯罪及び一般時規定……………一六

概説—刑法—民法—警察犯處罰令—行政執行法—行政執行法施行令—道路取締令—自動車取締令
 第二款 危險物の取締……………一七

概説—銃砲火藥類取締法—銃砲火藥取締法施行規則—銃砲火藥類取締法施行細則—壓縮瓦斯及液化瓦斯取締法—壓縮瓦斯及液化瓦斯取締法施行令—石油業法
 第三款 瓦斯及電氣の取締……………一九

瓦斯業法—電氣事業法—電氣事業法施行規則—逓信省告示
 第四款 林野火災及水害取締……………二〇

概説—森林法—森林法施行細則—河川法
 第五款 家屋煙筒灰置場等の取締……………二〇

屋上制限の歴史—煙筒及灰置場の取締—市街地建築物法—市街地建築物施行令—市街地建築法施行規則—市街地建築物法施行細則
 第四項 災害豫防施設……………二〇

第一款 耐火建築物……………二〇

第二款 木造建築に必要な注意……………二一

第三款 屋内防火設備……………二二

輕便唧筒—藥品消火器—消火球—砂バケツ—砂囊—粉消末火器—ピストル型消火器—不凍消火器—泡末消火器—水道の利用—屋内消火栓—スプリンクラー—ドレンゲヤ—
 第四項 屋外災害豫防設備……………二二

第八節 消防應援團體……………二三

概説—防火林—防火林帶—防火林套—防火籬—防火廣場—水源涵養林—防砂林
 第一項 總 說……………二三

消防應援團體の意義—消防應援團體の發達—消防應援團體の類別
 第二項 私設消防組……………二四

第三項 自衛消防組……………二五

第四項 青年義勇消防隊……………二六

第五項 婦人消防隊……………二七

第六項 少年消防隊……………二八

第七項 婦人消防後援隊……………二九

第八項 火 防 組 合……………三〇

第九項 水害豫防水利組合……………三一

第十項 帝國在郷軍人會……………三二

第十一項 青 年 團……………三三

第十二項 町 會……………三四

第十三項 社會奉仕團……………三五

第九節 消防後援機關……………三六

第一項 總 說……………三七

第二項	大日本消防協會……………	二五
第三項	各府縣消防義會又は協會……………	二五
第四項	市町村消防後援會……………	二五
第五項	一警察署管區消防後援團體……………	二五
第六項	各一消防區消防後援團體……………	二五
第十節	消防研究機關……………	二五
第一項	總 說……………	二五
第二項	消防講習會……………	二五
第一款	內務省主催消防講習會……………	二五
第二款	大日本消防協會主催講習會……………	二五
第三款	府縣消防後援機關主催講習會……………	二五
第三項	組 頭 會 議……………	二五
第四項	部 長 會 議……………	二五
第五項	代議員懇談會……………	二五
第六項	研 究 會……………	二五
第七項	見 學……………	二五
第八項	刊 行 物……………	二五

第十一節 醫療機關……………

第十二節 表 彰……………

第一項	總 說……………	二五
第二項	消防組表彰……………	二五
第一款	總 說……………	二五
第二款	大日本消防協會表彰旗……………	二五
第三款	府縣表彰旗及金馬簾……………	二五
第四款	表彰狀及獎勵金……………	二五
第三項	消防組員の表彰……………	二五
第一款	特別功勞及功績章……………	二五
第二款	勳功章及勳績章……………	二五
第三款	殉 職 碑……………	二五
第四款	其他の表彰……………	二五
第三章	防空と消防……………	二五
第一節	將來の戦争と日本の位置……………	二五
戦争のスピード化—日本の位置—防護の不備—日本の危機—備へれば強し		
第二節	戦争と飛行機並に各國現有勢力……………	二五
第三節	飛行機及爆彈……………	二五

第一項 飛行機の種類……………二九二
 輕爆撃機—重爆撃機—偵察機—戦闘機

第二項 爆彈の種類……………二九三
 投下爆彈—投下焼夷彈—毒瓦斯彈

第四節 防空爲行……………二九五

第五節 各國の防空施設……………二九六

第六節 防空と消防人の地位……………三〇一

第八節 空襲時の火災……………三〇二

第八節 出動準備……………三〇四
 消防員補充計畫—擔任區域の設定と轉用法—地理建築物分布水利調査—消防機具の整備—防護團との連絡—
 出火鎮火警報の設定

第九節 消防隊の出動……………三〇六
 前進路偵察—現状偵察—前進路の開拓と指示—通報連絡機關—消防引上げ

第十節 平時の訓練……………三〇七

第四章 現代消防……………三〇九

第一節 總說……………三〇九

第一項 消防組の任務……………三〇九

第二項 消防精神……………三一三

第三項 消防人の社會的地位……………三一五

第二節 現代消防組織……………三三八

第一項 總說……………三三八

第二項 特設消防署……………三三九

第三項 公設消防組……………三四〇

第四項 私設消防組……………三四三

第三節 規律……………三四六

第四節 訓練……………三四七

第五節 唧筒取扱法……………三四七

第一項 腕用唧筒……………三四八

第一款 保存法及手入法……………三四八
 概説—保存上の注意—故障發見法—分解手入の注意

第二款 操作法……………三四二
 唧筒取扱上の注意

第二項 蒸汽唧筒……………三四四

第一款 蒸汽唧筒の構成……………三四四

第二款 運轉上の注意……………三四五

運轉開始前の注意—運轉中の注意—運轉停止後の注意—唧筒の種類による注意
 第三款 保存法……………三五〇
 第四款 故障と其の處置……………三五二

第三項 瓦斯倫唧筒……………三五二

第一款 購入時の注意……………三五四
 製作所の撰定—唧筒の撰定—收納検査
 第二款 運轉上の注意……………三六一
 第三款 保存法……………三六三
 第四款 故障と其の處置……………三六四
 瓦斯倫機關故障の原因—始動電動機の故障—發電機の故障—機關部の故障

第四項 水管……………三九六

第一款 検査法……………三九六
 第二款 使用法及保存法……………三九六
 第三款 修理法……………三九八

第五章 千葉縣消防史……………三九九

第一節 總論……………三九九

第一項 地理的考察……………三九九

概説—位置及廣袤—地勢—交通—河川湖沼—海岸線—氣候—降水計—風向—産業—消防組

第二項 行政區劃の變遷……………四〇四

第三項 千葉縣消防發達の概況……………四二三

第二節 自治消防時代……………四二三

第一項 徳川時代……………四二三

災害の記録—火災に關する布令—消防施設—初辰—久留里上水—大多喜町上水—八都村上水

第二項 明治時代前期……………四二三

戊辰の役—消防組の組織—火災場取締—火災記録

第二節 公設消防第一期……………四四九

第一項 消防組關係諸規則の制定……………四四九

消防組規則施行細則制定—公設消防組と私設消防組—消防組規則施行細則改訂—消防組規則施行心得の制定

第二項 防火取締……………四四六

森林法の制定—屋上制限規則の制定—煙突取締規則の制定—林野火災の豫防—道路取締規則の制定

第三項 消防組點檢……………四五二

消防組點檢心得要旨—消防組點檢心得

第四項 公設消防組の發達……………四五六

消防組數と其施設—消防組費

第五項 火災……………四五九

第四節 公設消防第二期……………四六一

第一項 公設消防組の勃興……………四六二

 概観―消防組規則施行心得の改正―蒸気唧筒の採用―火災豫防の諭告―火防取締規則の制定―火防組合の設置―消防組規則の制定―消防組點檢細則の定―消防技手の設置と聯合演習―消防操典と講習會―消防組規則の改訂

第二項 消防組及消防組員の表彰……………四九〇

 消防組表彰内規の法令―消防組規則の改訂―表彰授與の内規―金馬簾の制定

第三項 消防組織の改善……………五〇〇

 消防組の整理―大正大震災―消防組充實

第四項 火災……………五〇五

 災害報告の統一―重なる火災

第五節 公設消防第三期……………五二〇

第一項 消防後援會の設置……………五二〇

 概説―各警察署管下消防聯合會―千葉縣消防義會の創設―市町村消防後援會の創設―少年消防隊の出現―大日本消防協會千葉縣支部の設置

第二項 消防に關する法令の改正……………五二三

 消防組細則の制定―消防組點檢細則及消防操典の改正

第三項 消防講習會……………五二九

 成田警察署管内消防聯合會主催消防幹部講習會―茂原警察署管内消防組幹部講習會―旭町警察署管内消防組幹部講習會―八木村消防組幹部講習會―千葉縣下各警察署消防主任講習會―各消防組講習會―大日本消防協會

主催ガソリンポンプ實地講習會

第四項 公設消防組の大成……………五三

 大綱町消防組の解散―江澤巡查の功勞―水道施設の完備―令旨傳達式と令旨奉戴心得―公設消防組大成近し

第五項 火災……………五四〇

第六節 千葉縣現行消防關係法規……………五四五

第一項 消防組に關する法規……………五四五

 消防組細則―消防組點檢細則―消防操典

第二項 火災豫防に關する法規……………六〇〇

 火防取締規則―火防組合に關する件

第七節 千葉縣下優良消防組及殉職組員……………六三

第一項 優良消防組……………六三

第二項 消防殉職者……………六三

第八節 千葉縣消防後援機關……………六四〇

第一項 千葉縣消防義會史……………六四〇

第二項 大日本消防協會千葉縣支部……………六六四

第三項 各警察署管内消防聯合會……………六七〇

 千葉警察署管内―木更津警察署管内―大多喜警察署管内―千倉警察署管内―香取警察署管内―香取郡東部消防聯合會

第四項 各市町村消防後援會……………

第九節 千葉縣消防少年隊……………

第一項 總 說……………

第二項 設立の趣旨及成果……………

第三項 組 織……………

第四項 施設と活動……………

第六章 栃木縣消防史……………

第一節 總 說……………

第一項 地理的考察……………

位置―地勢―風土―河川―湖沼―産業―交通―地理的特異性

第二項 雷雨と災害……………

第三項 行政區劃の變遷……………

第二節 自治消防時代……………

第一項 徳川 時代……………

概説―町方消防制度―村方消防制度―放火及失火の刑罰―火災消除神事―火災記録

第二項 日光山内消防施設……………

概説―東照宮の建築物―消防制度―現代の山内消防設備と其の組織―山林消防に就て―御香所日記摘録

第三項 戊辰の兵禍……………

概説―筑波の亂と下仁田の戦争―野州出流岩船騒動―戊辰の戦争

第四項 明治初期に於ける消防……………

概説―栃本縣廳の火災―消防組織

第三節 公設消防組時代……………

第一項 總 說……………

第二項 公設消防組第一期……………

概説―消防組の一齊設置―消防組の組織―出火場取締規則―消防施設―醫療團救護員の火災場進出―消防組點檢規則の制定―災害豫防

第三項 公設消防組第二期……………

概説―消防組規則施行細則の改正―煙突取締規則の制定―栃木縣水道の嚆矢―署所在地火災警防心得準則―火災消防心得

第四項 公設消防組第三期……………

概説―栃木縣消防義會の創設―第一回消防組表彰式―宇都宮市の警備―消防組規則施行細則の改正―市町村支辨に關する件―消防組副組頭任命の件―消防組の組織變更申請取扱の注意―消防組規則施行細則第三次改訂

消防組員服裝の統一―危險物取扱規則の發布―消防操典の制定

第四節 栃木縣現行消防法規……………

第一項 總 說……………

第二項 消防組規則施行細則……………

……………

……………

第三項 消防組規則施行細則取扱手續……………九二

第四項 消防操典……………九六

第五節 消防機械の改善と消防組の合理化……………九五

第一項 消防機械器具の改善……………九五

 機械唧筒の整備―日光町の撤水兼用唧筒自動車―將來の向動

第二項 警報機 關……………九七

第三項 消防組々織の改善と組員素質の向上……………九八

 組織の改善組員素質の向上―消防講習會―唧筒機能検査―演習の一斑

第六節 火災と警火運動……………九〇

第一項 火災……………九〇

 概説―鐵山火災―火災記録

第二項 警火運動……………九九

 概説―第一回縣下一齊防火デー―第二回防火デー―火防宣傳活動寫眞會―火防取締優良婦表彰

第七節 組頭會議部長會議……………九五

第一項 縣下組頭會議……………九五

第二項 支部組頭會議……………一〇八

第三項 部長會議……………一〇九

第八節 消防後援機關……………一〇二

第一項 總説……………一〇二

第二項 栃木縣消防義會……………一〇三

第三項 大日本消防協會栃木縣支部……………一〇三

第四項 消防共濟會……………一〇三

第五項 市町村消防後援會、消防義會……………一〇五

第九節 栃木縣消防の矜……………一〇七

第一項 御用邸の警備……………一〇七

第二項 御親 閱……………一〇九

 水戸市に於ける御親閱 桐生市に於ける御親閱―宇都宮消防組頭の所感

第三項 消防組員の手による警備完成……………一〇三

第十節 優良消防組……………一〇三

第一項 表彰制度……………一〇三

第二項 優良消防組……………一〇四

第三項 表彰せられたる部……………一〇五

第十一節 殉難碑と消防殉職者……………一〇五

第一項 殉難警察官消防組員招魂碑……………一〇五

 建設の動機―建設費用―工事仕様―台記者の芳名

第二項 合祀殉難消防組員彰功記……………一〇五

第三項 非合祀消防殉難者の功績……………一〇三

第十二節 消防應援團體……………一〇三

第一項 私設消防組……………一〇五

第二項 自衛消防隊……………一〇七

第三項 在郷軍人會及青年團……………一〇八

第四項 婦人消防隊及婦人防火會……………一〇七

第五項 少年消防隊……………一〇五

第十三節 消防美談……………一〇八

第一項 消防組員……………一〇八

第二項 一般人……………一〇九

第七章 各市町村消防組史……………一

千葉縣之部……………一

栃木縣之部……………一

第八章 賛助員略傳……………三

千葉縣之部……………三

栃木縣之部……………三

大日本消防發達史

第二篇

千葉縣
栃木縣

第一章 緒論



恐るべき水火災一永と火とは吾人の日常生活に缺くべからざるものである。乍去一度其猛威を揮ふや、何物をも灰燼し、何物をも押流し、破壊し去る。創成期に於てノアの洪水に源を發し、史上に傳へらるる水害は枚擧に遑なく我國史に現れたる災は、吾人の出見の命の御産屋の焼失、日本武尊の焼津の征火以來、吾人の先人と火との争闘はあまたなり、而して、人智進み、經濟組織の發達に伴れ、水火によつて人類の被る災禍は愈甚大となり、其原因は益々多きを加へ、災害の發生は豫斷を許さず、今日の發達せる科學の力を以てしても完全に之を豫知し、若しくは豫防すること困難であつて、萬一之れが防禦の時機を逸し、又は其手段を過るに於ては倏急にして財寶を滅し人命を亡し、爲めに社會の生活を脅威し、産業の發達を阻害し、國力を消殄し其の及ぼす影響は甚大にして計るべからず、實に恐るべきは水火の災害である。或はいふ、水火災は恐るべし、然れども其損害は保險を附することによりて補填し得らると、此言たるや一理あるが如くなれども、思はざるの甚だしきものである、如何にも個人的損害の一部若しくは全部は、保險によりて補ひ得るならんも、流失し又は焼失したる財寶それ自體は、如何なる努力も、如何なる金力も、又如何なる權力も、之を舊に復せしむる能はずして、永久に國家社會の損失たるのである、況や金錢

を以て計り難く、又再び得る能はざる貴重なる人命、史料、學術資料、美術品、記念物等は何を以て補填し得るといふか。さればこそ、太古より水火は極度に尊重せらるる反面に於て、極度に恐怖せられ來つたのである。

消防施設の發展は焦眉の急務なり 水火災の恐るべきは前項述べたる如くなるを以て、大古以來人類と水火との闘争は斷ゆることなく、未來水劫漸次に變化し、『消防』は新しきに向つて進むべきは言を俟たぬ。消防施設即ち人類と水火との争闘機關の我國に於ける發達狀況を一瞥するに、慶安三年六月二十三日江戸に定火消二組の設置せられたる以來漸次に發達し、明治以降我國文化の著しき進歩は消防施設に一大改革を促し、殊に明治二十七年二月九日勅令第十五號を以て發布せられたる消防組規則は、我國消防施設の發達に大改革期を劃し、歐州大戰による我國工業界及び經濟界の異數の躍進は、科學の進歩と共に、消防機械器具の改善充實、道路の改善、耐火建築の増加となり、消防施設を改善せしめ、消防方法を發達に導き、今日にして過去を顧みれば今昔の感深きものあるなり、然りと雖、文化の進歩は火災の素たる石炭、石油、瓦斯、電氣、化學藥品、火工品等を續々産出せしめ、工業の發展は、火氣を使用し又は發火の危険多き各種製造工業を盛大ならしめ、社會組織の複雑化は、火氣を以て扱ふ職業を益々多くしたるのみならず、放火其他の火災原因を愈増加せしめ、火災による損害のみにも年額億を以て數へしむるに至り、水害、震災、風害等の災禍之れに加はり、昨昭和九年に於けるのみにも、大風雪中の函館の大火、北陸地方の大水害、京阪地方の大風害等相亞で起り、小なるものは枚擧に遑なく、其損害額は極めて巨大にして、消防智識の普及、消防施設の改善、警火思想の徹底、災害防止の考究等を圖るは焦眉の急務といはざるを得ない、加之、消防の事たるや、將來の國防、殊に防空に極めて緊密なる干繫を有するを考ふるべき、其の發達は一日も忽にすべからざるものなりといふべきである。

歴史の重要性

世上の事物は時の推移に伴ひ、進歩と退歩とがあり、榮枯盛衰があり、而してそこに歴史が生ずる。

のである。止まることは退歩を意味し、遂には衰微となり、破滅に至る、進歩は盛大を來し、強力を齎らし繁榮を致す。而して進歩する爲めには故きを知りて新しきに備ふべきであつて、故きを案むるは新しきを知ることである。そこに歴史の重要性がある。何事によらず其發達過程を知らずして其の進歩を計るは極めて困難であつて、國史を初め各種の歴史が研鑽討究せらるる所以は茲に存するのである。歴史なきか歴史を知らざるか、又は歴史に重きを置かざるもの、如何に哀れなるか。見よ猶太人を。彼等は世界一の政治家、世界一の宗教家、世界一の學者、世界一の富豪世界一の實業家を出し、亞米利加大陸に於ても、歐州大陸に於ても陰然たる大勢力を有し斷然地を抜く優秀民族である、然るに彼等は不幸にも國史を有せざるが故に各國人より迫害され、彈壓され、其堵に安んじ得ざるの現状にあるにあらずや、之れに反し我國は上に一天萬衆の大君を戴き、開闢三千年の燦たる歴史を有し、國民は之を以て矜とし萬民等しく皇恩に報じ且つ光輝ある歴史を汚さざらむことをこれ力むるの結果は、堂々世界列國に伍して巍然たり得るのである。支那を見よ。其國民の大多數は自國の歴史を知らず、其結果は團結心の強固なる國民を擁しながら氣息奄々たるにあらずや。例を國外に採るまでもなく我國に於ける過去七十年を顧るに、明治維新の大業は國史に目醒めたる國民によつて大成せられた、然るに之れによつて徳川三百年の鎖國主義は覆り、西洋の物質文明潮の如く我國に流入したる時、我國民は之れに眩惑し、一にも西洋、二にも西洋と西洋を謳歌心酔した、其結果彼の文化は精神的にも我國民を支配し尊き歴史をも忘却せしめんとし、識者をして寒心に堪えざらしめた、幸にして内に允文允武の明治大帝ましまし、其御稜威と有司有識者の努力とがあり、外に日清、日露の二大戦により我國に對する認識を新にした外國人よりの刺戟あり、國民をして國史的觀念を起さしめ得て愈國は隆昌に向つた、かくて又幾何ならず、歐州大戰の結果我國は世界五大強國の一に列せられたると、有史以來の經濟的好景氣に國民が有頂天になりたる隙に乗じ、國史的良心の麻痺せる一部の徒輩のため患され、思想的に一大危機に逢著し將に累卵の危きに陥らんとした、此時に當

り内に五・一五事件、血盟團事件等相亞で起り、外に滿洲事變、上海事變、國際聯盟退問題等あり、亂打された「非常時」なる大警鐘に國民は國史の上に引き戻され、「建國の昔に返れ」「日本精神を作興せよ」と、今更の如く騒ぎ立てたるは諸氏のよく知る所であらう。是を以て之を觀れば、歴史の必要なるは目から明かである。

消防發達史研究の必要 消防の發達を圖ることの焦眉の急なること、發達進歩を計るに歴史を知るの必要なることは以上述べたるが如くであつて、消防の發達を期するには其發達史を研究するを要するのである。消防智識の普及を圖り、消防施設を發達せしむるの途は元より一二にして止まらず、然れども既に述べたる如く故きを索むるは新しきを知ることであつて、古き消防施設の中にも今日採つて以つて範となすべきものあり、又其非なる點を知るは新たなる施設をなすの参考となすべしである、消防機械器具の發達過程を知りて今日のそれに及び、機械器具の採用に當りて切角大金を投じて購入したるものを、徒に使用せずして腐朽せしめたるが如き愚かしき前轍を踏まざるを得べく、又は新たなる考案工夫を講じ得べし、若し夫れ身を挺して難に赴き、自家の燒失するをも顧ずして猛火と闘ひ、或は又最愛の妻子眷族を捨て、激流に抗し、犠牲的精神と、任侠的意氣とを以て、義勇奉公の誠を致したる前人の活躍は懦夫をして感奮せしむべきものあるべく、かゝる活躍を知るは消防精神の作興に益する所極めて大なるべし、かるが故に吾人は敢て消防發達史研究の必要を大呼するものである。

本書刊行の目的 消防發達史研究の必要なるは前項述べし如くなりと雖、消防に關する文獻は之れを得ること極めて困難である、之れ此種の研究が從來あまり行はれず、法令通牒の類兎角散逸し、殊に古文書に於て甚しきものあるが爲めである、本書は即ち出來得る限り之等を蒐集し、順を追ひ序を正し、消防に關する重大なる出來事を載せ、消防界の過去の發達の經過を窺ひ、將來の進路を洞察し易からしめ、消防人の人物評傳をも併せ録し、大いに消防精神の作興に寄與せんとするを目的とするのである、千葉縣と栃木縣とを併合したるは、前者は長き海岸線を有し、後者

は然らず、此兩者の間自ら消防の發達に相違あるを以て、彼我比較研究に便せんが爲めである、現代消防に就て記載し、現行法規、現行消防操典を加へたるは消防研究に缺くべからざるを以てである。

第二章 消防發達總論

第一節 消防組

第一項 總 說

消防觀念の發生 自己の安全を圖り、同族の發展と繁榮とに努むるは動物の等しく保持する本能である、人間と他の動物の異なる所以は人間に隣保の情と、相互扶助の精神あり、而して共存共榮を希ふにある、火の用心は各人の自己防衛に基き、消防は尊ぶべき隣保の情より發す、といふことが出来る。

太古にありては一般人は火を得るに難く、社祠より所謂神火の授受を受けるの風であつた、従つて火は神聖なるものとして尊崇せられ、鄭重に取り扱はれ、自然失火等は稀有であつた、萬一火を失するが如き事あれば、神の怒に觸れたものとなし、樹枝の摩擦による自然發火、又は雷火等のことあれば天譴なりとして恐れおのゝいたのである。

人智啓くるに従ひ檜材を摩擦する方法より轉じて、石と石、石と金屬とを摩擦して火を得る方法を知り、燧石の發見となり、火を得ること容易となりたると共に、日常生活に火を用ふることも次第に多きを加へ、従つて失火の度數を増した、茲に於てか自己保全自己防衛のために火の用心を始め警火に努むることとなつた、此時代に於ける社會制

度は幼稚であり、經濟組織も未だ發達せず、生活様式も簡單であつて、人口稀薄なるが故に人家密接せず、故に萬一出火ありても消防は容易であり、場合によりては家屋を破壊して防火するにも大いなる手間を要しなかつた、而して家屋の散在はそこに自然の防火地帯ありて、延焼を阻止するには極めて便利であつた、乍去消防の器具なく、又他人の應援を求むるに困難であつて、火災より自己及び自己の財産を保護するには、火の用心を嚴にして失火なきを心掛くるの外途はなかつたのである。

人は孤獨にて生活を営み得るものにあらずして必ず家をなし、部落を形ち造り、團體生活をなすものである。而してそこに隣保の情、相互扶助の精神を産す。一度近隣に出火の不幸あれば、之に赴きて防火に竭して隣保の誠を致し、水害の襲來するあれば、相協力して之れが防禦に當り、共存共榮の實を擧げ、かくて部落の安寧を維持し、其發展に専念するのである。水火災害の警防の觀念換言すれば消防の觀念は即ち隣保の情、相互扶助の精神に原因するのである。

消防組の起因 人智の進むに従つて火を取扱ふ度数を増し、其量多きを加へ、社會制度は複雑となり、經濟組織は向上して分業行はれ、諸種の發明なりて火災の原因は愈多種多様となり、家屋の如きも規模は大となり消防は困難となる。之れに加ふるに部落は發展し住家は漸次接近し、一朝火を出せば倏ち隣家に延焼するの危険を生じ、經濟的觀念の進歩は財物の貯蓄となり、災害による損害は次第に増大される。よつて一面に於ては家屋の周圍に溝を設け、牆壁を築き、防火籬を設置し、構内に井戸、池を掘り、財物の貯藏場所を堅固に構築し、自警に努むると共に、一面に於ては部落を防護し、災害を防竭するため部落民は共同して活動を開始するに至つた。なれども動作に秩序なく連絡なき鳥合の衆にては、徒らに混雜を來すのみにして効果的ならざるを以て、自然陶冶之れに働き、任俠的、犠牲的精神の所有者一團となり、災害によつて訓練せられ、經驗によつて統制され消防組なる團體を生じた。即ち消防組は隣

保の情、部落愛、郷土愛に立脚し、任俠的犠牲的精神によつて生れた團體なりといひ得るのである。

消防組の發達 斯の如くにして生れたる消防組は、自治的であつて何等の受くべき拘束なく、自由であつて自治的なるが故に、一面に於ては發達の思はざるものがあつたが、各組間の連絡統一なく、組によつて組織、統制、區域を異にし、各組間の闘争生じ易く、意氣に於て旺なるものもあるも、團體の力を利し安寧秩序を紊す徒黨たる感もあつた故に政治機構發達し來るに従つて、治安維持の上より又政治的見地より、或は消防組の取締を行ひ或は之れを指導誘掖して、以て時代に即する發達をなさしめ、又或は行政の一部として政府自ら消防の事を司るに至る。これ各國を通じての消防施設の發達の順序である。消防は災害多き地に於て發達するは見易き道理である、火災に就て之をいへば氣候溫和なる地よりも寒暖の差甚しく寒氣烈しき地に於て、風の少なき地よりも突風、強風多き地に於て、平坦の地より海岸に沿ひ一方に山岳丘陵ある地に於て、人口粗雑なる地よりも人口稠密の地に於て火災多く、又其災害の程度大である、従つてかゝる地には消防は發達するのである、故に消防の發達は氣候、風土、地勢、人口に關係すともいひ得るのである。消防の發達は産業に關係するものであつて、農村、漁村に於けるよりも製造工業の發達せる地に於て發達す、これ單に農村漁村に於けるより、工業地か人口稠密なるばかりでなく、工業地は火災の原因多く、其損害の程度大なるか故である。

消防組の發達は種々の角度より之を觀察し得らる、即ち組織、規律、訓練、機械器具、水利、救濟、醫療、消防及防火思想等であつて、之等が均衡してこそ完全な發達といへる、若し假りに茲に一つの消防組があつて、一臺の精銳なる自動車唧筒を設備したとする、然る時其組は機械に於て發達したといひ得る、然し其時に當り其組に此自動車唧筒を使用するに足る水源がない場合、吾人は之れを直ちに其組の發達なりといひ得ない、其唧筒を利用し得る水利が完成され、其唧筒を運轉し得る道路が完成されてこそ、初めて其組は發達したりといふべきである、此意味に於て如

何に機械器具が完備され、他の施設亦之れに相應じたりと雖、若し組の質に於て不良なれば、之亦發達したるものとはいふべきでない。何れの角度より觀察しても不均衡ならざるものをこそ、發達せる消防組といふべく、一步進みては量に於けるよりも、質に於ける發達こそ望ましいのである。

八

第二項 徳川時代

徳川時代以前の消防施設 史書を翻いて我國水火災及び消防施設を索むるに、火災に就ては上古に於て彥火々出見命の御産屋の焼失を初めとし、自火の記録尠ならず、雷火、山林の自然發火、地震に伴ふ火災等も隨所に之れが發見せられ、日本武尊の征火を筆頭に兵火は枚擧に遑なく、殊に戰國時代においては焼打ちは有力なる戦法として用ひられ、爲めに國民は塗炭の苦みを受けた、而して都市の發達と經濟的進化とは一層火災を多からしめ、因つて被る損害を増大した。去り乍ら徳川時代以前にありては、火災起れば衆人馳せ集りて消火に努めたるに過ぎずして、團體的防火施設はなく、各自々家防衛を第一としたのである。水害の記録も、河川の氾濫、津浪の襲來等、一々擧げて數ふる能はざる程であるが、之れが防止は極めて困難であり、大規模に行ふ必要あり、時の爲政者は治水に可なりの努力を致したるは隠れなき事實である、然れども一度水害の襲ひ來るれば、之亦烏合の衆人之れが防禦に當りたるのみにて、其れに處すべき團體的機關は無かつた。

然るに文教の進化と、佛敎の勃興と、建築術の發達とは、殿堂の規模を大ならしめ、殊に佛閣は宏莊を極むるに至り一は其崇嚴を加へ、一は水火災防護のため、第一に地相を撰み、其周圍には牆壁を高くし、濠を穿ち、防火林を圍らし、境内には泉池や廣場を設け、葦くに瓦を以てし、宮殿官衙亦概ねかくの如くであつた。若し夫れ城砦に至つては攻防戰略上、更に一層の嚴重さを加へ、其築造法に特種の發展を遂げた。庶民の住家も豪家豪族といはるゝ程のもの

は、其邸宅を城廓に擬したるもの尠ならず、各種災害に對する防衛に汲々たるものありて、細心の注意と努力とが之れに拂はれたのである。

我國消防の濫觴 かくて徳川家康天下を統一し、江戸に幕府を定むるや、衆人こゝに集り、江戸は急速なる發展をなし、殊に政策上參勤交代の制を布き、各人名の正妻嫡子を江戸に止めしむるに及び、諸大名に附隨して江戸に來り住するもの夥しく、草ばうくたりし武藏野の一角に、忽然として大都市を出現せしめ、人口は日に稠密となり、經濟學的原理によつて分業は盛となりて、火を取扱ふ職業は多きを加へ、各種産業は旺となつた。人口が増加し人家稠密となり産業發達して分業行はれ、火氣を取扱ふ者多きを加ふれば、災害も亦多くなるは免かれ難い約束である。此約束に従つて江戸の股賑を増すと共に火災漸く多きを加へた、然も此時代において社會的組織も相當複雑となり、之れに原因する火災即ち放火其他も多く、幕府も之れが取締及び防備に腐心したのである。然るに幕府の苦心も何の效果なく、江戸の繁榮を増す度と正比例して火災度數を増し、一度出火すれば大火となり、財寶を燒燼するのみならず貴重なる人命をも損した。其原因を考ふるに、江戸の地は乾燥期に於て筑波嵐と稱する空風吹き、四五月の候亦大風多く、地勢は下町と稱する平坦地と、山の手と稱する丘陵地とよりなり、高輪臺、赤阪臺、麴町臺、本郷臺、道灌山等が下町と山手とを劃し、江戸中にての火事の本場たる神田は水利悪しく、小石川、神田方山よりの出火は防禦極めて困難である、加之家屋は草屋根多く、大風に誘はるる飛火は延焼を大とし、消防器具の不備は消火を困難ならしめた。茲に於てか幕府は一面に於て嚴重なる規程を設けて警火に努むると同時に、一面に於て消防隊を設け火災の防禦に當らしむることとし、慶安三年六月二十三日『定火消』と稱する消防團體二組を設置した、之れ我國消防の濫觴である。

江戸火消の發達 前項に於て述べし如く、江戸の發展は火災を多からしめ、地勢、風土の關係及び家屋、水利、消防器具等の不備は大火の因をなした。されば之れに備ふるため、大商店にては自家防衛の必要上、各自相當の消防施

設をなし、後に所謂店火消と呼ばれるまでに發達したるも、之れには別に組織もなく、消防團體と認むべきものでは無かつた。慶安三年に至つて幕府は定火消二組を設けて消防の事を司らしめたが、明暦三年正月十九日、本郷丸山本妙寺より發した彼の有名な振袖火事は、江戸城本丸をも灰燼に歸せしめ、將軍の居所にも差支を生ぜしめた、茲に於て幕府内に於て『制度粗略の議』なる聲高く、明暦四年即ち萬延元年火事場定法が定められ、定火消四組を増設し、同二年八月更に二組を、同三年十一月尙ほ二組を増設し、後之れを十五組としたが、其後鐵砲七組、弓三組の十組に改め、八代州河岸、赤阪溜池、半藏門外、御茶水、駿河臺、赤阪門外、飯田町、小川町、四谷門外、市ヶ谷左内坂に火消屋敷を設けて之を屯せしめた。之れと同時に萬治元年店火消を基調とし、江戸二十三ヶ町に町火消を設置せしめ大岡越前守町奉行たるに及び、之れに大改革を加へていろは四十八組と、本所深川の十六組とした、定火消、町火消と相前後して設けられたるものに大名火消がある、此大名火消は大名の屋敷を防護するを主眼としたが、附近の火災にも出動して活躍し、其出動範圍は藩の大小によつて、屋敷より八丁以内、五丁以内、三丁以内等と定められたるを以て別の名を八丁火消、五丁火消、三丁火消等と稱へた。以上は専ら市内各方面の消防に當つたのであるが、江戸城廓守護の眼目から、明暦三年二月八組の大名火消を以て櫻田方、大手方、下谷方なる三方面の方向火消を設けた、而して又幕府要所及び倉庫を防禦するため、享保七年所々火消を設け、二の丸、紅葉山、吹上、淺草米藏、本所米藏、猿江材木藏、芝増上寺、上野寛永寺、湯島聖堂等に火消役を置いたのである、かくて江戸火消は漸次充實せられた。武家方と町方との二つに源を發した江戸火消は、自から其發達に二潮流を生じ、八丁火消其他を除きたる武家方火消、即ち定火消、方向火消、及び所々火消は警護に流れて消防は第二義となり、町方火消は消防に専念するに至りたるは當然のことである。最初は町方火消は武家火消の上に立つことを禁ぜられ、武家の屋上に纏を立つることを許されず、火消屋敷の警報が發せられたる後でなければ、町火消の半鐘を打つことは出来なかつた、町火消の江戸城内に

入るを得なかつた事は勿論である。然るに町火消の消防技術の進歩に伴ひ、武家方火消は火災場裡から驅逐され、遂には城内の火災にも町火消が活躍するに至り、町火消は次第に職業化し、専門的となり、江戸の華と謳はるゝに至つた。此間にあつて大名火消は、同じ武家火消ではあつたが、大いに消防技術の練磨に努め、彼の有名な加賀鳶の如きは、いろは四拾八組に伍して其勇名を轟かした。

江戸の消防制度 幕府は江戸に定火消、町火消等の火消組を設置すると共に、之れ等火消組の監督火災場の取締を如何にしたか、廣義の消防制度を検討しよう。

先づ幕府の構成を見るに、大老及び中老を最高幹部とし、大老は時に之を缺く事があつて、實際の仕事は中老之を行ひ、其次ぎに若年寄、奉行があり、江戸の治安維持は三町奉行之を執掌した、而して定火消は旗本寄合衆から任命した關係上、中老の直屬とし、中老之を指揮監督し、町火消は町奉行之れが監督に當つた。火災場の取締については寛永十九年の火事場規則に

一、當番の老中一人火元に罷出、其他も池田信濃守、池田佐渡守、池田下總守、出倉淡路守、日置若狭守五人の中、二人宛火元へ出合消させ候、下知裁判老中示し合ひ申し付くべき事

とある。其後消防のことは専ら若年寄の所管となり、其支配下に定火消目付、火事場見廻、使番を置き、町奉行と協力消防に努めた、即ち出火あれば定火消目付は直ちに出演して火消役を指揮し、専ら消防に努め、使番は火事場の状況を中老及び若年寄に報告し、其報告によつて中老、若年寄の出演となつた、尤も目付出役なき場合、又は火消役あらざる場合は、使番は之等に代り火消人足を指揮した。享保元年の令に

使番火災の地に使すは火之様防禦の體を見て言上するを専らとし防禦を指揮するに及ばず然れども若し思ふ所あれば後日小老(若年寄)まで申出るか又は其他に於て火消役に代り後小老に告ぐるかそは便宜に従ふべし従者やゝもす

れば無頼の振舞して火消の妨げある由聞ゆよく戒むべし

とあり又目付、使番共に火消役の活動振、焼跡巡視、被害状況の調査報告の任務を有して居つた。同令に目付使番火消の可否を檢察せんに火の向ふところを防ぎ火を消したるも屋舎をこぼちて蔓延せしめざるも同功とすべしよく見分けて聞え上ぐべし

と、其職務の執行上の注意を與へて居る、之れによつて其職掌を知ることが出来る、奉行も出火と同時に部下の目付與力及び同心を従へて現場に出役し、町火消の指揮と火災場の取締、警備、避難民の指導、救済をなした。定火消目付使番及び奉行は乗馬にて、天を焦し火に這ふ猛火の中に乗り入れ、乗り廻し、或は八方より駆け寄せ来る群衆を馬足にかけて道を開かせ、或は焼け募る火、山なす家財、行きづまりの袋地、渡るべき橋焼け落ちたる等にて逃げまどろものを勞り助けつゝ、火元、後火、先火、火の手、風筋を見極め、火掛の早出、おそ出、消口、持場等の火消の活動の視察及び指揮をなし、馬上にて報告を認めて誤ることなく、其活動の機敏にして、指導及び報告の正鵠なる、驚くばかりであつたといふ。

幕府は定火消、町火消其他の火消組を設けて火災の防禦に當らしめ、定火消目付、使番、奉行等をして現場に於ける火消の指揮監督を掌らしめ、而して中老若しくは若年寄之れが總指揮をなす等、火災防禦に努むると共に、一面に於ては火災の豫防に留意し、或は家屋に制限を加へ、或は要所に廣場を設け又或は火災の一大原因たる喫煙禁止法を制定したると同時に

頃日風吹きて屢失火せり是れ全く警火おろそかなるによるなり前令を守り籠桶などに消炭貯ふべからず委巷までも數回見巡りて火を警むべし、又頃日市井に火賊ある由聞ゆ前にも深更に往來するものあらは一町限りに拍子木をうちて送り怪しげなるものあらば捕へ訴へ出つべしと令せしに不審なるもの搦め出せし事も聞えず等閑なる由聞ゆい

と僻事なり今より後番人共へ嚴に諭すべし

と自身番に令して大いに戒飾を加へ、他の一面に於ては一般民に臨むに嚴罰主義を以てし、警火思想を徹底せしめんとした、即ち失火は遠島又は重追放に處し、江戸市中に居るを免さず、加刑として闕所を課して財産の全部を没收し下女、下男等の雇人の罪も其主人をして責任を負はしめ、放火犯に對しては火刑の極刑を科し、親子親類縁者に闕所を申渡した。享保四年の高札には次の如く記してある

掟

一、火を付くる者をしらば早々申出べし若し隠置くに於ては其罪重かるべし、たとひ同類たりといふとも申出るにおいては其罪をゆるされ急度御褒美下さるべき事

一、火を付くる者を見付けは是を捕へ早々申出べし見のがしにすべからざる事

但あやしきものあらばせんさくをとけて早々奉行所へ召連可來事

一、火事出來の時みだりに馳せ集るべからざる事

但役人指圖のものは格別たるべき事

一、火事場へ下々相越理不盡に通るにおいては御法度の旨申さかせ通すべからず、承引なき者は搦め捕るべし
万一異議に及ばず討捨たるべき事

一、火事場其他いづれの所にも金銀諸色ひろいとらば奉行所迄持参すべし若し隠置き他所よりあらはるゝにおいてはその罪重かるべし、たとひ同類たりといふとも申出る輩は其罪をゆるされ御褒美下さるべき事

一、火事の節地車大八車にて品物を積みのかべからず、鎗長刀脇差ぬき身にすべからざる事

一、車長持停止す、たとひあつらひ候ものありとも造るべからず、一切商賣すべからざる事

此高札を見れば幕府の火災取締の方針の大體が想像されよう、最後の條にある車長持とは、長持に車を付し其儘にて運搬し得るものである。

此外に警火の手段として風見役と火の番とがあつた。火の番に就ては後章に述ぶが今日の火の番の因をなすものであることはいふまでもない。

風見役は町奉行に屬し、大風吹く日、乗馬にて市中を馳せ巡り、要所々々にて風位と火の用心とを大聲に呼び、火と出火の發見に努めたもので、木枯吹きすさむ寒夜、かつ／＼と馬蹄を轟かせながら『北西の風が強い、火の用心さつさりませう』などと叫ぶ陰凄な風見役の聲は、市民の肝に銘せしむるに足るものがあつといはれて居る。

江戸火消の組織 然らば江戸の火消の職務及び組織は如何であつたか、又如何なる活動をしたかに就て述べて見やう。

定火消 定火消は今日の官設消防（特設消防）であつて、軍隊を兼ねたもので、火消屋敷は消防署と思へば大差はない、而して其長を火消役といひ、其下に與力六騎、同心三十人か配屬され、外に多數の火消人足を置いた。其職掌は火消役は消防署長與力は消防士、消防機關工、同心は消防曹長ともいふべく、又それ／＼組頭、部頭、小頭にも該當する。火消役は旗本寄合衆即ち非職旗本の高祿者から任命し、食祿以外火消役給として三百人扶持が給與された、然し數多の火消人足への支給其他、全般の費用は一切火消役の負擔であるが故に、其失費甚しく、高祿の者でない限り任務を全ふしなかつたといふ、大久保彦左衛門が火消役を仰付けられた際、幕府の大官や大々名に無心し、費用を集めたといふ巷説は、此邊の消息を傳へて面白いことである。火消人足は火消役之を抱えるに當つては、不逞無頼の徒であつても問ふことなく、たゞ精悍なる者を選んだ、之れ當時の幼稚なる消防器具を以てしては、肉弾を以て防禦

するの外なく、破壊消防が最も重要な消防戰術の一であつた關係にも因る、而して其等火消人足の活躍は實に目醒しきものがあり、一旦火災起れば身を挺しよく犠牲的精神を發揮し、常に火に斃れることをモットーとした、其結果は自然粗莽なる行爲多く、世人之をぐわえん（或書には臥炎と書く）と呼び、亂暴者の代表者として恐れられた。

火消屋敷は今日の消防署で、與力、同心は交代にて晝夜を別たすことに勤務し、火消人足は屋敷内に起臥した。火消屋敷の玄關脇には纏、高張、手提灯、指叉、玄蕃桶、蕪口、梯子、掛矢等の消防用具が備へられ、其外に鐵砲、弓が用意された、消防用器として龍吐水の加へられたのは後のことである。屋敷の一部には火の見櫓があつて、太鼓、版木、半鐘が用意され、同心が之れに登つて絶えず見張りし、出火の發見に努めた、櫓上の見張からは詰所に糸又は針金を引き、其端に鳴子又は鈴を付し、櫓上にて出火を發見すれば其糸を引きて出動を知らせ、一方太鼓又は半鐘を打ちて警報を發した、警報には最初は太鼓又は版木を用ひたか、後には版木は與力同心等の交代出入の合圖にのみ用ひられたのである。夜は詰所に當番の不寝番を残して寝に付くが、人足共は長い丸太を枕とし之れに頭を並べて寝る、而して火の見櫓から通知あれば、不寝番は掛矢を以て丸太の端を打ちて、人足共を起したと傳へられて居る。火の見櫓は三丈以上を定法とし、火消屋敷以外三丈以上の火の見櫓を建てるのが禁じてあつた、又火消屋敷より警報の發せらるゝ前に、町火消等にて半鐘を打つことも禁じられた。

扱て警報發せらるゝや、火消役及び與力は乗馬、同心と火消人足は徒歩で現場に急行するのであるが、同心は鐵砲又は弓を携へ、人足は纏其他の消防器具を携えた。火事に鐵砲を持ち行くは一奇であるが、定火消の任務は消防と同時に江戸城廓の警固を主としたからである、同心が火災場の警備と城の警固に當る一方、人足は消口を占領し、第一に家根に纏を樹て、汪水の目標とし、玄蕃桶其他で水が通ばれ、又又又や蕪口を揮つて家屋を破壊する等の活動が演ぜられた。定火消が設置されたるは慶安三年六月に、當時二組であつて其後漸次増設されて十五組となり、後十組

を以て江戸城東西南北を固めたことは前に述べたが。(1)定火消の重大なる任務の一角が江戸城の警固にあつたがため、其本来の目的に進みたること、(2)火消人足所謂ぐわえんと町火消及び一般市民との衝突喧嘩の多かりしこと、(3)町火消の發達長足なりしことの三つの理由により、次第に定火消は市内の火事に出動することを止め、其の数は減ぜられ幕末にありては四組となつた。

町火消 町火消は其源を店火消に發する、店火消とは江戸の大商店が自衛のため設けたものである。明暦三年正月の大火に苦汁を嘗めた江戸市民は自警の爲めに騒起した、而して店火消を基幹として各町内の警備に當ることゝなつた、こゝに於て幕府も之を認め、各町月行事をして之れを指揮せしめ、町奉行の監督の下に置くことゝし、萬治元年町方火消の制を定めた、此時設けられたるは二十三ヶ町、人足百六十七人で各町毎に小旗を標識とし、人足には木札を渡し火消人足たることを證した、其當時の規定は大略左の如くであつた。

- 一、出火の節は直ちに規定の人足を火元に出すこと。人足には町の名と紋とを附したる袖無羽織を着用せしむること
- 一、町々より月行事家持一兩人附添ひ火消人足を指揮すること
- 一、火消人足は月行事の下知に従ひ火災場等にて喧嘩口論すべからざること
- 一、火の蔓延を防ぐため家屋を破壊するとも家主は苦情申聞敷こと
- 一、火鎮まりたる時は火消人足の札を改め不參のものあれば科料に處すべきこと
- 一、近所出火の節は町民皆駆け集り消防に従ふこと。其場に出でず自己の道具取片付け居るものは組はづしとするこ

其後三年を経たる寛永元年には

- 一、町中火事出来候節は向三町左右二町裏三町火元一町合せて九町早速駆け集りて火を消し片町ならば左右二町裏三

町火元一町共に合せて六町駆け集り火を可消事

と規定され、同時に各町に手桶梯子等を設備すべき令があつた。其後幾多の變遷があつたが、八代將軍吉宗大いに消防に留意し、自ら火消役を指揮指導し、又時の町奉行大岡越前守に命じて町火消の大改革を行はしめた、即ち享保三年町火消の存在を組合繪圖によつて區域を分類して取扱ひ、同五年之を改正割直し、いろは四十七組に別つた、町火消に纏の使用を許したるも此時からである、然れども四十七組に別ちたることは細分に過ぎたので、同十五年江戸を十區とし、四十七組を分屬せしむることゝなつた、其町觸には

町中出火有之節風上風脇左右六町より駈寄消留候義彌只今迄の通吃度可相心得候

右の外只今迄は江戸中四十七組に相分ち一組宛の人数集り他組よりは不罷越候定に候得共一組の中にも風下の町々よりは人足出兼候に付今度四十七組を十組に割り其組合の内にて風上風脇の町々より駈集り消火候様可致候其組合の中風下の町には飛火無之様自分の町内相防ぎ可申事

この時の組分を見るに

- 一番組 い組 は組 に組 よ組 萬組
- 二番組 ろ組 せ組 も組 め組 す組 百組 千組
- 三番組 て組 あ組 さ組 き組 ゆ組 み組
- 四番組 こ組 え組 し組 ゑ組
- 五番組 く組 や組 ま組 け組 ふ組
- 六番組 ゐ組 の組 お組
- 七番組 な組 む組 う組

八番組 ぼ組 わ組 か組 た組
 九番組 れ組 そ組 つ組 ね組
 十番組 と組 ち組 り組 ぬ組 る組 を組

右の中百組千組萬組のあるはへひら等を忌みて之れに代へたものである。其後本組を三番組に加へて四十八組となり本所、深川の江東地域に十六組を置いて之を北中南に三分し、元文三年には十組を八組に改めて幕末に至つた。其組織は組頭、道具持、平人足で道具持は纏持、鳶、梯子持で後に筒先を置き更に副組頭を置いた。

町火消は町の辻其他町内の要所に詰所を設け、其傍に竹梯子を樹て之れに半鐘を吊し、之を打ちて警報とし、大風の時又は火災時期には當番は詰所に詰めて非常を警戒し、又町内を巡邏した。

定火消が江戸城警固の任務を負ひたるに反し、町火消は全く消防に専心であつた、而して其根底には愛郷の念と相互扶助の思想が燃えて居た、従つて其發達も著しく、がんばりも強く、犠牲的精神と任侠の意氣が旺であつた、消防に専念するの結果は自然専門的となり、職業的となり、世襲的となりて身體の鍛練に勉め、高所に登ること、高所に於ての作業を熟練し破壊作業に必要な鳶の使用法にも獨特の技術が生じ、茲に新たな鳶職なる職業をなし、平時に於て足場を作り、建前をなすといふ風になつた、而して世襲的となつた結果は親分子方の制を生み、團結を強くし任侠の風は益々となつたが、其反面には意地を張り、最初取つた消口は之を死守すとの意味から、第一に纏を樹てた者は後に登つて來つたものか退かざる以上、退却出來ぬといつた不文律を生じ、爲めに死に至つたものも少なくない、又消口の占領のため衝突を生じ喧嘩となり、爲めに第一義たる消防を粗かにした事も争はれぬ、消口占領の争鬭を無くするため考案された消札が、却つて罹災を免れたるものより謝禮を徴する具に用ひらるゝ等の悪弊もあつた。

大名火消 大名火消は各大名の藩邸防護に源を發した自衛消防である、其當時の各人名の藩邸の江戸にあるものは

上屋敷、下屋敷、其他各所に散在し、何れも結構莊大であつて、之れが防禦に火消を置きたるは當然である、而して三代將軍家光の時、此等大名火消の中十六大名を撰び、之を四組に別ち、十日交代にて市内の警備に當らしめ、祿高一萬石につき三十人宛を出す定めとした。

一番 四百八十人 水谷伊勢守勝隆(五萬石) 伊東大和守祐久(五万四千石) 龜井能登守茲政(四万三千石) 松平市正英親(二万七千石)

二番 五百十人 加藤出羽守泰興(五万石) 京極刑部高和(六万石) 秋月長門守種春(三万石) 松平美作守定辰(三万石)

三番 四百五十人 有馬藏人康純(五万石) 稻葉淡路守紀通(四万五千七百石) 木下佐兵衛俊治(二万五千石) 青山大膳亮幸利(四萬八千石)

四番 五百十人 稻葉能登守信通(五万六千石) 古田兵部少重恒(五万五千石) 九鬼大和守久隆(三万六千石) 井上河内守正利(四万七千五百石)

此等の大名火消は消防のための扶持なく全然義務的で、麾下の將士をして消防せしめた、世は太平に歸し戦争の必要もなくなつた事として、鍛練された旺盛な武力は火事場に於て發揮され、恰も戰場に於けるが如く各功名を争ふ所となつた。水野監物、青山大膳亮等は其雄で久具忠左衛門等も大名火消の名人であつた。かくの如くなりしを以て、町火消の未だ發達せざりし時代にありては、大名火消は江戸消防の主力をなしたの故なしとしない、其後此制度は改められ、藩邸を中心に藩の大小によつて、八丁、五丁、三丁と出動範圍を定めて消防に従事し、八丁火消、五丁火消、三丁火消又は近所火消の名を生じた其組織は藩によつて一様ではないが、江戸詰家老又は留守居役を首腦とし、足輕や雇人足を消防員とした、此大名火消の中で最も著名なりしは加賀藩であつて、人之を呼んで加賀鳶といふた。加賀

藩の此雄飛には一のエピソードがある。前田侯が芝増上寺火消役を命ぜられた時のこと、増上寺近くから出火したが藩士には水利が分らぬ、止むなく大藩の威光を以つて直ちに人を集め、芝から本郷の前田邸まで二里餘に亘り人垣を作り、手渡に水を運んで事なきを得た、それがため沿道の交通は杜絶され、市民の困惑一方ならず、直ちに御役御免となつた、骨を折り金を費つて褒められるどころか讖になつた前田侯は、大いに發奮して諸士を激勵し、再びかかる失態なきを期し、其後湯島聖堂の火消役を仰せ付けられた際は、諸士の活躍自醒しく其功拔群であつた、而して愈其技を磨き加賀鳶の名をなしたといふ。

方角火消 方角火消は大名火消であつて、主として一万石以上の旗本及び譜代大名より之を撰み、大手方、櫻田方下谷方と三方面の警防に當らしめたもので、前に掲げた四組の大名火消が時間的であるに反し、之は方面的であつた其起原は明暦三年二月であつた、其任命を見るに

櫻田方 大手方 黒田市政之勝 秋田安房守盛季 一柳監物直興 谷大學衛政 龜井能登守茲政
下谷方 新庄越前守直好 岩城伊豫守重隆 堀丹波守直吉

其後方角火消は數次の改単によりて次第に其活動範圍を縮少し、櫻田組、大手組と稱し江戸城内廓のみを警防し、遂に文久二年廢止され、定火消が之に代つた。

所々火消 之も亦大名火消であつて、十萬石以上の譜代大名より任命せられ、二之丸、紅葉山、吹上等の江戸城内上野寛永寺、芝増上寺の靈屋、湯島聖堂、淺草本所の米倉、猿江材木藏等の警備と防火に當つたものであつて、享保七年に新設されたが文久二年廢止せらるるに至つた。

江戸火消の訓練 江戸火消は概して之をいへば團體としての訓練は行はれなかつた、唯新春に行はるる出初式がそれであつた、出初式の起原は明でないが、町火消一同が町奉行所に赴き年頭の挨拶をなし、木遣音頭に手をしめたも

ので、梯子乗を演ずるを恒例とした、而して其行列は先頭に纏持ちが纏を打ち振りて進み、町役人頭組道具持ちは皮羽織を着用して之れに續き、人足は紺の香高き半纏に向鉢巻、木遣の聲も勇しく、奉行所より引返して町内を巡り、大店其他出入先に至つて奉行所同様手をしめ、梯子乗を演じた。

又定火消は與力、同心、ぐわえんの面々、纏を先頭に其年の恵方に當る神社佛閣に向ひて繰出し、茲で梯子乗等を演じた、中にもぐわえんの揃の足袋蹴足、肌をつんざく朔風を事とせず兩肌脱いて、満身鮮かな自慢の文身に、勇ましくもいなせな江戸つ兒の意氣を示したるは、町火消と同様であつた。

徳川時代の地方情勢 江戸に於ける火消を知つた吾等は、之れより地方の火消研究に入るのであるが、其前に地方の情勢を知る必要がある。

先づ政治的方面に就て見るに當時の日本は之を幕府の直轄である天領又は公領と藩領とに分れた、而して天領中にも幕府が奉行其他を派して直接の政治を行ひたる地と、委城即ち現代語でいへば委任統治をなした地とがあり、藩政に至つては藩によつて區々で統一なく、移封國替屢々行はれ、殊に旗本、譜代大名の領有に至つては、領主一度も其領地に入ることなくして國替となつた例も尠からず、比較的移動のなかつた外様大名は、江戸を距ること遠く、たとへ參勤交代によつて江戸の制度を知る機會多かりしとはいへ、直ちに之れによるを許さざる事情に置かれた。

經濟及産業の方面はといふに、鎖國政策の結果、經濟産業共に發達せず、特殊地方を除いては農業が大部分で、工業は微々として振はず、部落は散在し、城下町、宿場等を除いては市街を構成するもの少く、一般の生活程度低く、經濟組織も幼稚で、概して自給自足の状態にあつた。

社會制度は極端なる階級制度で、所謂士農工商の別あり、特權階級であり支配階級であつた武士の横暴も、事大主義思想の『長いものにまかれろ』に支配され『泣く子と地頭には勝たれない』の諦めとなり、一般には純朴敦厚であ

つた。

此の如き地方情勢であつた爲め、徳川時代の地方消防施設は、農村に於ては殆ど見るべきものなく、僅かに城下町
其他特殊土地に於て之れを見たるも、據るべき文献に乏しく其詳細を極むること甚だ困難である。以下天領區、城下
町、一般村落の三方面に就て考察を進むることとする。

天領區の火消 天領區は大體に於て江戸の施設が最も早く移されたるは明かであり、消防施設に就ても亦然りであ
る。

天領區の政事を掌るものに奉行と代官とがあつて、其下に目付、與力、同心があり、町には町會所があつて其町の
自治に當り、町會所は今の町役場に當り町老檢斷等の役名ある町役人あり、町内各部落には地持家持の月行事あり、
或は組頭又は組親があつて各部落の取締をなし、家主は店子の取締に任じ、之等の組織によつて奉行又は代官の命令
は執行されたのである。宿場に宿場役人のあつたのは、町に町役人のあつたのと同様である。

火消及び火災場の取締は奉行の命を受くる與力同心によつて行はれ、火消は町役人、月行事、組頭の支配と指揮と
を受けた。

江戸の定火消に比すべきものは奉行所の駈付人足であつて、奉行所には消防器具が用意され火の見櫓が設けられ、
同心が見張をし一度警報發せらるれば、駈付人足現場に駈付け火元詰となりて消防に當り、又は役宅倉庫の警戒に任
じ平素火消人足を置くことは極めて稀で、元祿までには皆無といふも差支ない。之れ等駈付人足には豫め火札と稱す
る木札を渡し、中には足留料を支給したが、多くは無報酬で、大工、左官、髮結等に冥加出役を仰付けた地方も少く
なかつた、又區域を定め出火場の風上區域のもののみ出勤し、風下住居のものも出勤を免するは、殆ど一般に行はれ
た處である。

地方の町火消の出現は多く徳川中期以後であつて、其以前にありては江戸店火消と等しき自衛的のものに過ぎな
かつた、然るに次第に江戸町火消の制が移され、町役人の指揮の下に頭取高頭等の職制を布き、中には江戸町火消より
馬籠を分ちたものもあつた。

何れにしても其組織器具共に幼稚であつた事は争ふ能はず、従つて火災期節には奉行代官より火の元用心の御觸を
出して市民を戒飾し、警火に努めしめ、戸口調査を兼ねて「火の元改め」を行ひ、火の番を勵行し、店子は大風の時
外出するには大家より火の元改めを受け、火を出したるものには「店立」を命じた。

消防器具の幼稚なりし結果、破壊消防の行はれたること多く、「潰家御定法」を定めて潰家は奉行、町役人の許可又
は指圖に従ふべき事、潰家與荷とて風下風上より賦金を徴し、破壊家屋に對し補償すべき事等を規定した地方も少く
なかつたのである。

城下町の火消 封建時代に於て城下は即ち其國の首都であつて、城下町に衆人集り來り人家は稠密し股賑を極めた
るは必然の勢である。然れども階級制度の嚴重なりし結果、庶民は容易に城内に入ることを許るされず、城廓内の非
常防禦は藩の諸士によつて行はれ、諸士の住む屋敷町、そこにも藩士の警固があつた。かゝる一城一國の時代にあつ
ても中央に行はるゝ施設は自然諸藩之れに倣ふは止むを得ぬ所であつて、目付、與力、同心、町會所等は天領と藩領
と共通の制度ともいへる、而して江戸に消防制度の充實するに従ひ、城下町にも其施設を見た、それには二系統があ
つた一は藩の施設として、又は藩の督勵によつて、特殊の人員を撰抜して組織された火消であり、一つは市民の自覺
によつて生じたる火消である、前者は主として江戸定火消の形式を取り、後者は全く江戸町火消を模した、而して後
者は又部落を單位とするものと、職業により團結せるものがあつて、職業によるものゝ最も顯著なるものは大工火
消である。

火消及び火災場の取締、潰家御定法、警火方法に就ては、天領と大同小異である。

二四

村落に於ける火消 徳川時代末期に至るまでは村落の大部分には消防組は見られず、出火あれば老若男女を問はず手に手に手桶、長柄杓等を持ちて馳せ集り消火に努め、奉行所々在地城下町に近き村落には、奉行所々在地又は城下町火災の節、村名を記した幟や高張提灯を持ちて馳せ付ける馳付け人夫制ありたると、宿場には江戸町火消に倣つた若衆連によつて組織された消防組があつた程度に過ぎなかつた。享保御條目に

村中火の用心常に五人組切に致吟味無油断入念可申候自然火事出来候は、家々より手桶梯子等持出し何處にても早々火の元に掛け付け火を消し可申候勿論御年貢米入置候御藏大切園可申候不罷出者有之は後日聞候共急度可申付候事

とあり、文政九年の『御定の事』及び安政二年の御法度書『五人組御仕置帳』中には、二人組、五人組等の文字を見るも、之れは警火を命じたもので、以て火消とは認められぬ、然し此五人組に因を起し、徳川末期に於て非常組等の組織を見るに至り、消防に當りしは明かである。

消防施設の發達が文化、人口、經濟、社會組織に如何に關係深きかは、徳川時代と現代とを比較對照するとき、面白き因果關係を示し、我等の興味を一層深かしめるものがあるではないか。

第三項 明治時代前期

明治維新 嘉永四年米國水師丁督ベルリの率ひる『黒船』伊豆下田に來航するや、俄然我國泰平の夢は破られ、開國、攘夷の兩論國內に對立し、囂々として鼎の沸くが如く、此時に當り北邊にロシアの脅すあり、南海に英艦出沒するあり、國難來の聲は一層高くなつた、かくて開國、攘夷論は變じて尊王、佐幕となり、遂に薩長の兵禁裏守護を名

として京師に入るに及んで、伏見鳥羽の戰、幕府の政權奉還、將軍の謹慎、江戸城攻略等急テンポに開展され、我國歴史上の一大事件たる明治維新の大業は成就された。

かくて世は明治となり、幕政は覆されて皇政興り、新日本の黎明は告げられたのであるが、明治新政府は佐幕黨の追討、其他の政治工作に忙しく、政令も朝令暮改の有様で、明治四年中央集權なりて廢藩置縣の行はるゝまでは、重要都市に市政裁判所を置きて治安維持に當らしめたるの外は、大體舊藩制を其儘、各藩主をして之れを掌らしめた。

佐幕殘黨の反亂も鎮定せられ、中央集權なり國內平定となるや、新政府は開國を以て國是とし、大いに彼の長を取りて我が短を補はんとした。茲に於て泰西の文化は一時に我國に流入し來り、徳川三百年の鎖國主義に因つて、井中の蛙であつた國民に一大衝動を與へ、我國今日あるの基をなすに至つた、而して之れがため我國消防界にも、一大變革を來したのである。

東京の消防 維新の大業なるや江戸は皇城の地となり、其名は東京と改められ、此所に東京府が置かれた、而して幕政による定火消、大名火消は廢止せられ、いろは四十八組と本所深川の十六組の町火消は、東京府に屬することゝなつた。

此等の町火消を指揮監督するため、明治三年九月消防局が設けられ、消防局には消防掛、總轄、指圖役、指圖役心得等の職制を置き、大小ポンプ組が設けられ、消防器具の改善が行はれ、町火消の組織を變更し改革して消防組と稱したのであるが、消防の役人は地理に暗く、消防の掟を知らず、又其慣例にも通じなかつた、爲めに現場に於ける指揮に齟齬を來し、消防組の活動に蹉跌を生じ、可なりの失態珍景を演じ、市民は困惑した。茲に於て翌明治四年八月消防局を廢止し消防組は司法省警察寮に屬せしめ、三十九組を六大區に配置し、大いに舊弊を矯正し、次で明治七年警視廳が新設せられ、消防事務は警視廳に移管された。

警視廳には消防部ありて、部長の下に消防司令、消防士、其他の職員を置き、市内に六消防署を設け、各消防署には署長、消防曹長、消防手有りて常時非常を警戒し、火災あれば直ちに出勤して消防に従事し、消防組の指揮指導に當る、而して各消防組を消防署に配屬せしめ、消防組員は消防署長其他の指揮に従つて活動することゝなつた、當時の消防組の組織は殆ど江戸時代のそれを襲存し、頭取、副頭取の下に小頭あり、組員は纏持、梯子持、筒先、鳶、ポンプ掛等に分たれ、火災時期には詰所にて見張をなし、町内の警邏に任し、毎年一月六日出初式を行ひ、放水演習、梯子乗等を演じた。

此警視廳の消防制度は陸軍少將兼大警視川路利良氏が、明治五年九月警察制度研究のため歐州視察の途に上り、翌六年九月歸朝後彼の地の消防制度を取り入れ創設したもので、仰筒の如きも佛國より購入したる「甲號ポンプ」が使用された、川路大警視が我國警察行政及び消防事務に貢献せし所は極めて大なるもので、東京の消防署は我國官設消防の嚆矢であり、後に設けられたる大阪、京都、横濱、神戸、名古屋の特設消防署の源をなすものである。

此の如く政治的變革は行はれ、消防事務の管掌は改められ、其制度亦改善せられたるも、消防組は實質的には變化なく自治的であり、徳川時代よりの傳統たる犠牲的精神と任侠的意氣とは、依然として確固不動であり、一層義勇奉公の念を強からしめた。

地方の消防 翻つて地方の消防を見るに、幕末米船の來航、英露艦船の出没に脅威され、海邊の警備強固が説へられ、尊王討幕の論喧囂を極め、志士の往來頻りにして國內騷然たるの時、不逞の徒横行し、食糧、財寶を掠め、甚しきは放火する等のことありしを以て、或は異國船の襲來を警め、或は不逞の徒に備ふるため、前に述べたる五人組は強化されて若衆組となり、又は十五人乃至三十人を一團とする非常組が組織せらるゝもの漸く多く、藩によりては強制的に非常組の設置を命じ、一朝事ある時は寺院の梵鐘其他を鳴らして合圖し、多衆の集合に便し、自衛の途が講ぜ

られた、其後世情漸く靜まるに隨つて、之等若衆組、非常組は自然水火災害に備ふる恒久的自治的團體と轉化し、全国的に消防組の設置は増加した。

其間に明治政府の政治工作は着々として進行し、縣政は布かれ、各縣廳に聽訟課を置いて一般警察事務を處理し、縣によりては消防組に關する規程を設け、部落を單位とする消防組(或は防火組と稱す)の設置を奨進したるにより、愈消防組の設置に拍車を加へ、かくして幕府の倒壊によつて自然解消したる城下町の武家火消に代るに、町火消より發達したる消防組が各市町村の護りとなつた。他の一面に於ては行政警察制度は制定せられ、明治八年三月太政官達第二十九號によつて發布せられたる行政警察規則、第二章第二十九條以下に、出火場に於ける警察官の執務心得を明瞭に規定した、其要旨は

出火ノ節ハ巡查出火ノ合圖ヲ爲シ一般ニ知ラシム且燃失ニ罹ル家ハ其家ヲ助ケ消防ノ事ヲ勤ムヘシ消防人已ニ集マルニ至レハ勉メテ亂雜及窃盜ヲ防ク事ニ注意スヘシ

同斷ノ節第一ニ人ヲ救ヒ出シ次ニ書類金貨等ヲ出スヘシ官廳其他區長等ノ宅ハ文書ヲ第一ニ取出スヘシ
とあつて、火災場の取締が行はれた。

消防組の一般的傾向 此時代に於ける消防組は、市街地に於ては概ね舊幕時代よりのものであつて、其組員は特殊の人員より撰拔され、世襲的のものも少なくなく、村落に於けるものは、舊幕時代より存續するものを除いては、概して若衆連を基幹とし、一家一人主義で全村又は部落の各戸の團結より成つた、然し其何れにしても、隣保の情、愛郷の念によつて起つたもので、義勇奉公を旨とし、犠牲的精神任侠の意氣自から旺であつて、江戸町火消方氣で團結極めて強固であつた、之れ消防器具未だ不完全であつて、肉弾的消防を必要としたるに因るであらう。而して肉弾的活動をなしたる爲め、其行動は勇敢であつたが、其半面に於ては猛虎馮河の無鐵砲且つ粗暴の行動多く、組員として

も組としても、拔駝の功名を争ひ、喧嘩闘争が絶えなかつた、時としては感情により日頃嫌悪する者の家屋を、消防に事寄せて破壊し、或は殊更に焼失せしむる等のが行はれ、此風は市街地に於て特に甚だしかつた。

服務及び訓練に就ていへば、一般的には火災時の出動と、火災期節に於ける夜警(地方によりては之をなさず)をなすに止まり、訓練も一年一回の出初式等以外には行はれず、其方法も極めて幼稚であつた、其原因する所は是亦消防器具の幼稚と、肉弾的消防法にあつて、團體的動作の行はれなかつた事も、其因をなしたのである。尤も高職其他特殊の職業のものよりなる消防組(例へば東京に於けるが如き)は、其職業的修練によりて、世襲のものは古き傳統と體験によりて、消防技術は相當に進みたるは事實である。

器具に於て見るに、徳川時代に於てキリシタンパテレンの法として見られた龍吐水(龍越)や、雲龍水(木製唧筒)も追々各地に採用せられ、都市に於ては新式唧筒も使用されたが、農山村又は漁村に至りては、此期の末に於てすら龍吐水又は雲龍水を用ふるは進歩した方に屬し、概して之をいへば、極めて幼稚であつた。之れ未だ文化の普及せざりしと、經濟的に發達せざりしに依るであらう。殊に面白きは市街地は別とし、村落等にて縣の懲憑により、部落共同して龍吐水等の消防器具を用意しても、之れを保管するものは村長戸長等であつて、然も其自邸に保管するもの多く爲めに夜間民家に火災ありし場合、切角購入した消防器具も、之を使用し得ざりしといふが如き例も少くなかつた。

維持費の點を見るに、假令それが部落單位のものであつても、組の經費が部落によつて支辨せらるゝが如きは稀であつて、寄附金によつて維持せらるゝもの多く、其寄附も強請強要せらるゝ傾きがあつた。又或は組に山林、漁場等の基本財産を擁し、其果實を以て經費に充つるもの、組員の勞働によつて財源を得るもの等があつた、之れ消防組が自治的であつた爲めであらう。而して都會地に於ては、火の番錢等を各戸につき徴收するが如きは普通であつて、甚しきに至りては、消防によつて災害を免れたる家より報償を出さるゝ限り消札を撤去せず、最も極端なるものは消火

の最中に報償額を交渉した例もあつたといはれて居る。

之を要するに明治時代前期にありては、政府は政治工作に忙しく、消防事務は市町村又は一部有志によつて自治的に行はれ、各縣によりて其依るべき律令を異にして統一なく、自治的なるが故に或地方に於ては非常なる發達をなしたるに反し、或る地方にては其組織すらなきの状態であつた。従つて此時代の消防組の發達狀況は、全國的に記載すること極めて困難であつて、各縣下又は各市町村につきて之を知ることが肝要である。

第四項 明治時代後期

消防組規則の發布 明治時代前期に於ける消防組發達の狀況は、大略前述の如くであつて、自治的なりしだけに發達の目醒しきものもあつたが、經濟的缺陷統制不一致に因る怪舉妄動あり、治安維持上之れが取締をなすと共に、消防組の發達普及を圖る必要を生じ、明治二十七年二月九日勅令第十五號を以て消防組規則が制定發布せられた。

此規則は實に我國消防發達史上に一新時期を劃したものであつて、大正時代を過ぎて今日に至るまで、この規則の確立したる主義方針は牢固として動くことなく、消防組の準據すべき處を明示し、消防組をして合理的に健全なる發達をなさしめたのである。

消防組規則制定の根本方針と其疑義とを釋然たらしむべく發表された『消防組規則制定要旨』は、其當時の事情をも説明するに足るを以て、茲に之を掲げん。

消防組規則制定要旨

一、消防に關する事務は從來市町村又は一部の有志者に委任したりし處今回發布の消防規則を以て全く之を府縣知事

(東京府は警視總監以下に依る)の警察權に屬せしめられた上は爾來消防組の名稱組織を有する機關の設置を必要と認めたる時は本則の條規に従ひ府縣知事に於て其職權を以て適宜之を設置すべきものとす其の設置の場所は府縣令若し告示を以て之を指定すべし、其の設備を市町村に命令し又は市町村の設置したるものを認可するが如きは消防組規則の主意にあらざるなり、又消防組の名稱を定むる必要ある時は知事に於て之を定むべきなり。

一、堤防浚渫砂防等の工事を目的とし水害豫防組合を設けたる時は組合區域内に居住する一般の人民を指揮して水災を防禦する事を得るは水利組合の規則なりと雖も消防組規則の消防組は水害豫防組合と其性質を同ふせず。彼は豫防を主たる目的となし此は出水に際して防禦に従事するを主たる目的となす。彼は一般の人民を指揮し此は常置の消防手を指揮す。彼は自治の法人にして此は官設の機關なり。彼は一般被治者の義務に屬し此は警察權を掌握せるものとす。兩者並び行はれて相害せざるなり。而して消防組の職任を定めて水災火災共にその警戒防禦に従事するものと爲したるは消防組員をして水災の防禦に従事せしむるものも實際に差支なかるべきを以てなり。但し火防の施設を要して水防の施設を要せざる地方あるべし。水防施設を要して火防の施設を要せざる地方あるべし。甲に於ては單に火防のため乙に於ては單に水防の爲めに消防組を設置することを得るなり。

一、市町村條令に依りて設立したる消防組は其の條令と共に廢止せられ其の他の私設消防組は官の許可を得たるものなると否とを問はず又均しく廢止せられたる上は將來に於ては消防組規則に依りて知事の設置したるものに非ざれば成立を許さざるなり。但し私人若し營利會社にして自衛の爲め消防機具等の設備を爲すは消防組の設置を以て論ずるの限にあらす。

一、水災火災警戒と云ひ又之を訓言して水災火災警戒防禦と稱する所以は獨り水災火災の警戒を以て消防組の職任となさずして平時の警戒巡邏等も亦皆消防組の職任となしたるなり。故に夜警の如きも將來は消防組をして之を行はしむる

を以て本則とす。但し町村の舊慣により隣保の交互警戒するは刻論して之を廢せしむを得ざることをあるべし。

一、消防組の設置の區域は第二條本文に依り一般に市町村の區域に據らしめ猶土地の狀況に依り同條但書により變則として市町村内に於て適宜區域を定め同一市町村内に於て二組以上を設置し得るの餘地を認めたり、此の如く消防組の區域を設置するときは廣濶に過ぎて緩急に應じ難きことあるべし。是に於てや第五條に數部に分ち得るの規定あり。一消防組獨力にて及ぶべからざるの災火あるべし是に於てや第七條に應援を命ずる規定あり。若し夫れ水災に至りては沿岸消防組の力にて防禦し能はざるの場合特に多かるべし從て應援の必要又尤も多かるべし。

一、消防組は組頭小頭及消防手を以て組織すべきものにして此の以外特種の職員を設くる事を得ず。但し小頭消防手に在りては警察權を以てその職務の分擔を定むるは敢て差支なし。

小頭及消防手の定員は管内一轄に出つること難し各組各別に之を規定すること尤も便宜なるべし消防組を數部に分つときは組頭全體を統轄し小頭を以て各部の長に充つるを可とす、消防手は法律上より之を論ずるときは強制して之を任命するを得と雖もその辭職も亦之を拒むを得ざるものとす、故に有志青年を募て之に充つるを可とす。

一、消防は警察事務の一部なるを以て消防組の指揮監督亦知事の警察權に屬すべまものとす、然れ共知事は一々之を指揮し細大之を監督する事を得ざるを以て警察部長(東京府は警視總監以下に依る)をして知事の命を承けて指揮監督の任に當らしめ警察部長亦之が下級の機關となり更に警部巡查の之を助くるありて警察の職任を全ふせしむるは他の警察事務に於けると異なる所なし。

而して各所消防の事動もすれば輻ち警察官耳目の及ばざることあるべし、是れ組頭を置いて警察官を輔佐せしむる所以なり、組頭何等程度の職任を負はしむべきやは消防組規則の範圍に於て宜しく之を規定指示すべきなり。

一、消防組にして數警察署の管轄區域に跨ることあり、此の場合に於て各縣區々の指揮をなすは統一を害するを以て

府縣知事は適宜一の警察署長をして其の指揮監督を總轄せしむべし尤も數部に分つときは數警察署長をして其の一部を指揮監督せしめ而して其の内の一署長を指定して全體の組を指揮監督せしむるを妨げず、又規則中單に警察官と記載せるものは各者の警部巡查を包含するものとす此の場合に於て警部巡查は本屬署長の指揮監督を受くることあるは勿論なりと雖も主として第六條第一項の指定署長の指揮監督を受くるものとす。

一、平素消防組員に對するの節制なく又水火災に際して運動に規律なきの弊は從來到處に之ありたり、消防組規則は水火災に際して一進一退警察官の指揮に従はしむるは勿論平素に於ても嚴重なる警察官の監督に服せしめんと欲す是れ消防を以て警察事務となしたる結果なりとす。宜しく服務規律に依て之を制束し懲戒に依て之を督勵し以て消防組の紀律を嚴正にすべきなり。殊に平素たると水火災の際たるを問はず粗暴の舉止濫慢の行動なからしめんが爲め之が戒飾を怠るべからず、且消防組の職たるや水火災の警戒防禦をなすに過ぎず、其の威を籍りて餘事に運動し會合屯集非行を逞うするは消防組の職務と相容れず、水火災害の爲めにあらざる集會運動は儀式の爲め教練のため及他の災害を防禦するために警察官の命令したる場合の外決して之を許す可きにあらざるなり。

若し夫れ治安を保持するが爲めに止を得ざるに臨んでは第十條に依り之を解くも妨なし、消防組は警察機關の一部に外ならずと雖も市町村の青年を募りて之を組織したるに過ぎざるを以て止むを得ざるに臨んで之を解くの處分をなすは亦實に秩序の維持に於て缺くべからざる所とす。

一、消防組は知事の警察權に服屬すと雖も其の費用は消防組規則第十三條市制第十六條及町村制第九十六條に依り之を市町村に負擔せしむるものとす。而して規則第十一條に手當被服を擧げたるは之を例示したるに過ぎず。知事に於て必要と認めたる時は賞與給助等の費目を定むるを得べし、要は土地の狀況に従ふべきなり。

第十二條の器具建物に關する規定は其の大體を府縣令に掲げ器具の員數建物の構造等の些末に至りては之を警察署

長に委任するも可なり。殊にその管内をして同一の規定に従はしむるを須むず各組各別の指定をなすこと寧ろ事宜に適するものなるべきなり。

消防に關する費用は第十一條及第十二條に掲げたるものは勿論其の以外に於ても此を要することあるべし、第二條本文の場合に於ては總て市町村負擔とし同條但書の場合に於ても尙市町村の負擔とすべきは論なし。即ち大字若は區を以て消防の區域となす場合に於ても其の費用は之を大字若は區に課せずして其の市町村に課するなり、但し市町村に於て特に消防組設置の大字若しくは區より特別税を徵收し又は市制第十七條第二項町村制第九十七條第三項により特に消防組設置の大字若しくは區をして重き税率の附加税を負擔せしむるは妨なし。

消防組は消防機關の一部に屬すと雖も之に要する機械等は總て市町村をして之を設備し以て消防組の使用に供せしむるを以て其の機械等の保管も亦消防組の責任に屬するなり。手當其他の支出は直接に市町村をして之を行はしむ故に市町村は通常手続きに従ひ收入役をして收支せしむるものなりと雖もその金額は官に於て定むべし。

一、消防組の設置及部の分割は勿論建物の増築諸手當賞與給助の支給被服器具の整備等に至るまで總て官に於て之を定むべきものなりと雖も若し市町村の意見を徵するの便宜なるときは市制第四十七條及町村制第四十四條に依り豫め市會又は町村會に諮問し探て以て知事の參考に供するを妨げず。

一、從來消防組員が消防に従事して死傷したる場合には巡查同様の働と見做し明治十五年太政官達第六十七號に由て弔祭料扶助料等を給與したる例ありたれども今回の勅令に依て消防組は警察職務の一部を負擔せるものなるが故に一般人民則ち被治者を以て論するの限りにあらず右太政官達は今後之を消防組員に適用するを得ず。

而して消防組規則は次の如くである

消防組規則

(明治二十七年二月九日)
勅令第十五號

三四

- 第一條 府縣知事水火災警戒防禦ノ爲メ必要ノ地ニ消防組ヲ設置スルトキハ此ノ規則ニ定ムル所ノ條規ニ依ルヘシ
- 第二條 消防組設置區域ハ市町村ノ區域ニ依ルヘシ
町村制第十六條第二項ニ依リ町村組合ヲ設ケタル場合ニ於テハ消防組ノ設置組織ハ其ノ組合ノ區域ニ依ルコトヲ得
- 府縣知事ハ土地ノ狀況ニ依リ必要ト認ムルトキハ市町村内ノ一以上ノ大字若クハ區ヲ以テ消防組ノ設置區域ト爲スコトヲ得
- 第三條 消防組ハ組頭一人小頭若干人及消防手若干人ヲ以テ之ヲ組織ス
組頭及小頭ハ警察部長若クハ其ノ委任ヲ受ケタル警察署長之ヲ命免ス
消防手ハ警察署長之ヲ命免ス
- 第四條 組頭ハ警察官ノ命ヲ承ケ部下ノ指揮取締ニ任シ庶務ニ從事ス
小頭ハ組頭ヲ助ケ組頭差支アルトキハ之ニ代ルモノトス
- 第五條 消防組ハ府縣知事之ヲ數部ニ分ツコトヲ得
- 第六條 消防組ハ府縣知事ニ於テ指定シタル警察署長之ヲ指揮監督ス
消防組ハ警察官ノ指揮ニ從ヒ進退スヘシ
但シ水火災ニ際シ警察官臨場ノ暇ナキトキハ組頭若クハ小頭之カ指揮ヲ爲スコトヲ得
- 第七條 消防組ハ其ノ區域外水火災ト雖警察署長ノ指揮ニ從ヒ其ノ警防ニ應援スヘシ



- 危急ノ場合ニ於テ警察署長則項ノ指揮ヲ爲スノ暇ナキトキハ他ノ警察官警察署長ニ代テ其ノ指揮ヲ爲スコトヲ得
- 第八條 警察部長ハ府縣知事ノ命ヲ承ケテ其ノ地方全體ノ消防組ヲ指揮監督ス
消防組ハ水火災警防ノ爲メニアラサレハ集合若クハ運動スルコトヲ得ス
但警察署長若クハ其委任ヲ受ケタル警察署長ニ於テ儀式訓練及其他ノ災害ノ爲メニ集合運動ヲ命シタル場合ハ此ノ限ニアラス
- 第九條 消防組ノ服務規律及懲戒ニ關スル規定ハ府縣知事之ヲ定ムヘシ
- 第十條 消防組ノ舉動治安ニ妨害アリト認ムルトキハ府縣知事ハ之ヲ解クコトヲ得
- 第十一條 府縣知事ニ於テ必要ト認ムルトキハ市町村又ハ町村組合ヲシテ消防組員ニ一定ノ手當竝ニ被服等ヲ給セシムルコトヲ得
- 第十二條 消防組ノ使用ニ必要ナル器具及建物ハ府縣知事ノ定ムル所ニ從ヒ其ノ市町村及町村組合ニ於テ之ヲ設備スヘシ
- 第十三條 消防組ニ關スル費用ハ其ノ市町村又ハ町村組合ノ負擔トス
- 第十四條 從來ノ市町村消防組ニシテ其ノ區域此ノ規則第二條ニ該當スルモノハ此ノ規則施行ノ日ヨリ三箇月以内ニ於テ府縣知事此ノ規則ニ從テ其ノ組織ヲ改ムヘシ
消防組ニ關スル從來ノ市町村條例ハ前項ニ依リ組織ヲ改メタル日ヨリ之ヲ廢止ス
- 第十五條 前條ニ當ラサル從來ノ消防組ハ官ノ許可ヲ得タルト否トニ拘ラス此ノ規則施行ノ日ヨリ總テ廢止ス
- 第十六條 此ノ規則ヲ施行スル爲メニ必要ナル細則ハ內務大臣定ムル所ノ綱領ニ依リ府縣知事之ヲ定ム
- 第十七條 此ノ規則ハ沖繩縣及東京市ニ適用セス

三五

但第七條ハ東京市ニモ之ヲ適用ス

第十八條 北海道ニ於テハ府縣知事ノ職務ハ北海道廳長官之ヲ行フ東京府郡部ニ於テハ府縣知事ノ職務ハ警視總監之ヲ行ヒ警部長ノ職務ハ警察署長之ヲ行フ

第十九條 第八條及第十條ハ此ノ規則發布ノ日ヨリ施行シ從來ノ消防組ニシテ第十四條ニ依リ組織ヲ改ムヘキモノ及第十五條ニ依リ廢止セラルヘキモノニ適用ス

消防組規則の發布せられたる翌日内務省は消防組規則第十六條により消防組規則施行細則の綱領を示すべく省令第一號を以て消防組規則施行概則を出した。

消防組規則施行概則

(明治二十七年二月十日)
(内務省令第一號)

第一條 消防組並部ニハ細則ノ定ムル所ニ從ヒ一定ノ名稱ヲ附スヘシ

第二條 府縣知事(東京府は警視總監北海道は北海道廳長官以下做之)ハ必要アリト認ムル時ハ消防組若クハ部ニ事務所ヲ設クルコトヲ得其設置備品及執務章程等ハ細則ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第三條 消防組若クハ部ハ細則ノ定ムル所ニ從ヒ一定ノ人員ヲ以テ之ヲ編制スヘシ

第四條 消防手ハ年齢滿十八歳以上ノ男子ニシテ平素行爲粗暴ニ涉ラス身體強壯ナル者ヲ選フヘシ
但組頭及小頭ハ消防手ノ中ヨリ選拔ス

第五條 前條組頭及消防手ノ採用ニ關シ規定ヲ設クル必要アルトキハ細則ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第六條 左ニ掲クルモノハ消防手トナルコトヲ得ス

一 公權褫奪若クハ停止中ノモノ

二 禁治産中ノ者

三 懲戒處分ニ依リ消防手ノ職務ヲ免セラレ滿三年ヲ經過セサル者

第七條 消防組員在職中前條各號ノ一ニ觸ル、者アルトキハ直チニ其ノ職ヲ免スヘシ

第八條 前數條ニ掲載セサルモノヲ除クノ外尙ホ消防組員ノ命免及辭職ノ手續等ニ關シテ規定ヲ設クルノ必要アルトキハ細則ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第九條 水火災ノ信號及信號擔當者ハ細則ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第十條 消防組規則第七條ノ場合ニ於テ消防組ヲシテ機械ニ相應援セシムルノ規定ハ細則ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第十一條 消防組員ヲシテ參集又ハ現場ヘ出張ノ途中ハ勿論平常タリトモ他人ニ對シ強迫ガマシキ所爲又ハ粗暴ノ舉動ヲナサシメサル爲メ細則ヲ定ムヘシ

第十二條 消防組ハ期ヲ定メ演習ヲ爲スヘシ其ノ方法ハ細則ノ定ムル所ニ依ル

第十三條 細則ノ定ムル所ニ從ヒ建物ヲ造設若クハ修繕ノ必要アルトキハ警察署長又ハ警部長ノ指揮ヲ受ケ市參事會町村長ニ移牒シテ之ヲ爲サシムヘシ

第十四條 消防器具ノ種類備品置場保存ノ方法等ハ細則ノ定ムル所ニ依ル

第十五條 組頭ハ細則ノ定ムル所ニ從ヒ器具ノ現況ヲ市參事會町村長ニ報告スヘシ

第十六條 消防組ニハ組員名簿及消防器具目錄ヲ備ヘ置クヘシ

第十七條 地方ノ狀況ニ依リ消防組員ニ被服並月手當出場手當、傷病手當等ヲ給與スルノ必要アルトキハ細則ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第十八條 警部長期ヲ定メ少クトモ毎年一回警察署長又ハ警察分署長ハ少クトモ毎年一回以上消防組ヲ巡檢シ紀律

保持器具ノ完備等ヲ監査スヘシ

第十九條 懲戒ハ情況ノ輕重ニ從ヒ解職停職停給(月手當アル場合ニ限ル)及譴責トス

第二十條 停職ハ一年ヲ超ユルコトヲ得ス又停給ハ三箇月分ヲ超過スルコトヲ得ス

第二十一條 懲戒處分ノ手續ハ細則ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第二十二條 此ノ概則ニ於テ市町村ト稱スルハ北海道ノ區ヲ含用スルモノトス

市町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ此ノ概則ヲ規定シタル市參事會町村長ノ職務及關係ハ區長又ハ戸長ニ屬スルモノトス

消防組點檢規則の發布 消防組規則によつて消防組の組織、職務、權限、經費等の大綱が定められ、消防組規則施行概則によつて、消防組規則施行細則の骨子が指示せられたるを以て、各府縣に於ては之れによつて消防組の設置及び取締を期すると共に、夫れ夫れ施行細則を制定し、各府縣下の情勢に適當する消防組の設置の普及發達に努力し、茲に我國消防界は一大發展の氣運に向つた。

此時に當つて日清戰爭の起るあり、而して戰勝の結果は我國經濟界に急速なる膨張を來し、戰後の好景氣は各種産業の發達となり、加ふるに開國以來西洋文明の流入は我國文化に異數の發展を與へ、此等の影響は一層消防界の發達を促した。然しながらかくして設置せられたる消防組は、形式的に外形を整へたるに過ぎず、其實質は依然舊態を脱せず、改革を要する點尠なからず、又消防組が警察の補助機關たるの制度確立せられたる以上、一朝有事に際し其機能を完全に發揮せしむるには、常時消防組と警察との連絡を密接ならしめ、兩者の圓滿なる協調を必要ならしめた。茲に於て内務省は、從來各府縣の消防組規則施行細則によつて行はれ來たる消防組點檢法を統一し、消防組の點檢を勵行し、一つは消防組の内容充實を計ると共に一つは消防組と警察との接觸度を多からしめ、一石二鳥の効果を舉

くべく、明治三十三年五月二十三日消防組點檢規則を制定公布した。

消防組點檢規則

第一條 消防組ノ點檢ハ人員服裝姿勢及ヒ機械器具其ノ他携帶品ノ保存使用ノ適否ヲ檢査スルモノトス

第二條 點檢ヲ行フトキハ所轄警察署長警察分署長又ハ其ノ代理者ヲ點檢官トシ組頭又ハ小頭ヲ以テ指揮者トス

但警察署長分署長又ハ其ノ代理者アラサルトキハ組頭ヲ點檢者トシ小頭ヲ指揮者トス

第三條 消防組員ノ集合整頓ノ方法ハ巡查點檢規則ヲ準用ス

第四條 指揮者タラサル小頭ハ前列右翼ニ若シ餘員アルトキハ同列左翼ニ列シ尙餘員アルトキハ後列ノ中央二步ノ距離ニ於テ押後トナルベシ

第五條 點檢ノ際列員ハ一定ノ服裝ヲナシ手袋アルトキハ之ヲ着用スベシ

但頭巾ヲ携フルトキハ其紐ヲ頭ニ掛ケ之ヲ背部ニ負フベシ

第六條 點檢ハ消防組當番員出務ノ際現場引上ケノ際及ビ演習ノ際之ヲ行フモノトス

現場引上ケノ際機械器具服裝其他携帶品破損ノ有無ヲ檢査スルハ特ニ嚴重ノ注意ヲ要ス

第七條 機械器具ニシテ使用シタルモノハ洗滌ノ後修繕シタルモノハ竣工ノ後警察官ニ於テ點檢スベシ、其在ラサルトキハ組頭又ハ小頭ニ於テ點檢スベシ

第八條 唧筒其ノ他ノ機械ニシテ組立アルモノハ毎年二回以上之ヲ分解シ内部ノ檢査ヲナスベシ

前項ノ檢査ハ可成大演習ノ際ニ於テ之ヲ行フベシ

公設消防組と私設消防組 消防組規則に従へば、消防組規則に準據して設置せられたるものに非ざれば消防組にあらずといはねばならぬ、而して消防組の設置は府縣知事の權限に屬するを以て、府縣知事が消防組の設置を必要なり

と認めたる市町村には、其職權を以て之れを設置し得るのである、然れども、各市町村に發達し來れる消防組は、隣保の念、愛郷の心によつて生れ出でたるものであつて、郷土の自衛防護のために消防組を設くるは、之を獎勵すべきでこそあれ、之れを禁止すべきではない、又消防組規則も義勇消防を以て建前とする以上、府縣知事が職權を以て消防組の設置を命令し、又は廢止せしむるが如きは、徒らに市町村民の反感を買ふ結果となり、多害ありて一利之れに伴はず、當を得たるものとはいひ難いのである、よつて各府縣に於ては消防組規則の趣旨を徹底せしめ、市町村の申請によつて消防組設置を認許するの方針を取り、市町村に消防組規則に準據する消防組の設置を慫慂し、消防施設なき町村には其新設を獎勵し、大いに努力する所があつた。之れを市町村及び從來の消防組の見地より見るに、法令の發布せられたる以上當然之れに従つて、速に消防組の設置申請をなすべきであるが、經濟的事情や從來の傳統や、其他各種事情のため、直ちに在來の消防組を解消し、消防組規則に準據する消防組を設置するは容易の業でなかつた従つてそこに消防組規則に準據する消防組を設置したるものと、從來の消防組を存続するものとの二者を生じた、茲に於てか消防組規則に準據する消防組を公設消防組と稱し、然らざるものを私設消防組と稱するに至りたるは、過渡期の所産として又止むを得ぬ次第である。

私設消防組に對する方針に就ては、各府縣の情勢及び當局の意見によつて、大體二潮流を生じた、即ち一つは消防組規則に基き絶対に私設消防組を認めずとなす硬派と、公然には私設消防組を認めざるも、實質的には之を認むる軟派とである。硬派に屬する府縣にては、組の内容が貧弱なものであつても、先づ之を公設消防組たらしめ、然る後逐次其内容を整頓充實せしむるに努力し、軟派に屬する府縣にては、私設消防組は公然之を消防組として認めざるも、之を扶掖指導し、其内容施設を或るレベルに引上げ、然る後之を公設消防組として改編せしめんとし、殊に未設地に對しては、先づ私設消防組を組織せしめて消防施設の普及を圖るの方針に出た、前者は法令に忠にして後者は民意を

重んずるにある、此の方針の是非に就ては吾人は勿論法令に忠なる前者を採るが、其利害得失に至つては、其地方の状況によつて一様に論ずべきにあらず、地方により後者を取るの餘義なかりしは想像に難くない、即ち取扱に硬軟の二派を生じたる亦止むを得るのである。

火災場取締規則の制定並に改訂 消防組規則、同施行概則並に同施行細則、及び消防組點檢規則の制定によつて、消防組に關する規定は完成せられ我國消防界の發達に一劃期をなしたるは、既に述べたるが如くであつて、他の一面に於ては急速なる我國文化の發達は、産業、交通其他各般の進歩となり、社會組織は複雑化し、災害の原因は日に多きを加へ、經濟的發展は災害に據つて生ずる損害を大ならしめた、従つて災害豫防に關する法令の發布又は改訂盛行はるゝと共に、火災場取締規則及び火災場警察官服務規則が制定或は改訂せらるゝに至つた。

是より先火災場取締規則は、主として市街地に於ける火災場の混雜を取締るべく、各縣下に於て制定せられたるものがあつたが、明治三十三年行政執行法が制定せられ、其第四條に

當該行政官廳ハ天災事變ニ際シ又ハ勅令ノ規定アル場合ニ於テ危害豫防若クハ衛生ノ爲メ必要ト認ムルトキハ土地物件ヲ使用處分シ又ハ其ノ使用ヲ制限スルコトヲ得

と規定し、行政執行法施行令第二條に

生命身體若クハ財産ニ對シ危害切迫セリト認メ又ハ水陸ノ交通ニ危害ヲ及ホス處アリト認メタルトキハ當該行政官廳ハ行政執行法第四條ニ依リ必要ナル措置ヲナスコトヲ得

左ノ各號ニ掲クル土地物件ニ關シテハ法令ノ規定ニ違背シ因テ危害ヲ生シ又ハ健康ヲ害スルノ虞アリト認メタルトキ亦前項ニ同シ

一、崩壊又ハ人ヲ陥落セシムルノ虞アル場所

二、家屋其ノ他ノ工作物

三、船車其ノ他交通ノ用ニ供スル器具又ハ装置

四、機關汽機及其ノ附屬装置

五、前各號ニ掲ケタルモノ、外主務大臣ノ定メタル土地物件

と規定せられ、火災場の取締及び破壊消防施行に就ても明確となりたるを以て、火災場取締規則を改定するもの多く然も其應用範圍は擴張せられ、市街地のみならず一般に之を施行することとなつた、降つて明治四十一年九月、内務省令第十六號を以て警察犯處罰令發布せられ、其の第二條に

左ノ各號ニ該當スル者ハ三十日未滿ノ拘留又ハ二十日未滿ノ科料ニ處ス

二十七、水火災其ノ他ノ事變ニ際シ制止ヲ肯セスシテ其現場ニ立入り若クハ其場所ヨリ退去セス又ハ官吏ヨリ援助ノ求メヲ受ケタルニ拘ラス傍觀シテ之ニ應セサル者

と規定せらるゝに至つて、火災場の取締は一層徹底し、消防組の活動を容易ならしめたのである。

火災場取締規則に關聯して、災害場に於ける警察官の服務規定も亦改正せられ、消防組の指揮監督に一大改善が加へられた。

火災場取締規則及び火災場に於ける警察官服務規程は、各府縣により其制定改廢を異にし、其内容に至りても一樣でなく、こゝにこれを詳述するは、徒らに繁雜を來すを以て、後章各縣別に之を述べたり、就て見らるべきである。

消防組の改善 消防組規則が制定發布せられ、各府縣に於ては消防組規則施行概則に規り消防組規則施行細則を規定し、公設消防組の設置漸く多きを加ふるに至りたるを以て、明治三十五年十一月二十六日内務省令第二十四號を以て、明治二十七年二月十日内務省令第一號消防組規則施行概則は廢止された、之と相前後して各府縣の消防組規則施

行細則は改訂せらるゝもの多きを加へた。而し細則の改訂は其以後に於ても屢々行はれ、又各府縣によつて其の軌を一にしては居らぬが、要は消防組の改善にあつて、大體次の如くであつた。

一、紀律の肅正 従來の消防組が自治的であつたため、意氣に於て愛すべきものがあつたが、其紀律は缺くる所が少くなかつた、よつて各府縣共にこれが矯正に力を致し、細則の改正に當つてはこれに目標を置き、消札の如まはこれが使用を禁止し、監督を嚴にすると共に、服裝等をも統一して、紀律の肅正に力めた。

二、訓練の勵行 災害場裡に於て消防組の全機能を發揮せしむるためには、常時其訓練を勵行し、其の技能の熟達を期すへきは元より論を俟たぬ處である、従來の細則に於ても訓練及び演習に就て規程しありたるも、一層これが勵行を期し、聯合演習を行はしめるの傾向を生じた。

聯合演習は互に其技を競はしめ、他の長を知りて我が短を補はしめ、消防技術を發達せしむるに効果あるのみならず組相互の親睦を増し、且つ應援出動の場合、機械器具の融通方法を講ずるに益し、消防作業上に裨益したること極めて大であつた。

三、檢閲制度 訓練演習が技術の進歩發達に必要なは勿論であるが、假裝演習と實戦とは相違あるもので、演習又は點檢に威風堂々たりとも、實際に災害防禦に當り、案外に能力を發揮し得ざるものなきにしもあらず、徒らに訓練演習を獎勵するは、兵家の所謂「觀兵式訓練」に墮することなきにしもあらず、加之消防組の目的は災害の防止にあつて、消防技術が實際に即したるものたるべきは勿論、技術の進歩と共に災害防止に必要な施設の完備を必要とするのである、茲に於てか一面に於て訓練演習を勵行すると共に、其實績を考査し、其施設の實際を調査する檢閲制度を設け、之を細則に規定し、又は別に檢閲規程を設くるの風を生じた。

四、消防組の賞罰 従來消防員に對する賞罰は之を規定するものもあつたが、團體としての組に對する表彰を規定せ

しものは皆無であつた、然るに消防組は團體として活躍するものであつて、個々の組員の拔駭的奮闘のみによつて其能力を發揮し得るものでない。従つて組として功績顯著なるものを表彰し、これに賞を與ふるは、消防組の改善發達に極て効果あるべきは言ふまでもない、此見地より細則に之を規定し、消防組の發達に資するの傾向を生じた斯くの如く消防組施行細則の改正に當り、各府縣共に消防組の指揮監督を嚴にし、其發達改善に努めたる一面に於て、消防組員の紀律は肅正せらるゝと共に、其責務の重大なるを自覺したる組員は、自己の修養と技能の進歩とを圖ると共に、災害時にのみ出動したるものが、常時災害の豫防に活躍し、往時の因習的惡弊は漸次矯正せられ、活動範圍は次第に開拓せられ、斯くして消防組の改善は着々として大成に向つたのである。

特設消防署の設置 明治四十二年七月三十一日、大阪市北區空町二丁目から發火し、延焼二十五時間一万二千戸を烏有に歸せしめた、世に之を北區の大火といふ。此大火に刺戟され、明治四十三年三月勅令第二百二十八號を以て、「大阪市消防規程」が發布された。此規定は東京市に於けると同様、大阪にも消防署を設置し、官設消防をして大正七年二月勅令第十八號を以て其の大部分が改正せられ、翌八年七月勅令第三百五十號を以て「特設消防署規定」が發布せられ、京都、大阪、横濱、神戸、名古屋の五大都市の所在府縣、京都府、大阪府、神奈川縣、兵庫縣、及び愛知縣に之を施行することとなり、「大阪市消防規程」は廢止せられた。從來消防署を設置し、國費を以て消防官を置きたるは、東京市のみであつたが、帝都以外に消防署の設置せられたるは、大阪を以て嚆矢とするのである。凡そ市街の發達に伴れ火災の數と其損害の額を増加し來たるは、時の古今を問はず、洋の東西を論じない、而して火災愈頻繁に起るに至れば、これが對應策としてそこに常備の消防を置き、何時にても災害起れば直ちに自動して防禦に當るの方法を講ずるの必要を生じ來るのである、我國消防は警察官吏によつて指揮される規定であるか、大都市の消防を、消防智識の乏しき警察官吏の揮下に委ぬるは種々の支障を來たす

虞あるを以て、其の爲めに特に消防事務専門の消防官吏を置き、常に消防對策即ち消防機械器具の改善、整備、水利の調査、消防戰術等を考查研究せしめ、以て災害の防止に遺憾なからしめんとするのが、消防署設置の目的である。我國が義勇消防を建前とする關係上、消防署の設置は、一見閣上閣を設くるの感を懐かしむるの感を生ずるものあるべきも、吾人をしていはしむれば、義勇消防なるが故に一層消防署の必要を感ずるのである。此點に就きては章を改めて詳述することとし、こゝには消防署設置の歴史的事實を記すに止むるのである。

公設消防組の發達狀態 徳川時代は我國消防組の創始時代に屬し、然も政治機構も幼稚であり、器具の如きも不完全であつて、江戸其他の特殊地方を除きては、消防施設の行はれたる地も少く、其末葉に至つて漸く一般的となり來つたとはいへ、全國的に之を見れば、無消防に等しかつたのである、尤も其組織の中には、今日尙ほ採つて範とすべきものもある、殊に犠牲的精神と任侠の意氣とは、爾來傳統的となりて今日所謂消防精神の因をなした。明治時代前期にありては、明治維新の餘波を受け、政府は政治的工作に専念し、消防事務は市町村又は一部有志に委任し、自治的發達に委したるを以て、或地方に於ては文化の發達に伴つて異數の發達を見たか、舊幕時代の域を脱するを得ず、消防組は世間より顧みられず、其陋習惡弊は世人をして却つて嫌惡せしめた。然るに明治時代後期に入りては、消防組規則其他消防組に關する規則は制定せられ、消防組の改善全國的に行はれ、文化の發展と日清日露の國運を培しての二大戦に大捷し、國威海外に揮ひ、産業交通の目覺しき進歩と經濟界の膨脹とは、相俟つて消防界の發達を促し來つた、而して消防組員の自覺と當局の監督指導とによりて、次第に消防界は郭清の域に向ひ、世人亦これに關心を持つに至つたか、全國的には消防組の發達は不平均であり、跛行的であつた。甚だしきに至つては、公設消防組の役員が規定の法被を着るをいとひ、前垂掛け尻端折し、又は法被の上に羽織を着用し、又或は組員か下駄履で巡檢を受けたといふが如きものもあつて、其幼稚さ加減は、今日に於て到底想像し得ざる程であつた、又私設消防組の存續する

もの消防組未設町村も多く、公設消防組の播種期とも或は消防制度創設期ともいふべきか。

四六

第五項 大正時代

消防組基本財産の禁止 明治維新の大業なりて五十年、此の間徳川三百年の鎖國の迷夢より醒めた我國民は、滔々として流入する泰西文明の消化に力め、最初は彼の「文明開化」に眩惑したるも、後には我國の傳統的同化主義を發揮し、大いに彼に後れざらむことに努力し、政治に、文學に、産業に、交通に、著しき進化を示し、殊に日清、日露の大戦の結果は、一層力強き發展をなさしめ、諸外國の我國に對する認識を新たならしめた、之れと同時に經濟界は膨張し、社會組織は複雑化し、一面に於て消防機械器具を改善せしむると共に、一面に於ては火災の原因を多からしめ各地に大火災頻々として起り、之れに因つて被る損害は加速度的に増大した。明治時代後期に於て消防制度確立され假令それが跛行的であつたにせよ、公設消防組を初め私設消防の設置漸く多きを加へ、大正時代に入りては公設消防組は、將に其の紀律訓練に於て、又施設に於て、一大改革が行はれんとした。此の時に當り、世人は消防組に對する「火消」又は「火消人足」なる觀念を除去し能はざるものありたると、法令の趣旨の未だ徹底せざるため、消防組の經費の如きも、其出所は區々であり、多くは有志の寄附、部落又は警備區域の部落費區費等によつて支辨され、市町村費として充分なる支給を受くるものは僅少であつた、而して消防員も亦從來の古き慣習によつて、勞力奉仕によつて其足らざるところを補ひ、各戸につき夜警料其他を徵集し、又は寄附金等を以て基本財産を作り、之れより生ずる果實即ち収益により、經費の一端を充たして不思議としなかつた。然るに消防組規則に従へば、消防組は市町村の警備機關であり警察の補助團體である、故に其經費は當然市町村によつて負擔せらるべきものであつて、消防組が財産保有の主體であり得ないことは明であり、寄附金の募集又は夜警料の徵集をなすべからざるは言を俟たない。而已な

らず、かゝる行爲あるが故に、消防組の發達は阻害され、活動を妨げ、悪弊を生ずる原因ともなつたのである。かゝる見地に於て、大正四年九月内務省警保局長は次の通牒を發し、消防組の基本財産の所有、寄附金の募集、夜警料の徵集等を禁止、消防組の正しき發達を企圖したのである。其通牒に曰く

消防組ハ市町村費ニ依リ經營スベキ警察機關タルヲ以テ、財産ノ主體タルベカラザルニ拘ラズ、往々基本財産トシテ山林又ハ養魚等ヲ所有シ、又ハ寄附ヲ貯蓄シテ利殖ヲ計リ、其他夜警料ト稱シテ毎戸ニツキ集金スルモノ之有候ハ、孰レモ不法ノ嫌疑之有候ニ付キテハ、將來消防組ニ對スル寄附其他ハ一旦市町村ニ於テ收入シ、適宜ノ方法ニ依リ消防組ニ關スル經費ニ支出スル様致度、消防組ニ於テ夜警を爲スノ期間夜警料ト稱シ毎戸ニツキ集金スル如キハ絶對ニ禁止相成候様致度候

消防組の發達に資するため、特殊の基本財産を設定するの可否は議論の存する所であるが、消防組が之を所有し、組員が勞力奉仕をなすことの不可なるは、元より論なきところであつて、此通牒の發せられたるは當然であり、之れによつて世人の消防組に對する認識を新たならしむるの一助たり得たるは、時宜を得たるものといふべきである。

道路施行令及び道路取締令 火事は最初の五分間と稱せられ、消防の出動は最も迅速を要するのである。消火の時機を失すれば、消防作業困難なるのみならず、爲めに大火となり、損害を大ならしむるは、過去の事實に徴して明かである。消防組出動の遅速に大なる原因をなす一つに道路がある、道路に關しては別に述ぶる所があるが、河川湖沼港灣の多き所にありては、場所により橋梁を架することなく、渡船によりて交通の連絡を行ひ、渡船が私營なる場合は勿論、市町村其他自治團體の經營にかゝるものであつても、經費の關係上有料とすることがある、又橋梁の場合に於ても、其架設費及び維持費支辨のため、橋錢を通行人より徵する場合がある、若し分秒を争ふ消防組の出動に際し橋錢又は渡錢を用意するの手續を要し、萬一用意なくして其處を通過し得ずとすれば、消防に蹉跌を來すべきは言ふ

四七

までもない、よつて大正八年道路法が制定せられ、同年十一月の勅令第四百六十號を以て道路法施行令が制定發布せらるゝや、其第十三條に橋錢又は渡錢を徴收し得ざる場合を規定し、其第十項に

水火災警防ノ爲メ又ハ演習ノ爲メ通行スル官吏吏員又ハ一定ノ服装ヲ爲シタル消防夫水防夫と掲げ、災害の警防又は演習の爲め通行する消防組員より、橋錢又は渡錢の徴收を禁じたるは、故なきにあらずといはねばならぬ。

又大正九年十二月十六日内務省令第四十五號を以て發布せられたる道路取締令第六條に
進行中ノ消防車、郵便車、傷病人運搬車及び葬列ニ對シテハ避讓スベシ

と規定したるは、迅速出動を尙ぶ消車の通過を容易ならしむる上に於て然かあるべきである、災害あれば人心自ら焦燥し、殊に現場附近は避難するもの、防禦するもの、救援のため馳せ付くるもの、右往左往し、之れに彌次馬加はりて一層混雜し、其内に消防車は突進し來るのである、英國等にては、消防車に衝突して死傷することあるも、苦情を言へぬのみか、消防車の進行妨害によつて罰せらるゝのである、我國にては、消防車進行の妨害は、それが計畫的に惡意を以てなされたる場合は別として、過失の場合に於ては別に之を罰する規定はないが、消防車の進行に對しては避讓し其行進を容易ならしむべきは、今日にては道徳的常識であるのである。故に此取締令の規定の有無に拘らず、かくすべきであるが、當時に於ては此規定は或は有意義であつたものであらう、何れにもせよ道路法施行令及び道路取締令が、消防組の行動に益し、又其發達助長に便したるは明である。

消防主任警察官の設置 明治時代後期は消防制度創設時代であり、消防組に關する法令、災害豫防に關する法令、並に災害取締に關する法令等の制定發布せらるゝもの多く、此期に於て此等消防事業に關す法令は殆ど完成せられた又此期は公設消防組の搖籃時代であつて、大正時代の初期にあつても尙完全なる公設消防組の發達を見るに至らず、

所謂無消防町村は甚だ多数であつた。然る同時進の進歩は消防機械器具の發達となり、殊にガソリン機關の發達は精銳且つ便利なるガソリンポンプを生み、明治四十二年我國に之れが紹介せらるゝあり、續いて大正三年自動車唧筒の輸入せらるるありて、消防機械は一大革命を促された。此の時に當つて我國消防界の發達に拍車をかけたは、歐州大戰である。歐州大戰は又世界大戰とも稱へられ、我國亦之れに参加し、陸軍は青島に獨逸軍を破り、更に西伯利亞に出征し、海軍は東洋に於ける獨逸海軍を掃蕩し、更に地中海に聯合各國と共同戰線を張り、大いに國威を海外に輝かしめた、而して歐州は戰亂の巷となりたるも、我國は戰線より隔つること遠くして、戰禍を被ること尠く、歐州各國が戰争の爲め生産力を減じたる爲め、米國及び我國に物資の供給を要求し來り、我國の製造工業は之れに促されて空前の大發展をなし、經濟界は好況を呈した、茲に於て山村僻地に於ても之れに刺戟されて活氣を呈し、其影響は惹いて消防組の必要を感じたると、當局の獎勵とによりて消防組を組織するもの相亞き、從來組織されたる消防組は機械器具の改善を行ふの有様であつた。消防事業の發達斯くの如く旺盛なるに伴れて、自然消防組の指導は重要視せらるるに至つた。消防組は市町村の警備機關であり、警察權下に統制さるべきは論勿く、當局に於ても監督を嚴にし、紀律訓練の向上を圖り、其進歩發達に努力し來つたが、消防事務を處理するため、特に消防事務主任を置くには至つて居らなかつた、然かるに消防の發達は消防事務を輻輳ならしめたるのみならず、消防の開發を必要ならしめ、ために各府縣保安課を初め各警察者に消防事務主任警察官を置くこととなつた。之より先き内務省に於ては、消防事業の啓發のためには、消防組の監督者であり指導者である警察官に、消防智識を徹底せしむるの忽にすべからざるを感じ大正三年九月二日より同年十二月十五日まで、警察官の爲めに消防講習會を開催したが、消防事務主任警察官の任命に當りても、専ら消防講習を受けたもの、又は消防事務に堪能なるものより之を選び、消防關係事務の整理に當らしめ、且つ一般巡查及び消防組の訓練開發に主任たらしめ、消防の改善を期したのである。

消防後援団体の擡頭 明治時代の後期が消防制度の創造期といふならば、大正時代は其充實期といふべく、又明治時代後期を公設消防組の搖籃期といふならば、大正時代は公設消防組の幼年期若しくは育成期ともいへる。之を紀律訓練から見れば、往時はオイチニイの稽古から初めざるを得なかつたが、大正も中葉に至つては、尻端折下駄履き連中も次第に其姿を消し、分列行進や叩筒操法も板について來たし、災害場裡の喧嘩争闘も減じ、統制漸く成り、機械器具の如きも龍吐水は腕用叩筒となり、更にガソリンポンプの時代に入つた、之を時運の致すところといへばそれまでであるが、其裏には容易ならざる當局の苦心の連続と、涙ぐまじき組員の努力とのあることを、誰れか見逃し得るであらう。

初め當局が訓練を勵行すれば、訓練が實戦に如何に役立つかを悟らず、「オイチニイ」では火は消えぬといひ、檢閲巡檢を行へば、矢鱈消防機械器具を引き出して破損しては困ると抗議し、聯合演習、聯合點檢によつて各組の間に競争的に施設の整備行はれ、組の表彰規程は其激化を來した傾向がないでもなく、表彰得たさに訓練は強ひられ、施設の整備には自然金を要したるため、或地方には「雨にや降られる消防ちや遊ぶ、これでせつきは火の車」などと歌ひ一部に於ては表彰制度に對し反對さへ出でんとする形勢であつた、かかる間にあつて、當局の指導監督よろしきを得たると、組員の反省自覺とは、組員の精神的修養、消防技能の涵養となり、陋習は順次解消し、災害時に於てのみ出動したる消防組員は、火氣取扱場所の巡檢、夜警、警邏の勵行等、常時に於ける災害豫防に活躍し、進んで社會的事業に奉仕して、中堅國民としての實を擧ぐるに至り此發達を見たのである。

消防の目的が災害の豫防と防禦とにあるは、消防組規則に明示するところであつて、災害の豫防を第一として之れに全力を注ぎ、萬一豫防の方法に缺陷ありたるか、又は不慮の災害ありたる場合、防禦を必要とし、常時訓練演習に努め機械器具の整備に盡すは、一朝有事の際其全能力を發揮し、災害による損害を最少限度に止めんが爲めなること

は、茲に言ふまでもない、然るを世人は少しく大なる災害あれば消防組の活動を云々し、其改良充實に努力するが、災害起らざれば消防組を顧みず、平時に於ける機械器具の整備や、消防組の訓練演習を厄介視し、火氣取扱場所の巡檢等を迷惑顔をした、之れ世の常の人情でもあらうが、一つには大正以前の消防組は、災害の防禦に偏して豫防を行はざりしと、陋習悪弊が世人の心を消防組から遠ざからしめたのにもよる、然るを消防組の向上發達につれて、世人は消防組に對する認識を新にした。

明治時代後期の未葉より、消防組の統一的革新と、消防組員の弔慰救済とを目的とする、消防後援機關を設置すべしとの聲は、諸方に起りたるも、人心未だ之れに向はず、消防義會又は消防協會なる消防後援機關を設けたる府縣に入り、漸く世人が消防組に關心を持つに至りたるも、歐州大戦後の財界の好況とは、茲に一轉機を生じ、睡れるものは活動を開始し、未設の府縣にては之を設立し、消防後援機關の擡頭を見たのである、府縣消防義會又は消防協會の設置は、市町村の後援團體の設置となり、或は警察署管内聯合會、研究會等となつて、各府縣下劃一的統制の下に、消防組は一大發展の途に上つた。

消防補助団体の芽生 歐州大戦による我國運の進展は非常のものであつて、國外にあつては世界五大強國の一に列せられ、國內にあつては製造工業を始め各般の産業は開發され、貿易額は躍進し、經濟界は膨脹し、市街地は膨脹し社會組織は複雑化し従つて火災の原因は日に多く、其損害は激増した、よつて當局は一般國民に向つて消防思想の普及に努め、警火を鼓吹する一方、極力消防の向上發展を策し、消防組員の自覺は紀律を尙ひ、傳統的消防精神の發揮に努むるの美風を生じ、部隊訓練、機械器具の整備、及び其取扱法の改善等、又著々として實現され、一般世人も消防組に對する認識を新にしたるは、前項に於て述べた通りである。

世人が當局の努力と消防組の活動とにより、又各自の消防思想の覺醒により、消防に大なる關心を有するに至りたるの結果として生れたるは、消防補助團體の出現である。

是より先き明治四十三年帝國在郷軍人會設置され、全國の在郷軍人を叫合し、軍事智識の振興を圖り、社會公共事業に竭すこととなるや、火災其他の事變に際しては、在郷軍人は直ちに出でて警察官及び消防組員と協力し、交迎整理に、現場の警戒に、盡力したるは世人の感謝措かざるところである、之れに刺戟されて起ちたるは青年團であつて是亦在郷軍人會員と相提携し、現場に出動し、或は非常警戒に當つた、尤も此以前に於ても地方によりては、青年團員は消防組の基幹として専ら消防に竭したるものもあつたが、之等は消防組として述ぶべきであつて、消防組の補助を目的として青年團の活動したるは、在郷軍人會の活動の後であつた。

在郷軍人會及び青年團は、消防組の補助團體として生じたるものではなく、其事業の一部として警察官及び消防組を補助し來つたが世人が消防組を理解し、其認識を新たにしたる結果、青年消防義勇隊、少年消防隊、婦人消防隊等消防組を補助し、消防組をして其全機能を發揮せしめ、其任務を全ふせしむるを目的とする補助團體が、組織せらるるに至つたのである。

此等補助團體に就ては後章詳説する處あるべきも、之れが設置は國民消防思想の發達の反映ともいふべく、又これによつて一層消防智識は普及し、消防に大なる發達を來したるは、見逃すべからざる現象である。

かゝる消防補助團體の發達は、大正七年に初まり、漸次全國的に普及し、年と共に發達し、大なる効果を收めつつあるのである。

大正大震災の教訓 歐州大戰後我國經濟界の好況は、一般的に國民を奢侈に陥らしめ、輕佻浮薄の風を助長せしめ思想を惡化し、識者をして寒心に堪えざらしめた。此時之大天譴は我國民に加へられた、大正の大震災之れである。

大正十二年九月一日午前十一時五十八分、振天の大震は關東地方に起り、東京、神奈川、千葉、茨城、埼玉、山梨及び静岡の一府六縣に亘り、驚天動地の暴威を逞ふし、倒潰家は算なく、土地は龜裂し、交通機關、通信機關は杜絶し、水道は破壊され、火災各所に起り、沿海地方には山なす海嘯襲ひ來り、歡樂境も、平和の天地も、倏急にして嗚悲叫喚の修羅の巷と化し去つた、夜に入つては電燈滅し、餘震頻々たる間に流言蜚語亂れ飛び、火災の火炎は天に沖し、人心恟々として不安極りなく、慘鼻の極を盡した。此間にあつて消防組、在郷軍人會、青年團、其他各種團體は擧つて活動を開始し、災害の防禦と治安維持とに奔走し、就中消防組の献身的活動は、古來の傳統たる犠牲的精神と任侠の義氣とを發揮し、有史以來の大國難に處したるもので、賞讃に餘ありといふべきである。

大正大地震は丹澤山が震源地であるので神奈川縣下の被害最も甚しく、東京府之れに次ぎ、千葉、埼玉、山梨、静岡、茨城の順序であるが、地震に伴ふ火災は其猛威を逞ふし、東京市の如きは三日に亘りて火焰收らず、中央官衙を初め樞要地域を織滅せしめ、横濱、横須賀等の諸市亦焼失して曠野と化し、死傷萬を以て數へられ、損害百億に達し帝都が全滅に類したる結果其影響する處愈甚しく、爲めに我國經濟界は非常なる窮迫に陥り、政治に、外交に、一大脅威を感じしめた。幸にして災害當時は戒嚴令下りて治安は維持せられ、後、官民一致の努力奮闘は今日の華々しき復興を見るに至らしめたが、吾人は此大震火災の與へたる教訓に鑑み、今後萬一の場合に處するところがなくてはならぬ。

大正大震災の以前、今村理學博士は之れを豫知し警告を發したるも、當路は之を以て人心を惑はしむるものとし、却つて博士の一般世人への警告を禁止した事實がある。又最近の大慘事たる昭和十年四月二十一日の臺灣の大地震も工業大學教授工學博士谷口忠氏は臺灣に於ける地震帯を研究し、今回の罹災地方の建築物の改善につき警告を發せられたが、之れ亦當局初め世間から注意を惹かなかつた。昨昭和九年の京阪地方の大暴風は、測候所より警報が發せら

れたが、地方民に之れを知らずる方法を缺きたる爲め、あたらず有爲の少年を多數倒潰せる校舎の下敷とさせた。昔日大火を以てさえ天譴なりとした時代は過ぎ、今日の進歩せる文化は、前記の如く地震、風害を豫知し、之れに對し警報を發し得るまでに科學を進歩せしめて居る。徒に天變地異を以て天譴なり、不可抗力なり、とし、之れが豫防對策を講ぜざるが如きは、愚の骨頂なりといはねばならぬ。

然りと雖、又一面に於て科學にのみ頼り得ない場合あり、又警報の發せられたる場合と雖、其警報が完全に一般に通報されない事がある。科學にのみ頼り得ないといふことの卑近なる例は天氣豫報である、今日進歩せる科學を以てして尙ほ完全に天災地變の豫斷を許さぬとすれば、科學を經とし、經驗を緯とし不斷に其用益を怠るべからずといふに歸着する。然らば大正の大震火災は何を我等に教へたかを検討することは、極めて有意義のものでなくてはならぬ。其第一は耐震耐火建築の必要である。震災前東京丸の内三菱原は、現代都市の標本の如く洋風の大建築が軒を並べた、而して其等大建築の中、地震學に基礎を置きて設計建築せられた日本興業銀行は、微動だにせざりしに反し、之れを顧ず、米國式建築を模し、又は我國の風土に暗き外人技師によつて設計施工せられた建築物は、被害甚大であつて、甚しきに至つては、理想的建築とせられて居る鐵筋コンクリート建築にして倒潰し、多數の貴重なる人命を奪つたものさえあるのである。木造建築物にても、古き經驗を基礎とした大厦高樓が、其經驗より來たれる耐震施設によつて、安全たり得た例も尠くない。地震國たる我國にては、我國風土に適する耐震建築が必要である。

大地震に火災は付き物である。其火災の原因は種々あるが、火鉢其他の轉覆及び其上に可燃燒物の墜落すること、藥品其他の震動、摩擦、墜落による自然發火等が其主なるものであつて、地震によつて家根を振ひ落され、水道は破壊されて火災は擴大される。東京、横濱、横須賀等の焼失は、地震の時が恰も晝食時であり、各家共に多く火氣を用ひ居りたる爲め、發火を速かならしめ、木造建築多く耐火及び防火設備の少なかりしが、大なる原因である。若し耐

火建築多く、耐火、防火施設が今少し備はり居りしならんには、損害を著しく軽減し得たであらうことは、東京の帝國劇場が焼失したるに拘らず、其附近が耐火建築なりしたため、延焼を免れたるを考へ合すれば、思ひ半ばに過ぐるものがあるであらう。

耐震耐火建築の必要如斯である。

此教訓は市街地建築法其他の法令となり、建築制限となり、直ちに建物の全部を耐火、耐震のコンクリート造、其他となし難き經濟的事情を參酌し、木造建築にても防火区域内に建設せらるるものは、適當の耐火施設をなすべきを規定せしめた。

其第二は防火施設の改善である。而して之は水利、防火廣場、道路、及び消防器具の四方面に別たれる。

東京を始めとし、横濱、横須賀其他の都市にして水道の施設ありたる地にては、水道を以て第一の消防水源とし、堀井戸等は之れを顧ず、或は埋め、或は新設せずといふ状態であつた。然るに地震と同時に送水管に故障を生じ、送水唧筒は運轉不能となり、水道は斷水し、消火栓はありても其役をなさず、僅かに濠水、河川、池水、海水を以て防火に努めたに過ぎず、多くは拱手して祝融氏の意のままに振舞はしむるの外、途がなかつた。茲に於て震災後復興に連れ、貯水池、消防井戸の設置に意を注ぐに至り、此風全國に波及した。凡そ水道に限らず電氣、瓦斯等の文化施設は極めて便利なるに相違なきも、一度其停止せらるるに於ては、是れ程始末の悪いものはない。我等は此便利調法なる文化施設の利益を享くると同時に、之れが停止さるる時のあるべきを豫想して、充分なる對應策を講じ置く用意の必要あるを忘れてはならぬ。これも火災の教訓の一つであつて、深く味ふべきである。

日々香煙の絶ゆることなき東京本所の震災記念堂を見よ。此地は震災當時陸軍被服廠跡の空地で、樹木もなく又防火施設は一もなかつた。地震と火災に追はれた市民は、此空地に蝟集して難を避けんとした、然るに間もなく其四周

は火に圍まれ、突風は此所は煙と焔とを送つて焦熱地獄を出現し、遂に慶多の生靈を奪ひ去つたのである。之れに反し淺草公園も、同じく四周火を以て圍まれ、同所の被官稻荷社の如き、軒を連ねし寺院が焼失したるに拘らず、延焼を免れ、観音堂の大伽藍亦事なきを得た。或はいふ、之れ被官稻荷や正觀世音の御利益の然らしむるところなりと或は然らむ。然れども此地樹木多く、公園としての施設たる池水、噴水等が、防火に大いに役立ちたるは見逃してはならぬ。又或は芝虎の門にても樹木ある廣場ありしたため、火災を防止し得たる事實がある。此等の事實は防火の見地より、又避難場所として、防火施設ある防火廣場の必要を教ふるものである。復興せる東京に於ては、要所に廣場を設け、殊に小學校の附近には必ず之を設け、之れに小公園の施設を施し、市の美觀を添ふると共に市民の保健に益し有時に際しては防火地として、又避難場所として役立たしむる計畫が立てられた。地方農村には、田畑山林等が自然の防火地帯となり、防火廣場をなして居るが、少しく人家稠密せる市街地にありては、防火地を考慮に入るゝ必要があるであらう。

震災後全国的に道路の改良は一際目立つものがある、これ一は自動車による交通の發達にもよるが、有時に際し、道路の良否が如何に災害防止及び救援に至大なる關係あるかを、大正大震災が如實に教示したるにもよる。地震一度起るや、汽車、電車の交通機關は全く停止され、残されたるは只一つの道路であつた。彼の火災當時道路が完全ならしならんには避難に、防禦に、救援に、多大の便利ありしならんことは、皆人の肯定する所である。道路の舗装に就ても、東京市が巨費を投じて建造した銀座を初め所々の木塊道路は、火災の爲めに燃焼し、延焼を助けたことは、我國の道路は木塊道路を非とすることを教へた。

大震災の當時、其地域内の消防人は、餘震相次ぐ中にあつて、身命を培して其職に盡瘁したるは、誠に涙ぐまじき限りで、之れに對し滿腔の敬意を捧げぬものとはない。消防組の活動は献身的努力の限りを盡し、刀折れ、矢盡き

て止んだのであるが、遇々芝公園の増上寺に近い大公孫樹に飛火し、あわや一大事たらんとした、此時さそくの奇智に、炭酸曹達水容器を利用し、辛くも其飛火を消し止め、そこに集る避難民と、増上寺及び靈廟の大伽藍其他の建築物とを、完全に保護した一佳話がある。これ斷水其の場合、ケミカルポンプ(消火器唧筒)が必要なることを示す左證である。震災當時此種の唧筒が活躍したらんには、水道斷水後に於て相當の効果を收め得たであらう。今日にても大阪市以外尙あまりケミカルポンプを見受けないが、今後此れが發達の必要がある。

以上は大震災による物的教訓であるが、最も注意を要するは精神的教訓である。

其の第一は『地震と火の用心』である。『火の用心』それは常に我等が口にするのであるが、非常に際しては狼狽が先に立つて、『火の用心』は兎角忘れられ勝である。然るに地震には火器の顛倒、藥品の自然發火等多くの發火原因を伴ひ、然も水道の斷水は豫想に難くない、故に強震ありたる場合は、火の用心第一に、先づ發火の原因を始末すべきである。關東大震災火災に焼け残りたる地區の住民は、一時は驚きて戸外に逃げ出したるも、各自相警めて家内に引返し、火の元に注意し、事なきを得たるは、隠れなき事實である。忘れてならぬは『火の用心』である。

其の第二は非常に對する訓練である。大正大震災の當時、訓練なき市民の無秩序な行動が、如何に災害を大ならしめたか、其實例を擧ぐれば限りがない。震災後東京市各小學校で、兒童に震災の時の避難法の訓練をなさしめ、『盜難後の心張棒』と諷られたことがあるが、地震火災等の災害が起らぬと誰れが言ひ得るか、又空襲の危険も豫想される今日、災害時に處する訓練は、必要缺くべからざるものである。昨年京阪地方の大風害に際し、大阪市内の一小學校にて、大風雨中に兒童を運動場に集め、互に手を堅くつなぎ、駄足をなさしめて居た一教師があつたといふが、其用意の周到さ實に感心である、即ち駄足で運動し居れば、萬一の場合安全地に向つて脱出が出来る、これに反し停止して居れば、萬一の場合に出足を阻まれる處がある、而して運動場の中央に居れば、校舎倒潰の方向を見定むるにも

都合よく、誠に時宜に適切た方法で、かくして兒童を完全に父兄に引渡して歸宅せしめ得た、之れと震災當時とを思ひ合すれば、面白い對照である。

其の第三は「人の和は天に克つ」ことである。神田佐久間町の一角が、震災を被らず、火災から免れ得たるは、何の故であるか。此地は元來廻米問屋多く、神田川と稱し、徳川時代から有名であつた土地柄であり、安政大地震に嘗めたる苦汁の味を忘れず、嚴重なる家造りをなしたるにより、強震に堪え、危険を冒して踏み止りたる少數の町民が協力して火防に努め、火災から免れたといはれて居る。これ人の和が天に克ちたる實例でなくて何であらう。かゝる例はこれを求むれば隨所に見出し得る。震災の復興事業、それも人の和の力強さを物語る一例である。復興事業が比較的短時日の間に達成せられたるは、罹災地官民の奮勵努力と、國を擧げて陰に陽に之れを援けたるに因り、嘗に各都市の形態をして舊に優るものとなしたるのみならず、此震災に起因する國家的經濟窮迫に耐へて之を回復し、よく他の侮を受けずして今日に至りたるは、偉となさねばならぬ。

由來我國民は犠牲的精神に富み、愛國觀念旺盛であつて、非常時に際してはよく一致協力し、如何なる國難をも排除し來りたるは、歴史に徴しても明である。此精神の存する限り、如何なる震災も、火災も、又風害も、恐るるには足らぬとはいへ、今や東洋に於ける我國の地位は愈向上し、東洋の諸國を指導するの立場に置かれ、歐米諸國との關係は海軍々縮會議其他に關し、一方の旗頭として他國をリードすべき位置にあり、然も國際間の諸問題は極めてデリケートな動きをなすもので、彼の國際聯盟脱退も本年に於て其効力を發生し、一步を誤れば名譽の孤立に立たんとして居る。されば國民は一層大震災の教訓に鑑み、適當の施設と用意に努め、かゝる災害により再び國力を消殄するが如きことなからんことを期すべきである。

全國消防組頭會議 各府縣消防協會又は消防義會の開設によつて、各縣下消防組の劃一的發展と統制とが行はるゝ

の時、全國的に消防界の統制及び發達を圖らんとする意見を生じた、遇々大正十五年一月六日、東京に於ける消防出初式に當つて、畏くも 皇太子殿下の御親臨を辱ふしたるを以て、之れを記念し全國的に消防の統一發達を期し、聖旨に應へ奉らんが爲め、大日本消防協會の設立が企圖せられ、東京府消防協會が主となり全國に亘り二十人の發起人を擧げて之れを協議し、其第一着手として、大正十五年九月二十四日より四日間、東京日本青年會館に全國消防組頭會議は開催せられた。

全國より此會議に來り會するもの、組頭七百五十八名、官吏百二十三名で、來賓若槻總理大臣、濱口内務大臣、太田警視總監、平塚東京府知事等の祝辭があり。議事として大日本消防協會設立議決の外、各發起人から左の事項を提案附議した。

- 一、警保局ニ消防課ヲ設ケ各府縣警察部各警察署ニ消防事務專任者ヲ置クノ件
- 一、各府縣警察部ニ機械技手を置クノ件
- 一、消防組規則全部改正ノ件
- 一、市町村警備費ニ國庫補助ノ途ヲ啓クノ件
- 一、消防設備ノ標準及唧筒規格ヲ定ムルノ件
- 一、消防訓練ノ方針ヲ統一スルノ件
- 一、警察官吏ニ消防教育ヲ實施スルノ件
- 一、火災損害調査標準ヲ確立スルノ件
- 一、火災保險料率協定條件ニ消防設備ヲ加ヘシムルノ件
- 一、適法ナル破壊消防實施ニ伴フ損害補償ノ法ヲ定ムルノ件

- 一、國定教科書中火災損害並消防教育ニ關スル事項訂正ノ件
- 一、災害避難訓練ヲ學校ニ實施スルノ件
- 一、全國的防火デーヲ設置スルノ件
- 一、放火ヲ誘起スヘキ超過保險防遏ノ方法ヲ定ムルノ件
- 一、義勇消防員ノ精神待遇向上ニ關スル件
- 一、特設消防署長ニ對シ火災豫防ノ權限ヲ附與スルノ件
- 一、軍隊ニ消防知識ノ普及ヲ圖ルノ件
- 一、特設消防署長並都市計畫施行都市消防組頭ヲ都市計畫委員ト爲スノ件
- 一、特設消防制度ニ關スル件
- 一、「サイレン」ノ一般使用ヲ禁止スルノ件
- 一、消防職員並組員ノ汽車、電車、無賃又ハ割引乗車ノ件

大正時代公設消防組發達の狀況 大正時代は公設消防組の幼年時代であり、育成時代であつて、各府縣當局は機會ある毎に公設消防組の設置を市町村に慫慂し、消防組規則制定の趣旨又漸く徹底し、市町村に於ても或は消防組設置の必要を感じ、或は公私消防組對立の非を悟り、或は私設消防組の自覺により、公設消防組の設置に障阻となり居たる、古き傳統と複雑なる因縁を打破し、私設消防組を解消して公設消防組を設置し、又は之を公設消防組に併合して組織を變更するものあり、殊に大正御大典、攝政宮殿下御成婚を記念して之を行ふもの多く、大正の末年に至りては全縣下を公設消防組たらしめたるもの増加し來つた。

消防組數の増加と共に、之れが向上發展か企圖せられたるの結果、紀律は肅正されて陋習惡弊次第に其跡を絶ち、

消防技術は進歩し、防禦に偏重したるものが豫防警戒に努め、尙ほ進んで消防組の活動範圍は擴大せられたるは、特筆大書すべきである。

之れと同時に製造工業及び科學の進歩に、消防機械器具大いに改良せられ、消防組は精銳なる機械器具を整備し、鐵骨火の見櫓、消防用貯水池、消防専用電話、火災報知機等の諸施設の設置せらるゝもの多きを加へ、内容次第に充實せられたるも此時代の特徴である。

而して各府縣消防協會又は消防義會の設置は縣下消防組の統一發達となり、大正十五年に至つては全國消防組頭會議開催せられ、全國的に消防の統一改善を圖るの礎を作り、我國の消防育成は著々として行はれて行くのである。

第六項 昭和時代

大日本消防協會成る 明治二十七年孤々の聲を上げた我國公設消防組も、明治時代の搖籃期を過ぎ、大正時代に入り、當局の監督指導宜しきを得たると、科學及び製造工業の發達並に財界好況の恩惠とによりてぬく／＼と成育し大正震災の試練と教訓とを得て愈確固たる信念の下に發達の一路を辿り來つたが、消防の全國的統一改善を目標として大正十五年九月開催せられたる全國消防組頭會議に因り、大日本消防協會を設立し其目的を達せんとし、爾來創立委員を設けて其創立に當らしめ、委員は數次會合して案を作り、内務當局と協商し、遂に昭和二年七月十四日東京京橋區木挽町歌舞伎座に盛大なる發會式を舉行し、茲に大日本消防協會は成立したのである、其會則を見るに

第三條 本會ハ消防ノ改善發達ヲ期スルヲ以テ目的トス

第四條 本會ハ前條ノ目的遂行ニ關シ左ノ事業ヲ行フ

一 消防制度ノ調査攻究ニ關スルコト

- 二 全國消防ノ連絡ニ關スルコト
- 三 消防智識ノ普及向上ニ關スルコト
- 四 國民防火ノ思想普及ニ關スルコト
- 五 其他火防並ニ消防開發上必要ナル事項

とあり、其の二條第二項に據り各府縣に支部を設けて全國的に消防の統一改善に着手し、昭和四年九月七日内務省の設立許可を得て財団法人となり、同三十日寄附行爲中一部改正を行ひ、其目的に向ひ邁進しつゝあるのである。

我國消防組は前に述べたるが如く、自治的に發達し、後ち消防組規則によりて其の據るべき大綱は示されたのであるが、各府縣は事情の異なるものありて其施行細則は一樣ならず、其發達も區々であつた。よつて之れを一統制下に置き其發達を圖るは時宜に適したること、いふべく、殊に操典の如き、機械器具の規格制定の如き、多くは警視廳の規定を標準として行はれたりといへ、地方により相違せるものあり、之を劃一し、機械器具の検査檢定を行ふが如きは緊要事であつて、大日本消防協會に於て之を行ひ、又組織制度の研究改善を圖り、消防智識の普及向上に資するため圖書を刊行し、講習會を開催し、全國的に同一歩調を取りて消防を發達せしめんと努力するは、貢獻の大なるものあるべく、昭和時代の消防界は愈多幸ならんとして居るのである。

天皇陛下御親閱 昭和三年十二月十七日、各府縣廳は内務省警保局より左の電報を受けた。

昭和四年一月六日宮城前御苑ニ於テ、全國消防組代表者に對し 天皇陛下御親閱ヲ賜ハラセラルベキ御模様ヲ拜聞スルヲ以テ、貴管下各組ヨリ組頭又ハ小頭一名ヲ代表トシテ選抜派遣セラル、様、配慮シ置カレ度
拜するに 天皇陛下におかせられては、御大典の餘慶を消防組に分たせられんとの御思召であらう。何たる光榮ぞかゝる光榮に浴せんとは前代消防人の夢想だになし得ざりしところであつて、消防に大御心を注がせ給ふ此聖恩に、

今更ながら感泣し、府縣當局は代表者選抜に慎重審議を重ね、服装、訓練等に夫れ々々細心の注意を拂ひ、史上類例なき此盛儀に際し、萬遺漏なからんことを期し、手配をした。其後警保局長より次の通牒があつた。

- 一、主務課長消防主任及び協會代議員ハ五日午後一時警視廳内東京府消防會館ニ出頭シ、其際參列者名簿ヲ携帶スルコト
- 二、消防組頭ハ府縣ノ定ムル制規ノ服装ヲ用ヒ纏旗等ハ携帶セサルコト
- 三、參列員ハ分列式ヲ行ハサルヲ以テ特別ノ訓練ヲ要セサルコト
- 四、參列員ハ當日午前八時迄ニ大手門前濠端ニ集合ノコト
- 五、御親閱ハ午後一時頃ナルニ付携帶便ニシテ攝取容易ナル晝食ヲ携帶スルコト
- 六、宿屋ノ斡旋困難ニ付相當手配セラレ度キコト
- 七、主務課長ノ服装ハ禮裝タルコト
- 八、荷物等ハ現場ニ携帶セサルコト

昭和四年一月六日、この日こそ我全國消防人の肝に銘して忘るゝことの出来ない光榮の日である。當日午前七時各府縣消防代表者は夫れ々々所定の場所に集合し、服裝點檢を行ひ、指揮者に率ひられ、歩武堂々宮城前の御親閱式場向ひて進入す、北は樺太北海道より南は臺灣まで、全國より參集するもの二萬九千八百八十、天氣晴朗なれども烈風砂塵を捲く中に、緊張して所定の位置に就く。見渡せば大内山の常緑を背景とし、純白の天幕に金色燦然たる菊花御紋章附したる玉座は、陛下の臨御を御待ち申上げ、其前面に一段高く設らへたる臺は、陛下が義に勇む赤子を嚮はす爲めの御野立場であらう。

午後一時號砲一發中空に轟くと見れば、一同最敬禮中を軍樂隊の「君が代」奏樂裡に、陛下は式場に出御あらせら

れた、拜すれば 天皇陛下には陸軍通常禮裝に大勳位章を御佩用、無蓋自動車に召され御英姿颯爽としてあたりを拂ひ、河台待従次長御陪乗申上ぐ、即ち望月内務大臣は自動車にて御親閲の御先導申上ぐれば、参列者は咫尺の間に愈麗はしき龍顔を拜し奉り、莊重深嚴只々感激に咽ぶのみであつた、順次御親閲を了せられ、玉座に入御あらせらるるや、望月内務大臣は恭しく御前に進み、参加員數、分列式の次第を奏上し、次で宮田警視總監より分列式開始の旨を奏上し奉れば、聖上陛下には玉座前の臺上に上らせ給ふ、號砲を合圖に行進喇叭は嘯唳と響き渡り、大江戸いろは四十八組の名残を止むる東京市の消防組一千五人が、小泉消防司令指揮の下に木遣音頭も勇ましく御前を過ぎ、次で山川消防司令の指揮する東京府下の消防組四十組一千五百六十四名、河村隊長の率ゆる女子消防隊代表三十七名、堂々として行進し終れば、軍樂隊の勇壯なるマーチにつれ消防自動車の分列に移つた、此間四十分。陛下には一々臺上より擧手の禮を賜り、参列者何れも無上の感激に打たれた。分列式の終了と共に、望月内務大臣中央廣場に進み、天皇陛下萬歳を發唱すれば、衆皆之に唱和し、其聲天に響き、大内山の松樹爲めに動くぐかと思はれた、之ぞ數方の参列者の感激の現れである。

かくて有史以來未曾有の消防組御親閲の盛儀も無事終了し、再び起る君が代の奏樂と、諸員最敬禮の中に還幸あらせられた。申すも畏き事ながら、濛々たる砂塵間々龍顔を没するの烈風中、聖上陛下には長時間御佇立のまま、いと御熱心に雄々しき消防人の行動を御親閲遊ばされたるには、流涕せざるはなかつた。

此有り難き無上の光榮に浴した全國の消防人、豈感奮興起せざるべけんやである。全國一齊に振ひ立ちて赤誠以大御心に酬ひ奉らんことを誓ひ、昭和新春の劈頭、消防報公の聲は高らかに上り、昭和時代消防發展の自覺しきものあるべきを豫想せしめた。

消防及び防火思想の普及 大日本消防協會の成立に先き立つこと四月、昭和二年三月七日午後六時二十八分、京都

府下に大地震が起り、其の震度大正大地震のそれに勝るとも劣らぬものがあり、家屋の倒潰せるもの算なく、慘狀を極めた。然し幸にして其の地域の大ならざりしと、火災の之れに伴ひしもの少なりしと、而して大都市に其の災害の及ばざりしとにより、物的損害比較的尠なく、其の影響は大正大震災程大でなかつた。我國消防界の劃一的統制改善を目的とし、更に 天皇陛下御親閲によつて一層其の使命の重大さを自覺した協會は、但州の大地震の刺戟未だ人心に新なるとき、大いに消防思想を鼓吹せんと期した。

茲に於て大日本消防協會は、全國に亘り消防及び警火思想の徹底的普及運動を企圖し、先づ關西各府縣と共同して防火デーを開催し、次いで關東地方各府縣と共同して之を行ひ、消防智識の作興と防火思想の普及に大童の活動を起した。

其方法としては、(1) 各新聞社の後援によりて各新聞紙上に消防及び防火の記事を掲げ、又ポスター、小冊子を配布する文書による宣傳、(2) 講演會、活動寫真會の開催、(3) 活動寫真館其他の諸興行場には火防宣傳の小旗ポスター、ピラを掲出し、或は幕緞張に用ひしめ、防火運動に利用し得べき題材を努めて演出せしめ、(4) 消防及び消火に關する展覽會を開催し、(5) 消防自動車等による路上宣傳及び青年團等と協同の防火行進を行ひ、多衆集合の街頭公園等有効の場所を撰みて屋外講演をなし、(6) 火災出動、消防機械器具の取扱、放水作業、模擬火災等を催して多衆に觀覽せしめ、(7) 空よりは飛行機を利用してピラを撒布せしめ、又はポスターを掲げしめ、(8) 學校にては兒童の避難演習を行ひ、自由畫、感想文、標語等を作成せしめ、(9) 一般民衆よりは標語、俳句、都々逸等を懸賞募集し、(10) 組員は各戸につき火氣取扱所、電氣、瓦斯等の設備を點檢して必要に應じては修理個所を指示し、一般的注意を與ふるのであつた。

此運動は、其後引續きて火災期節前の各地の年中行事となり、相當大なる効果を收めつつあり、民衆に消防組に關

する認識を一入深からしめ、消防組の組織變更、施設の整備の上に大なる後援を與へしめつつあるのである。

消防組員服裝の全國的統一 團體的行動をなすに當り、其團體員の服裝區々なるは種々の支障を生じ、且つ紀律の點より見るも面白からざる點あり、昭和四年御親閱に參列の爲め各地より上京せる消防代表者の服裝も組として見るときは統制あるも、全國的に之を見るときは區々雜多であつたので、全國消防組員服裝統一を必要とし、曩に大日本消防協會に服裝改正委員會が設けられ、種々調査の結果内務省に其の意見書を提出した、又内務省警保局に於ても其の必要を認めて研究し昭和六年一月大體の具體案を得、越へて三月開催された大日本消防協會代議員會に之れを内示して其の意見を求め來つた、よつて代議員會に於ては直ちに之れに關する小委員會を設けて慎重審議を爲し、修正意見を附して之れを申達した、内務省にては其答申に基き更に充分の審議を續け、愈々其の成案を得たるを以て、昭和六年九月二十九日附内務省訓第一、二三〇號を以て左の通り其の發令を見るに至り、服裝統一の事も茲に全く解決を告げ全國消防組統一の第一着手となりたるは、我國消防界の爲め誠に慶賀すべきである。

内務大臣の訓令並に、岡警保局長が廳府縣長官(東京府を除く)に對し、之れが實施に關し周到なる注意を促した依命通牒全文は後記の如くである。

内務省訓第一、二三〇號

廳府縣長官 (東京府知事ヲ除ク)

消防組ノ服裝區々ニ亘リ、而モ往々ニシテ華美ニ流レ、又ハ法令ニ定ムル服飾ニ類似シ、若ハ佩刀シ、或ハ其ノ形態不適當ナルカ爲、行動ノ敏活ヲ妨クル等遺憾ノモノアルヲ以テ、將來消防組規則第十一條ニ依リ消防組員ノ被服ヲ定ムル場合ニ於テハ、別紙消防組員制服圖例ニ依ラシメ、其ノ齊一ヲ期スヘシ
右訓令ス

昭和六年九月二十九日

内務大臣 安 達 謙 藏

内務省發警第四五號

昭和六年九月二十九日

内務省警保局長 岡 正 雄

廳府縣長官殿 (東京府知事ヲ除ク)

消防組員制服ニ關スル件依命通牒

消防組員制服ノ義ニ關シ、本日内務省訓第一、二三〇號ヲ以テ訓令相成候處、本件實施ニ付テハ左記各項御留意相成度右申進候

記

- 一、本件制服ハ調製期到來シ、又ハ現在使用セル服裝カ其ノ使用ニ堪ヘサルニ至リタルニ依リ、更ニ之ヲ調製スル必要ヲ生シタル場合ニ於テ實施スルコト、次ノ調製期ヲ待タスシテ新ニ調製シ、又ハ現在使用スル服裝カ尙使用ニ堪フルニ拘ラス、新ニ調製セムトスルモノハ、嚴ニ之ヲ禁スルコト
- 二、服裝ヲ分チテ甲乙ノ二種トシタルハ、市町村ノ財政狀態、組員ノ勤務情況、地方ノ實情、其ノ他ニ稽ヘ、適宜之ヲ選擇セシメトスルノ趣旨ナルヲ以テ、其ノ兩種ヲ併セテ給與スルヲ要セサルハ勿論、故ラニ甲種ヲ用キシムルカ如キコト、亦無之様注意セラレタキコト
- 三、同一消防組ノ組員ニシテ甲種及乙種ノ混用スルカ如キハ、紀律上望マシカラサルヲ以テ各消防組ヲ單位トシテ其ノ何レニカ統一セシメラレタキコト。但シ組頭小頭ハ甲種ヲ用キ、消防手ハ乙種ヲ用ユルハ妨ケナキコト

四、甲種ヲ用キル場合強テ「セル」地ヲ使用シ、爲ニ消防組ノ經費ヲ大ナラシムルカ如キコトナキ様留意セラレタシ
但シ同一消防組ノ組員中組頭、小頭ハ「セル」地ヲ用キ、消防手ハ雲齋地ヲ用キルハ妨ケナキコト
五、甲種ノ襟ノ立折襟ヲ折襟トシテ使用スルハ差支ナキモ、團體的行動ヲ爲ス場合ニハ必ス立折襟トシテ使用セシム
ルコト

六、地方ノ情況ニ依リ特ニ外套又ハ防火具ヲ用キシメ、若ハ勤務別ニ依ル腕章等ヲ附セシムルノ必要アリト認メラル
ル場合ハ、別ニ之カ制式ヲ定メラル等、適宜ノ方法ヲ講セラレタキコト

七、甲種ノ著装ヲ爲ス場合ニ於テ卷脚絆及短靴ニ代ヘ、黒色革製長靴ヲ用キ、又ハ短靴ニ代ヘ黒色地下足袋ヲ用キル
モ妨ケナキコト

特種消防研究の必要 文化の進歩は火災の原因を増すのみならず、火災の様式をも變化せしめ、新らしき火災を生
ぜしむるのである、故に消防人たるものは常に研究を怠らず、火災より更に一步先きを歩くことに心掛けねばならぬ
ことは言ふまでもない。

明治初年の我が國民は、泰西の「文明開化」に眩惑され、西洋の模倣にこれ努め、我國の製品にても上等のものに
「上等舶來」といふ語が用ひられた程、西洋崇拜に傾いた、然し其西洋崇拜も、やがて我國の消化力により、泰西
文明を我國情に同化せしむる因をなし、遂に之を我がものとし、殊に歐州大戰後の我國は、科學に、工業に、建築に
独自の見解による發見新工夫をなし來つたが、之に伴つて變つた火災も亦多く、昭和六七年に至つては、高層建築
の火災、石油藏貯庫の火災、地下鐵道の火災、船舶火災等、應接に遑なき程である、高層建築火災の代表的ものは
昭和七年十二月十六日の東京日本橋白木屋呉服店の火災で、避難民の救護のため所澤飛行隊から飛行機が出勤したと
いふ、前代未聞の記録を残し、帶や反物を織ぎ之れによつて屋上より地上に避難せんとしたものが、其切斷により墜

落死を遂げたものもあつた。

高層建築其他特殊建築物の多き市街地の消防組が、是等の火災に對する研究の必要なるは勿論であるが、地方に於
ても亦特殊消防の研究は忽にすべきでない、殊に學校、病院、工場等に對し、電氣、瓦斯、油類に對し、不斷の研究
が必要である。

從來我國にては、注水消防を以て第一とし、管鎗を持って火點に突入し、勇猛なる活動をなすは、我國消防の一異彩
であつて、彼の白木屋の火災の際の如き、消防隊員は四十二口の筒先を以て最も危険とされる屋内侵入を敢行し、英
米人を驚嘆せしめた、破壊消防は火點に近き個所に於て行はれ、其活動の敏捷果敢なるは等しく世の賞讃を博して居
るところである、乍去大規模の破壊消防、窒息消防に至りては、其研究に向多くの餘地あるを覺ゆるのである、尤も
大規模の破壊は消防の最後の手段であつて、屢々行はるべきではないが、風速十メートル乃至十五メートルを算する
烈風は、我國にてはあまり珍らしきことでもないのであるから、之れが對策としては破壊消防は考慮に入るる必要
あり、石油、貯藏所、瓦斯タンク等が各地に多きを加ふるに従つても益之れが必要となる。窒息消防は、炭鑛山のも
のは暫く措くとしても、電氣、瓦斯、揮發油、各種自然發火し易き藥品類の使用の増加と共に、益其必要を感じるの
であるが、之が研究充分なるや、否、疑なき能はずである、況して特殊建物に對し殊に其感を多からしむるのである
我國の現状を見るに、高層建築、特殊建築の増加は、市街地より地方に向つて普及されんとし、地方産業の開發及
び經濟救濟の一方法として、各種製造工業の地方に企圖さるるもの漸く多く、航空機の發達は從來の戰術を打破し、
空襲によらんとして居る、之を見、彼を考ふるとき、注水消防に一層の精進をなすべきは勿論であるが、窒息消防、
破壊消防にも研究を注ぐべき必要あるを悟り得るであらう、之れに伴つて高層建築其他特殊建築に對する消防法も忽
せにはならぬのみならず、救助袋、救助幕、其他の使用法、救護應急處置等の研究も行はるべきである。

三陸地方震災と海嘯 昭和八年三月三日午前二時二十二分十四秒突如として起つた激震は、東北、北海道より關東方面へかけ大震動を感じ曉の夢を破つたが、震源地の金華山沖に近き三陸地方は感度最も烈しく、同時に大海嘯を起したため、岩手縣釜石、宮古附近の海岸町村一帯、宮城縣下の氣仙沼、石巻方面の町村一帯及び青森縣上北郡の一部は甚だしき被害を受け、多數の流出家屋及び破損船舶と、死者千五百三十五人、行衛不明九百四十八人を出し、就中釜石町は地震と共に三ヶ所より火を發し、百八十戸を焼失、夜明け頃に至り漸く鎮火した。

内務省の發表によれば

各縣被害調査 三日午後十一時現在内務省發表

同船破損	船舶計	浸水	燒失	倒壊家屋	流失家屋	行方不明	傷者	死者	各縣被害				合計
									岩手縣	宮城縣	青森縣	北海道	
									一、三八〇	三六二	八	一一	一、五三五
									二七六	二五	三七	一	三三八
									六九六	二二七	二一	四	九四八
									二、三五二	三八八	六六	一五	二、八二一
									二、四五三	四四〇	五九	一一	二、九六三
									九七一	二八三	一三	一一	一、二七九
									二一一	一	一	一	二二一
									五、〇五四	一、二二九	一	七〇	六、三五三
									八、六七九	一、九五二	七二	九三	一〇、七九六
									?	一、一四四	三七〇	一四	一、五二八
									一	一	八五	一	八五

とある。

此災害が何を我等に教へたかを検討しよう。

三陸地方は明治二十九年の大海嘯の經驗を有して居つて、當時釜石の如きは六千人の人口中四千の死者を出すの苦汁を味つて居るが、今回の被害も宮古及び釜石を中心とする地方の損害が甚大であつた。釜石にては大なる家が道路の真中に押し流されて居り、片方には幾百噸かの船が押し上げられ、山の中腹に二十數艘の帆船が打ち上げられ、津浪の中心地から火を發し、百八十九戸が焼失し、流失家屋は二百三、破壊焼失を合計すれば五百十二戸に上る、が人的被害は死者三十五名、行衛不明十四名、負傷者二百であつた、現在の釜石は人口二万五千、戸數四千七百で、宮城縣第二位の都會であつて、明治二十九年の災害に比し、損害程度の非常に尠なりしは如何にといふに

- 一、住民が明治二十九年の津浪の體驗によつて訓練せられ迅速に避難したること
 - 二、築港の防波堤と護岸工事により津浪の來襲を防ぎたること
 - 三、海岸に沿ふて鐵道が建設され、之れが期せずして防波堤に等しき役目をなしたること
 - 四、二及び三により津浪の襲來が一局部に止りたること
- 等が擧げられて居る、此災害に當り釜石消防組の活動は見逃すことは出来ぬ。

釜石消防組は十二部より成り、自動車唧筒五、手挽ガソリンポンプ三、蒸汽唧筒自動車一、腕用ポンプ三を有し、火災のあつた地點は第七部に屬し、輪番常備があつた、而して當夜の常備は地震と共に津浪の來るべきを豫想し、海面を注意し居るや、間もなく海水が引いたので警鐘を亂打して警報を發した、此警報によつて逸早く全町民は津浪を知つて避難したが、人的被害を比較的少からしめた最大原因である。

唐丹は明治二十九年の津浪には一番被害が尠なかつた、従つて今度も一般に油斷があつた、それか被害を最も大

らしめたことは注意に値する。同地は山が急であり道路等に相當勾配があつて、強ち山に避難しなくとも済んだのであるが、津浪が如何なる高さで襲來するか見當の付かぬため、村民は山へ山へと急いだ、然るに山に昇る道は細く険しく、殺倒したものは先か支へて昇ること出來ず、帯から帯と連がつて登り行く中、一人が不圖手を離した爲め、後に續くものは將棋倒しに全部下に墜落し、浪にさられたといふ。

唐桑村小結にては四五十戸の部落で約三十戸流失し、大部分の住民は避難し僅に八名の死者を出したに過ぎなかつた、之も明治二十九年の津浪の體験により、地震と同時に一大音響によつて津浪の襲來を豫知し、若干の人が裏山に避難し、暖を探る爲め二個所に焚火したるが、偶然にも其火が避難の目標となりたると同時に、大聲に避難民を指導したので、部落民の大部分は無事なるを得た。

宿にては四十戸位流失したに不拘、一人の死傷がなかつた。是十三人の漁夫が出漁の準備中地震があり、沖に暗中白く波頭を見、異音を聞いたので、十三人の人が手分けして各戸を叩きて急を告げ、避難を誘導したるが爲めで、此十三人の人々こそ救の神であるのである。

只越にては四十戸が流され、二十五名の死者を出し、家も、道も、田地も、樹木も皆浪に沿はれて一面砂漠に化した。此地の被害の大なりしは、太平洋に直面し、平坦地域廣く、裏山遠く、浪の來ることも早く、退くことも早く、一丈六七尺の高潮に此慘害を被つたのであるが、特に死者の多かりしは、避難を急ぐ部落民は、村の中央を走る三間道路を真直に行けば傾斜少く裏山に行かれるものを、何れも近道を選び、狭い急坂に殺倒したが、急に登ることが出來ず、マゴ付く中に浪に吞まれたのである、地震後津浪の來れるまで約五十分の間隔があつたのであるから、指導よろしきを得れば斯程までの損害はなくて済みしにはあらざるか。

之を要するに海岸地帯、特に津浪の危険多き地方にては、災害時の避難訓練が必要であり、油断は絶対禁物である

といふことに歸着する。

海洋學の權威東北帝大理學部助教林喬博士は災害地に出張し岩手縣水産試驗場の早峯池丸に乘じ、從來地震學の方面からのみ研究されてゐた『津浪』に對し新たに海洋學から手を下し『津波』の劃時代的研究をなし、三つの『津波型』を發見した。

一 本郷型 いはゆる廻し波のため甚大なる損害を蒙つたもので灣の水深大、灣口の正面に絶壁がある、その例は本郷、田老等

二、綾里型 灣の深さ大、灣口より灣奥まで幅が同じで兩岸絶壁その例は綾里、雄勝

三、氣仙沼型 灣口は深いが灣内は浅く絶壁で取圍まれたところ少し、その例氣仙沼、志津川

と假りに命名し、而して今度の津波を見るに三陸沿岸の灣は特に屹立した絶壁によつて取圍まれてゐたため、その絶壁に突き當つた波が漁師のいはゆる廻し波となつて、丁度ホースから出る水の如き勢ひをもつて突進する、その状は玉突きのような結果となり、廻し波の方向にある住家は一呑みに粉碎されてしまふのである。これらの被害はいづれも地盤と海水の深度によるものであるから、「廻し波」をよく研究し、住家設立禁止區域を作るのが必要であると結論された以て消防人の参考とすべきである。

釜石の出火の際の消防活動について興味深く思はれるのは、動力ポンプが何等効能なく、却て腕用唧筒が偉力を發揮し得たといふ事である。焼けた部落には前にも云つたやうに六部と七部が在り、殊に七部には常備もあり、唧筒は自動車も蒸汽もガソリンもあつたが、それ等は全く用をなさなかつた。と言ふのは、津波の襲來に一度避難した組員たちが、出火を見て消火すべく引返すと、器械類は海水をかぶり、直ちに使用困難である、のみならず街頭は一面に倒壊家屋や、流失家屋でふさがれ、機械唧筒を運搬することが出來ぬ。急を知つて第四部と第八部の唧筒自動車も出

場したが、同じく往來が通れずどうする事も出来なかつた。其時に腕用唧筒が三臺來たので、それを居合せた人々でかづき上げてやつと火點に近づき消火に使用し、之を以て漸く鎮火し得たといふ事である。

この際、偉力ある動力ポンプが何故役立たず、却て前時代の遺物視されてゐる腕用ポンプが偉大な効力を發揮し得たといふ事は、町民も實に意外とする所で、この一事を以て見るも腕用唧筒決して蔑視し得ぬ道理を肯定し得る次第であるが、此後の地震空襲等の場合に處する爲めには、腕用ポンプ、輕便ポンプ等運搬に便なるものを用意すべきを如實に吾人に教ふるものといふべきである。

函館の大火 昭和九年二月二十二日吾人は函館大火の飛報に驚愕し、更に其詳報を得て一層の刺戟を與へられた。それはたゞに警保局の發表に見るが如く、焼失戸數三三、六五九、死者八八五、死傷者二、三〇〇、罹災者推定九四六五〇といふ莫大なる損害によるのではない。函館が火災地として有名であつた時代であるならば、吾人は上記の損害を見ても左程まで刺戟されなかつたであらうが、消防施設は完備されて殆ど間然する所なく、加ふるに有名なる勝田組頭によつて指揮せらるる精銳なる函館消防組があつて、完全に火災地の汚名を拭ひ去り、函館に再び大火災あるべしとは夢想だになかつたからである。

函館市の地勢と火災の沿半の大略を述べれば、函館市は北海道の南端津輕海峡に突出せる位置にあり、太平洋と日本海との咽喉を扼する渡島半島の中央に位し市街は東北の一端龜田郡に接し、南西に函館山高く聳え、街衢其麓より傾斜し東部方面に進み、平坦となり、其中央部南北は海に面し、北方の内海は自然の良港にして、船舶常に幅輳し、人口二十餘萬、本州との連絡の要衝に當り市勢股脈を極めて居り

安永八年十月

焼失戸數

一〇五

文化三年十月

焼失戸數

三一六

明治二年五月

焼失戸數

八七一

明治四年九月

"

一、〇七一

" 六年

"

三一四

" 八年四月

"

四三四

" 九年四月

"

九五

" 十年一月

"

八〇

" 十一年十一月

"

九五四

" 十二年十二月

"

二、二四五

" 十八年五月

"

一一三

" 二十年五月

"

四八三

" 二十八年十一月(一日)"

"

二二三

" (廿六日)"

"

一二三

" 廿九年八月

"

二二八〇

" 三十一年九月

"

二、四九四

" 四十年八月

"

八、九七七

" 四十一年四月

"

六六

" 四十四年三月

"

一四〇

" 四十五年四月

"

三三

大正二年五月(四日)

"

一、五三二

大正二年五月二十五日

"

二七〇

" 三年四月

"

八四九

" 三年十二月

"

六七三

" 五年八月

"

一八〇

" 八年十二月

"

九一

といふ歴史を以て居る、而して今回の火災は

發火場所 函館町住吉町九一杉澤八十八

發火の原因 當時杉澤方の屋根強風のため吹き飛ばされしを以て、二階にありし切拔爐にありし残火の始末をなさず其儘戶外に飛び出したる折柄、烈風に煽られしものの如くなるも不詳

發火當時の様相 二十一日午後四時頃より南々東の強風吹き荒び、風速漸次加はり、午後六時頃には風速十六米突に達し、倒潰せる家屋多數にして、立木の倒れたるもの看板の吹飛ばされたるもの、無數、同市消防組は萬一を慮り非



常警戒中、午後六時頃辨天町、住吉町、海岸町、蓬萊町、大繩町、新川町の六個所より相前後して出火、消防組は直ちに出勤して之れを消し止めたるが、間もなく全市に亘り停電あり、時に前記場所より發火し、驚くべき急速度を以て火は燃え擴り、遂に消防組の必死の努力も空しく、大慘事となつた

被害の状況 警保局の發表によれば

死者 八百八十五名、主なる發見場所新川二四四、湯川根崎海岸漂著二、三七六、大森濱三三、砂山方面一四〇

傷者約 二千三百名(内重傷者五百名)

罹災者 推定九萬四千六百五十

行衛不明 自東川至大森町海岸にて浪に浚はれたりと認めらるるもの二百五十名、其他相當多數の見込

焼失戸數

全焼 二萬三千六百三十九

半焼 二十

計 二萬三千六百五十九戸

焼失區域 東西約四杆南北一杆に亘り 市内人口稠密の個所は殆ど全部焼失其面積約百五十万坪

燒失せる主なる建物

小學校九、裁縫學校五

官公署十三

帝室林野局出張所、刑務支所、地方裁判所、稅務所、市役所、商工會議所、警察署、消防本消防部、第二部、消防第三部、專賣局支局、無線電信所

病院及醫院

四二

神社佛閣

一八

銀行會社

一五

劇場活動寫眞館等

九

其他工場倉庫等

二五

大火となりたる原因

一、風速三十米餘の烈風なりしこと

二、發火地點は水道の終點なるため水壓弱く水量乏しかりしこと

三、烈風に煽れ水勢亂れ局所注水不可能なりしこと

四、防禦中の消防手時々吹き倒され操作困難なりしこと

五、地形の關係上延焼中頻りに旋風突風起りしこと

六、發火地點附近には倭小本造家屋多く連擔せる外市内全般に亘り可燃質建物の多かりし事道路概して狹隘にして防火地區少く廣場公園等都市計畫上の施設未だ完成し居らざりしこと

消防組の活動 出火の報に出勤したるは

出勤組數 七

人員 二百八十四名(常備一四八、豫備一三六)

自動車唧筒 八

水管自動車 六

であつて、風速二十米といへば一間四方に四十二貫、同二十五米といへば六十八貫の力に當る、此烈風中の消防組の活動、如何に困難であつたか想像するに餘りありといふべく「六ヶ所の火災を鎮火に至らしめたと思ふ間もなく、又出火の報知に直ちに出勤したが、風力強くして消防車は速力出でず、狭い道路を縫ひ、看板やトタン屋根の吹き飛ばし中を、危険を冒して火點に至り放水を開始すれば、平常七八十尺も飛ぶ大型ポンプの筒先の水も、二三尺の所にしか届かず」といふ状態の所に、烈風に家根は飛ばされ、又剝かれて飛火を盛にし、七時八時の間には七ヶ所、八時九時の間には十一ヶ所、九時十時の間には十五ヶ所から燃へ上つた、茲に於て自ら陣頭に立ちて部下を督勵しつつあつた勝田組頭は、最後の決心を定め各部長に最後防禦陣地を指令して死守せしめた、各組員は必死の活動を續くる中、幾度か猛火に包圍せられ、濃煙に咽び、防禦陣地を變更するを餘儀なくされ、遂にホース三百餘本を焼き、二尺もある大木の折れ又は根こぎにされたものや、倒潰家屋に前進路を阻まれ、塀に打ち付けられ、溝に吹き落とされ、全く混亂に陥り、悪闘苦戦の限りを盡し、連絡は断れてしまつた、ここを先途と活動する勝田組頭は、頭巾は焦げポンプのシートからは火を吐く中に「ずぶぬれになつた刺子の下のシャツまで水が通り、空腹と寒氣に手も凍えた」といふて居る。ああ悲壯の限りである。

警察の活動 此日函館警察署には、強風のため万一を慮り、署員を督勵し特に警戒中警戒に接し、直ちに全署員を召集し火災現場に於て消防と一般警戒に従事せしめた、其數函館署と水上署とを合し二百十八名、又警察部にては警報により午前六時二十二分函館着列車にて保安課長以下七十二名の第一回應援隊を急派し、更に第二回百二名、第三回百四名を派遣した、而して警察官は火災當時は罹災民の誘導、其他に努むる中、午後七時三十分頃警察署は切斷され、間もなく公衆電話も不通となり、午後八時三十分頃警察署は焼失、且つ市内は停電のため暗黒、電報は運轉不能となりて活動感の如くならず、鎮火後は警備本部を水上署内に設け、函館署員百七十六名、水上署員四十二名、

計二百十八名を以て大隊編成とし、一般警戒及び避難民の救護、物品配給並に被害程度の調査に當らしめ、更に特別隊を編成して屍體檢視、情報蒐集、暴利取締、商品の賣り惜み取締、等に當らしめ、應援隊を以て一般夜間の警戒に従事せしめ、警察力を以て安全に治安を維持した、而して本災害中警官にして殉職したるもの巡査一名、消防手にして殉難したるもの一名、行衛不明一名、重傷者十八、輕傷者百餘名を出した。

軍隊の應援 弘前衛戍病院、青森衛戍病院より軍醫以下四十九名、第五聯隊及び第三十一聯隊より特務曹長以下四十八名、第七師團より兵百五十名、函館重砲大隊より軍曹以下二十一名出動。

罹災者救護 火災當時罹災者を小學校、寺院等三十二ヶ所に收容、應急救護をなしたるもの二万六千八百餘名に及びたるが、後ち親戚知己を頼り避難し、二十三日正午現在の罹災者收容状態は收容個所二十八個所、人員七四、二八名となつた。

通信機關其他 火災當時市内外の通信機關は全く杜絶し、二十三日午後四時頃に至りて漸く内地との電信復舊し交通機關は市内電報は當分運行の見込立たず、唯僅かの自動車あるのみ、電燈は二十三日夜焼残り區域の一部に點燈され、二十四日大部分復舊、水道は平常通り

應急對策と復興計畫 北海道廳函館出張所を設け、一、總務部(内務部)、二、物資部(學務部)、三、用材部(産業部)、四、警務部(警察部)、五、義捐部(庶務課)、六、復興部(土木部)を以て之を組織し、罹災者の屍體はバラツクを建設して之を集め、各個所別に之を收容し、四日間心當りの者の申出を待ち、其間僧侶をして讀經其他の佛事を營ましめ、死屍中引取人なきものは一定の場所に於て火葬に付すること、罹災者の收容設備は千坪のバラツク三ヶ所を設くること、罹災者の救護に要する費用は罹災救助基金より支出し其次は義捐金を以てすること、罹災者の衣服は道内より募集し、軍隊よりも毛布を借用し、内地より到來せる義捐品を以て之に充つること、罹災者の救護は各地よ

りの救療班二十班を以て之れに充つること、各地よりの救療班二十班の退散後に於ける罹災者の救療は國費を以て之を繼續すること、情報部に於て各地より提出せる資料と統一すること、焼跡を整理するに當り不用なる物品は之を適當なる箇所に投棄せしむることとし、場所を選定すること、義捐金品の募集は道廳、函館市役所北海道協會等共同して北海道函館火災救療班の名の下に之を行ふこと、復興計畫は道廳及び函館市の大火に伴ふ歳入缺陷補填の方法を講ずること、至急都市計畫案を確定すること、等につき着々として其歩を進め、都市計畫案の内容は(1)跡焼地區の區劃整理を行ふこと、(2)必要なる地には廣場及び植樹地帯を設けること、(3)防火建築を奨励すること(4)橋梁を永久的構造とすること等であつた。

此都市計畫案は大火の教訓より來つたものであるが、消防施設に就ては如何、勝田組頭は語る「人口一万に對しポンプ一臺を以て普通都市の標準とされて居るが、氣象の悪い函館にては大正十年十二月十八日も西の三十九米二といふ風が吹いて居る、故に之れに對應する爲めには、此際普通都市の二倍の備へ、即ち精銳なる唧筒二十五臺を必要とし、又防火用高壓水道も必要であらう、防火方策としては、長屋建のフツ通し屋根は危険なるにより之を取締ること、トタン葺家根の釘の止め方、屋根取り付けはポート又はカスガイ止とし、屋根の飛ばぬ方法を講ずること、火の入易き軒先の研究、防火建築の空気窓及び戸前の研究、等が必要であり、大工場、學校、其の他の大建築に非常報知機を設備し、貯水池も學校の前等には噴水を装置し風致兼用のものを造り度い」と。

人口十萬以上の都市に特設消防署設置の議 函館大火の與へた教訓は、函館都市計畫と勝田組頭の抱負となつて現はれ、又之を述ぶるまでもなく、前項を讀まれた諸子は之れを知り得られたであらう、吾人は此尊き體驗は直ちに以て將來我國消防界の改善に資し、此大火の犠牲を徒にすべきでないと思ふ、而して更に火元の近くに二十戸程の空家があつて飛火を防ぐ力を減少したること、湯屋の煙突倒潰し出火を見た事、等を思ひ合すれば、火氣取扱場所の巡檢

一般消防智識の向上、等の愈必要なるを痛感せずには居られないのである。

函館大火の直後一部識者の間に、十萬以上の人口を有する都市、及び奈良の如き歴史的特別保護を要する都市に特設消防署を設置すべしとの議が起つた、其論據を考ふるに、(1)函館はは斯程の施設と勝田組頭のあの熱心さを以てして尙ほ且つ此大火があつた、そこに警防に何らかの缺陷はなかつたか、氣象の觀測により風位の變化を豫知し、避難を指導し得たりしならば、人的損害を今少し僅少ならしめ得たるには非ざるか、然れども義勇消防組に此以上を望むことは不可能である、何となれば組頭始め組員は多忙なる身であるが故である、宜しく専任官を置きて消防に専念せしむべし、(2)六大都市に消防署を設置したる當時の状態以上に發達したる都市は全國に尠くない、此等の都市には當然消防署を設置すべきである、(3)奈良其他國寶建築の多き地は、當然國家が其防護に任すべきである、等であるものの如くである。

消防組が相互扶助、共存共榮の念に發足し、國民福祉の増進の爲めに、而して郷土の安寧社會保安維持の爲めに、犠牲的精神と任侠的意氣とによりて立ちたる團體であつて、消防組規則に於ても此根源に基いて、義勇消防を以て我國消防の本體とはなしたのであることは、言ふまでもないのであるが、消防組規則に於て、所謂消防組は警察事務の一部を擔當するものであつて、國家構成の重要機關たることも明瞭である、即ち各市町村消防組は各市町村の實情に即する施設の下に、其重大なる使命を全ふせんと努力して居るのである。然れども著しく發達したる都市に於ては、多忙なる職業を有する組頭の下に、激務にある消防組員によつて組織せらるる消防組のみを以てしては、完全に其都市を防護し得ざる事情の存するものである。之れ東京市に於ては古くより警視廳に消防部を置き、市内に六消防署を設けて消防組の足らざる所を補はんとし、後大阪市に特設消防署を設け、京都、横濱、神戸、及び名古屋の四市に之を及ぼしたのである。此意味に於て函館の大火に鑑み、人口十萬以上を擁する都市並に奈良の如き歴史上に特別の防

護を必要とする都市に、六大都市に倣つて消防署を置き、消防官吏によつて其都市の水火災害警防を指揮せしめんとすはる、決して謂なきにあらず、警保局に於ても豫算が許すに於ては、之を決行するに吝てないと言へはれて居るから、遠からざる將來に於て或は此れは實現されることであらう。ここに注意すべきは、消防は何處までも其市町村の實狀に即したものでなければならぬ、而して其指揮者であり監督者であるものは、其都市の消防に關し充分なる智識と防止上の技能とが必要であつて、其等消防署に長たるものは、此條件に缺くる所があつてはならぬ、而して又見方によりては、各都市にある常備部が、消防官吏によつて支配されるものが消防署で、換言すれば消防署は常備部の規模を大にし、之れに其都市に於ける警察署の消防に關する監督權を附與したものであるが故に、消防署が設置せられても消防組は之れを廢止すべきものでない事は云ふまでもない、故に吾人をしていはしむれば、人口十万以上の都市に消防署の設置せらるることは希望するが、其れに長たる署長の人選には充分の注意を必要とし、警察官の姥捨山たらしむるが如きは、絶體に之れを排撃すべきであり、出來得べくんば其土地出身の消防人を以て之れに充つべきであると信するるのである。

總裁官殿下の奉戴 昭和時代の初めに於て全國消防人は小異を捨てて大同に就き、一致協力して消防界の劃一的發達を圖らんとし、官民一丸となつて大日本消防協會を設立した、而して其創立の當時より總裁官殿下奉戴の儀は、一同の熱烈なる仰望であつた。求めよ然らば與へられんと。全國消防人の久しく仰望して歎まなかつた大日本消防協會總裁官奉戴の儀も、遂に 梨本宮殿下の御内諾となり、昭和九年四月十三日を以て勅許が下つた、茲に於て宮家の御都台奉伺の上、五月三日を卜し、東京日比谷に於て奉戴式は舉行された。

此日數日來の悪天候に引換へて朝來一抹の雲影なく、初夏の陽光は日比谷公園の新緑に映じ、皇太子殿下御降誕祝のため、東京市が公園廣場の舊音樂堂に掲揚した數珠の鯉職は、大空に翻翻として共に潑瀾たる新鮮味を覺へしめ、

我國消防界の燦然たる前途を思はしめた。今日を暗れのこの盛典に參列のため、樺太の四日榮藏外七名、臺灣の砂田隣太郎外一名を始め、全國各府縣の消防組代表者來り集るもの千三百七十名、保安課長及消防主任と共に會場を集る之を三個大隊に編成し第一大隊は早川警視廳消防部長、第二大隊は相川神奈川縣警察部長、第三大隊は玉田千葉縣警察部長之れを指揮し、松本警保局長(代指揮小山警察講習所助教)總指揮に任じ、横隊となりて御座所前の廣場に整列し支部長たる各知事はシルクハット、フロックコートに禮裝にて、最前列に位し殿下の御臨場を待ち奉る。

午後一時一發の煙火を合圖に開式せられ、軍樂隊の嘯唳たる「君が代」奏樂は起り、參列員一同敬禮の中に國旗は掲揚せられ、次で宮城遙拜の式を終る。

時に 梨本宮守正王殿下には、陸軍通常禮裝の元帥服に大勳位章御佩用、自動車に召され肅々として御入場、山本會長、松井副會長以下協會役員御出迎「君が代」奏樂裡に御座所に入御、一同の最敬禮を受けさせらる。山本會長は鞠躬如として御前に候し、參列者總員數、其他を言上し終れば、總裁官殿下は御座所を降り立たせ給ひ、松本常務理事(警保局長)の御先導にて、山本會長、松井副會長、宮野幹事、明石内務大臣秘書官等を従へさせられ、御徒歩にて第一列より順次參列員を御檢閲遊ばされ、再び御座所に入御、總員の最敬禮を受けさせられ「君が代」奏樂裡に自動車に乗御、御退場、公會堂内の御休憩室に入らせらる。

斯くして又もや起る「君が代」に國旗に降下され、御檢閲式は終り、參列員は公會堂内の奉戴式場に入る。式場正面壇上中央には、國旗を垂れ、六枚折金屏風を飾り、其前に御座所を設へ、其右に齋藤首相以下の各國務大臣、其左に山本會長以下協會役員着席、堂内階上階下は參列員及び來賓を以て満たされた。

定刻二時、宮野幹事式次を読み上げ、松本理事の開會の辭によつて開式せられ、軍樂に伴れて總員起立君が代を二回唱和し、山本會長の挨拶終るとき、總裁官殿下には松井副會長の御先導にて式場に入御あり、御着席遊ばされ、直

ちに全員起立の中に朗々たる御聲にて 令旨を賜はつた、此利那会場には嚴肅の氣漲り、参列員はたゞ感激に涙下るを止め得なかつた。

此時山本會長は御前に進みて 令旨を拜授したる上

茲ニ財團法人大日本消防協會、總裁官殿下奉戴ノ式典ヲ舉クルニ方リ

殿下ノ臺臨ヲ忝フシ親シク御檢閲ヲ賜リ優渥ナル 令旨ヲ拜ス定ニ恐懼感激措ク能ハサル所ナリ。

願ルニ大日本消防協會創設以來年ヲ閱スルコト八歳多年仰望セル今日ノ盛事ニ遇ヒ歡喜ニ堪ヘス、此ノ無上ノ洪恩ト光榮トヲ荷ヒ責務ノ彌々重キヲ覺エスンハアラス。

今ヤ内外事滋ク舉國振張以テ奉公ノ至誠ヲ竭スヘキノ秋我等消防ヲ任トスル者上下一體相率キテ、令旨ヲ服膺奉體シ協心戮力消防報國ノ實ヲ舉ケ以テ令旨ニ副ヒ奉ランコトヲ期ス

茲ニ全國二百萬會員ヲ代表シ謹テ奉答ス

昭和九年五月三日

財團法人大日本消防協會長

從二位勳一男等爵 山 本 達 雄

と奉答申上げ、次て齋藤首相以下各大臣の祝辭があり、一同起立齋藤首相の發聲にて兩陛下の方歳を、山本會長の發聲にて總裁官殿下の方歳を三唱し、一同最敬禮、軍樂の君が代表奏樂裡に總裁官殿下は山本會長御先導にて御退場御歸還遊ばされた。

次で軍樂隊の大日本消防歌の演奏と合唱あり、松井副會長の閉會の辭によつて午後三時頃我國消防界空前の盛儀たる總裁官殿下奉戴式は、一同の感激裡に滞りなく終了したのである。

あゝ願みれば我國消防は世界最古の歴史を有すと雖、徳川時代においてはその施設一般的でなく、其器具の如きも極

めて幼稚であり、統制行はれず、眞の消防組の發達は、明治二十七年の勅令による消防組規則の制定發布以後に屬し當局の指導監督其宜しきを得たりたるにもよるが、組員の隱忍自重と其自覺修練とによつて今日の盛大を致し、曩きに長くも 天皇陛下の御親閱の榮を蒙り、今又 官殿下を大日本消防協會の總裁に戴き奉る、何を以てよくこの悅を表現し得るであらう、只洪恩に感泣して愈奉公の實を擧げんことを期するのみである。山本會長は奉戴式後謹話の形式にて下の如く發表した。

本日は我國消防界に取りまして誠に目出度き日でありまして、全國二百萬の消防組員が多年仰望して居りました財團法人大日本消防協會總裁官殿下奉戴式が舉行せられ、畏くも

總裁梨本宮守正王殿下には親しく臺臨あらせられて、千五百三十六人の國全消防組代表を御檢閲賜り有難き令旨を拜戴致しました。不肖本協會の會長として誠に感激の至りに堪へぬ所であります。度んで按じまするに 令旨高遠事に消防に従ふ者の脊々服膺して奉仕すべき信條を示させられ、その進むべき途を明かにせられましたことは誠に畏き極みであります。

申すまでもなく消防は水火災の禦防を任とする社會上重要な機關でありまして、之れが盛衰は國運の消長にも關係する所非常に大なるものがあります、我等協會當事者は勿論全國二百萬の消防組員は此の記念すべき光榮の日を劃期として感奮興起更に一層の努力を以て 令旨に副ひ奉らんことを期して居る次第で御座います。

消防組の現状 以上述べたる如く、昭和時代は公設消防組の青年時代であつて、大日本消防協會の成立に次いで、天皇陛下御親閱を仰ぎ、愈全國消防人は感奮興起し、全國統一的の統制は次第に實現され、私設消防又は無消防町村は漸次其數を減じ、今や大成に近づきつつあり、從來各府縣に於ける消防事務は東京府と大阪府とを除いては保安課に於て取り扱はれ來りたるが、昭和九年七月十八日兵庫縣に消防課を設けたるに刺戟され、各縣共に消防課設置が計

高知	101	六、三八〇	九	一	四七	一六〇	四七、五八二
福岡	三三	八九、四六三	三	二	一六三	一、三三三	四七、二六四
大分	二八	五、一六三	一	一	八六	一、二二二	六〇、九一八
佐賀	二五	四、九八四	二	一	五一	五七六	四九、九一八
熊本	一四	四、八九七	三	一	四四	九五六	八三、二一九
宮崎	九	五〇、〇一一	一	一	一〇四	六八〇	六、九八八
鹿児島	二	七、七三三	二	一	三三	一三三	一四三、七三三
沖縄	三	一、五九九	二	一	八	六	一一、三三三
計	11,111	210,000	1,111	27	7,882	12,000	8,970,000

第二節 消防機械器具

第一項 總 說

人智未だ開けざる時代にありては、消防器具のありたる筈なく、徳川時代にありても極めて幼稚であつて、手桶、長柄杓を以て水を運び、大なる團扇を以て火の子を打ち拂ふといふが如きはまだよき方にて、竹や青葉の着いた木の枝に水に浸し、之れにて火を打ち消すか如きは、隨所に之を見たのである。其後火災用として考案せられたるは水籠であつて、大團扇と共に廣く使用せられた。此時消防器具として大なる役割をなしたものは梯子であつて、竹梯子が生れ、其使用方法はかなりの廣範圍に亘つて考案され、注水にも、破壊にも、使用された。消防器具の幼稚なりし時代は、自然破壊消防が行はれ、平常家庭用又は農事に用ひられた鎌、鋸、木槌、鋏等は

破壊用具として利用され、刺叉、掛矢等は消防の重要器具となり、殊に苅口は消防を代表する程で、火消を苅の者といひ、苅を以て消防の表象とした、以て如何に破壊消防が重きに置かれたかを知り得るのである。

其後雲龍水の出現は消防方法に一大變化を來したが、それとて今日の腕用ポンプの比ではなく、我國消防器具の發達は、明治以後のことに屬すといはねばならぬ。

明治維新なりて西洋の文物一時に我國に流入し、先づ腕用唧筒の改良せられたるもの、川路大警視によつて輸入せられ、次で蒸汽唧筒は各縣下に採用せられ、活動の範圍を擴張し、下つて明治四十二年にはガソリンポンプ紹介され越えて大正三年には自動車唧筒、火災報知機が採用され、科學の進歩と我國製造工業の發展とは、消防機械器具に日進月歩の改善を促し、其止まる所を知らざるの感がある。

消防機械器具は恰も軍隊の兵器に等しく、今日の進歩せる軍隊にても、古來よりの刀劍が用ひらるる如く、苅口は現代消防にても重要器具であるが、軍隊にて各種兵器が用ひられ、空に飛行機飛び、地に戦車走り、之れに對する高射砲、迫撃砲發明せられ、毒瓦斯、煙幕が出現し、昨日の精銳今日の舊式なると同様、消防機械器具も建築様式の變化、火災の種類増加、等に連れて發達し、改善され、且つ其種類を増し、之れに應じて消防組織、消防戰術、消防技術も變革が行はるるを必要としたのである。

第二項 水 運 器

初期の消防器具 消防施設の極めて幼稚なりし時代にありては、別に消防器具とはなく、青葉の付きたる木の枝や笹竹を手近にある水にて濡し、之れにて火を打ち消し、水無きときは水を以て濡すことさえしなかつた。其の外には家庭に有り合せの手桶や、を盥以て水を運びて注水し、農事用の鎌を以て草家根を切りて飛火を防ぎ、又は箒其他

に水を注ぎたるものにて家根に飛び来る火の粉を掃き下し、鋤鍬を以て破壊作業をなして延焼を防いだ。大きな團扇が消防器具の中に敷れ、之れを以て飛び来る火の子を煽ぎ飛ばしたるに至つては、實に滑稽の話である。地方によりては此の大團扇は、明治時代の初期尙ほ用ひられたる事實がある。

天水桶 徳川時代江戸の各戸の入り口に四斗樽大の桶を置き、之れに水を満して非常用水とし、之れを呼んで天水桶といふた。天水桶の上には小なる手桶を「スギナリ」に積み、天水桶の水を汲み出して持ち連ぶに便した。此手桶をも亦天水桶と稱へた様である。此風は次第に地方に及ぼし、地方によりては屋根上に天水桶を設け、これに藁にて作れる箒様のものを添へたるもあつた。天水桶を屋根に上げたは、江戸の芝居小屋森田座を嚆矢とするともいはれて居るが、判然としない、徳川時代の中葉に至つては、神社佛閣の天水桶は金属製のものを用ひ、雨樋の水を之れに導きて貯水したるは、今尙ほ各地に残つて居る。

長柄杓 大型の柄杓で、特に柄を長く造りたるもので、河水、池水等を汲み取るに都合よく、地方によりては各戸の門口に之を用意せしめ、非常に備へた。

玄蕃桶 龍吐水や雲龍水が用ひらるる時代に用ひれたる大形の桶で、繩を以て釣手とし、之れに棒を通し二人の人の肩にて擔ひて水を運んだ、徳川時代より引き續き、明治の時代に入りても盛に用ひられたが、吸管肘腕用ポンプが採用せらるるに至つて、其の影は次第に消えた。

水 籠 籠に紙を張りて之れに澁を塗り、繩にて釣り手を附したるもので、目方軽きため取り扱ひ便利であり、唧筒の未だ發達せざりし時代、屋根其他高所に水を運びて注水するに極めて都合よく、屋根上等より投げ下しても破損せず、又其の爲めに人を傷付くることなく、大いに調法がられ、又之を保存するにも、數個を重ね合すれば場所を取らず、極めて簡便な水運器であつた。地方によりては明治の末葉に至るも、尙ほ之を用ひた町村がある。

水運車 大八車に木槽を備えたもので、蓋ありて運搬中に水の動搖して溢るるを防ぎ、水槽の底部に栓あり、之より唧筒中に水を移す様に考案されたものもある。

バケツ 水籠は取扱至便なるも元々紙にて作られ破損し易く、手桶、玄蕃桶等は木製なるため重量あり、取扱不便にして且つ破損し易きを以て、金属製にして堅牢にして軽量なるバケツ出現するや、バケツは水籠、玄蕃桶に代つて水運の役を勤めた。

水袋 バケツは水籠や手桶に比すれば多くの利點はあつたが、帆布の輸入ありてよりは、之れを以て作りたる桶の如き型の袋が、次第にバケツに代り、近代にては都市消防組は、主として水袋を採用して居る。水袋は其使用に便利なること水籠の如く、然も水籠の幾万倍丈夫であり、疊み込まるるを以て保存にも場所を取らず、用途又種々あり。

水槽自動車 水運車が大八車に水槽を備へたるに類し、自動車に金属製タンクを装置したるものにして、水道斷水等の場合、又は水利悪しく遠方より水を運ぶ必要ある地に於て用ひられ、滿洲ハルビン消防隊にては之れを數臺使用しつゝありといふ、警視廳にては最近大正震災の如き場合に處するため、水槽自動車購入の計畫あがるといふ。

水運器の發達の順序と、其の種類は前記の如くであつて、唧筒が汲込式なりし時代には、水運のため多數の人と水運器とを要したが、吸管式となりて大いに其の手續を減じ、水道の發達、貯水池の設置は、一層水運器及び水運びの手續を除いた、然るに大正震災に刺戟され、且つ空襲其他水道及び貯水池の破壊等に備ふるため、大仕掛の水運機の設置を計畫せらるる傾向を生じ來つたことは、注目に價する。

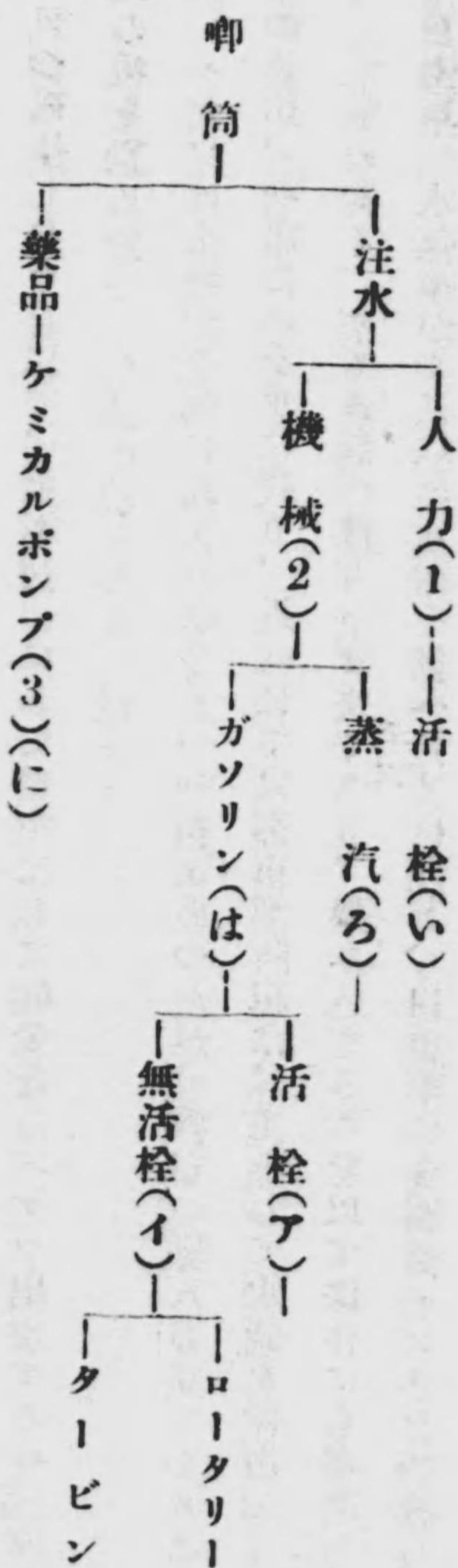
水道及び貯水池のなき地方に於ても、唧筒の設置普及に従ひ、二臺又は數臺の唧筒相連絡し、送水と放水とを分擔することにより、遠方の水源より火點近く送水することを得、次第に水運器を不用ならしめては居るが、水運車、水袋等の相當數を用意することの缺くべからざるは言ふまでもない。

第三項 唧 筒

第一款 唧筒の種類上の發達

總説 消防の唧筒は軍隊の火器であつて、先込め銃か元込め銃となり、火繩銃か火薬銃となり、更に單發銃が連發銃となり、機關銃となり、大筒か大砲と名を改め、野戰砲、要塞砲を生じ、機械力、電氣力が應用せられ來りたると同様、手押唧筒は圓筒一個が二個となり、汲込式は吸水管式となり、蒸汽唧筒、ガソリンポンプ、自動車唧筒等機械力が應用され、有辨唧筒は「バルブレス」(無活辨)唧筒となり、更に科學の進歩はケミカルポンプを生み、其發達實に目まぐるしきものがある。

其の發達の順序を表示すれば、



括弧内の123及び、い、ろ、は、に、は發達の順序を示す

右表に示すものの外、電力ポンプがある、而して此唧筒は使用法最も簡單で、故障最も少なく、此點に於て理想的

なるも、動力を得るに特殊の設備を要し、所定場所及び電導線の長さの範圍の外、使用困難であり、蓄電池を使用する場合に於ては、電池の重量大にして運搬に不便あり、且つ一定時使用し電力の缺乏したる際、之れが補充困難なるを以て消防用として一般の使用に適せず、故に我國にては特定のもの以外、消防用として使用せられて居ない、故にここには省略した。

ポンプは使用の箇所により陸上と海上とに區別し得らるるも、重複の煩を避け之れをも省略し、後項に消防船のみを記すこととする。

龍吐水 唧筒の原理は小兒の玩具たる水鉄砲であつて、歐米にて何時の頃より消防に使用されたるかは明かでない我國にては今を去ること約百八十年前の寶曆三年、和蘭人によりて長崎に輸入せられた龍吐水を以て嚙矢とす、(一説には同年和蘭人の指導により、長崎にて製造せられたとも傳へられて居る)。此龍吐水は木製であつて、一つの圓筒と一つの唧子から成り、圓筒の側面に木製の噴水管が取り付けられ、唧子に固定された柄は圓筒の上部に眞直に延び、其末端の柄に直角に握り柄が挿し込まれ、圓筒の底部に吸水口があり、茲に辨が装置されて居る、而して龍吐水を使用するには、水を充たした桶又は壺に圓筒部分を浸し、握り柄を取りて唧子を上下せしむるのである。今日に於て之を見れば玩具に等しき幼稚のものであるが、當時に於ては唯一の利器であつたのである。其の利點は携行の便であり、爲めに山間僻地に於ては最近に至るまで、消防用に使用された。

雲龍水 龍吐水の改良せられたものに、一つの水槽と二つの圓筒及び唧子から成る木製唧筒である。茲に所謂雲龍水をも龍吐水と稱したる地方も多く、又此「龍吐水」に空氣室を設けたるものを雲龍水と稱したと記載した書籍もあるが、吾人の見解を以てすれば、此説は誤りであつて、雲龍水には空氣室なかりしものと解すべきである、と思考するのである。要するに水槽の中央部に支點を有する搖桿が長く左右に延び、其搖桿に唧子が連絡され、搖桿の兩端を

數人が把握して交互に上下し、左右の圓筒内の唧子を上下運動せしめ、水槽の側面にある噴水管より、水を噴出せしめたのであるから、之を龍吐水に比すれば、遙かに威力大なりしは勿論であつて、其當時の權威であつたに相違ない。雲龍水は波込み式であるので、之れに給水するには多數の人数を要した。

古書の傳ふる所によれば、明和元年十二月江戸火消の中、御曲輪近邊十三組に龍吐水を配給し之を使用せしめたところがあるが、其形状は明かでない、然し繪圖面等によれば茲にいふ雲龍水なりしもの如くである。龍吐水が最初輸入せられて明和元年までに約十年を経て居る。故に此間に於て龍吐水が消防に使用せられたることは想像せらるるが、文献のよるべきものなく、又火消制度發達の順序から見ても、消防組として我國にて初めて唧筒を使用したるは明和元年を以て紀元とするのではあるまいか。

腕用唧筒 今日使用せらるる腕用唧筒は西曆千七百二十一年、英人リチャード、ニュージヤムが五年間の苦心の結果、漸くにしてなしたる發明品であつて、當時放水缸一分間百十ガロンの記録を有し、其實地試験の際、英國皇帝の天覽に供し、御買上の榮を賜はつた、其後幾多の改良が加へられて今日に至つて居るが、ニュージヤムが創造した唧筒の形状は不明である。恐らく雲龍水の進化したもので、空氣室を有するものであらう。

馬鞍唧筒 徳川時代の木製唧筒は初め人肩によつて運搬せられ、次第に其効力を増すため、水槽は大となり、從つて其重量を増大し、大八車によつて運搬し、或は唧筒に車を装置した。明治初年英國より輸入せられた唧筒も、波込み式で吸水管を有せず爲めに水槽極めて大きく馬を以て之を輓かしめたるが如くである。明治三年の記録に「消防局に小ポンプ組、大ポンプ組を置き、大ポンプは馬をして之れを輓かしむ」とあるは、其邊の消息を物語つて充分である。馬鞍唧筒の構造に就ては詳細なる文献なく、其構造につき茲に詳記し得ざるは遺憾である。吸水管を有せざる之等ポンプに附隨して、水運が使用された。

甲號唧筒と乙號唧筒 明治五年川路大警視、警察制度研究のため外遊し、歸朝後洋式消防を取り入れ、我國消防制度の改革を行つたが、其の外遊土産として、明治八年佛國式消防唧筒が輸入された。警視廳にては之れを「甲號唧筒」と稱へた。此唧筒は吸管附の金屬製で、從來我國にて用ひられたる唧筒に比し、遙かに進歩したものであつた。越えて明治十六年、獨逸製腕用唧筒が輸入された、之れ警視廳の所謂乙號唧筒であつて、甲號唧筒に比し小型であり、使用輕便なるため、廣く採用せられ、今日の腕用唧筒の祖となつて居る。尤も其後我國工業界の發達に伴ひ、唧筒も優秀なるものが製作せられ、普通獨逸式と稱せらるるのも、甲號と乙號折衷の改良せられたるものである。

蒸汽唧筒 甲號及乙號腕用唧筒の輸入に先立ち、萬延元年英人バグバーによつて英國製「シャンゾーメーション」式蒸汽唧筒一臺が輸入せられ、横濱消防(薩摩町)が之れを使用した。之れ我國に於ける蒸汽唧筒使用の嚆矢である。其後明治三年東京消防局に於て蒸汽唧筒一臺を輸入したが、道路悪くして使用を出來ず、翌四年其の使用を廢した。此蒸汽唧筒は後警視廳に引き繼がれ、明治十八年新たに蒸汽唧筒二臺が購入され、三臺の蒸汽唧筒が東京市内に活動することとなり、大阪、神戸、其他の大都市に於ても、順次蒸汽唧筒が採用せられた。

消防用蒸汽唧筒の發明は、西曆千八百四十一年で、蒸汽罐、蒸汽機關及び唧筒から成り、蒸汽罐は場所を取らず、又其重量を最も軽くする關係上、多く水管式堅罐が採用せられ、火急の場合迅速に蒸汽を發生せしむるため、火室の周圍も水を以て取り囲み、傳熱面積を廣くし、水の循環並に通風に注意し、點火後數分にして所要の汽壓を上げ得る様に設計せられ、機關も亦高速運動をなすに適する様式で、其の主軸は唧筒の軸に結合され、唧筒は單働式のものもあつたが、主として複働式が採用せられて居る。蒸汽唧筒は蒸汽力を應用したる機械唧筒であり、且つ其設計も前記の如くであるから、其揚水量、水壓共に到底腕用唧筒の遠く及ぶ所でない。去り乍ら最も輕量に設計されて居るとはいへ、唧筒全體の重量の外に、所要の水及び燃料を積載するが爲め、相當の重量之れに加はり、小型のものにても

運搬に多數の人手を要し、少しく大型のものは、迅速を尙ふ消防車としての本來の目的を達する爲め、而して不時の出勤に備ふるため、常に數頭の鞍馬を飼育するの必要があり、且つ現場に向つて疾走中に、機關を活動せしめ得るだけの準備を完成するの不便があつた。故に經費其他の關係上、馬鞍蒸汽唧筒は大都市の外あまり用ひられず、手輓小型のものは各縣下に相當採用せられたといへ、腕用唧筒に比ぶれば小數に過ぎなかつた。今日にては蒸汽唧筒も漸次改良せられ、其唧筒にはロータリー式及びタービン式も採用せられ、フランジャー式のものも其圓筒數が増加され、出動を迅速ならしむるため、自動車に之を裝備せるものも出來たが、次第にガソリン、ポンプに壓倒せらるる傾向を有し、燃料供給に便利なる地方、其他特殊事情ある地方の外は、近き將來に於て蒸汽唧筒は其影を見ざるに至るであらう。

瓦斯倫唧筒 ガソリン、ポンプは之れを廣義に解すれば、瓦斯倫機關によつて運轉せらるる唧筒と解すべきで、手輓瓦斯倫唧筒は元より、自動車唧筒、オートバイ唧筒も之れに含まるるを當然とするのである。然し一般には單に瓦斯倫唧筒といへば、手輓又は馬輓瓦斯倫唧筒と解されて居る、此意味に於て本書にても瓦斯倫唧筒を極めて狹義に解することとした。

西曆千八百八十五年、獨逸人ダイムラーがガソリン機關を發明して以來、其發達著しく、其の應用は極めて廣範圍に亘り、現在の自動車、オートバイ、飛行機等の殆ど全部は、ガソリン機關を以て動力として居るのである。其特長は、(1) 何時にても必要に應じ直ちに始動し得らるること、(2) 高速廻轉をなすこと、(3) 機關小にして場所を取らぬこと、(4) 多量の燃料、水を携行する必要なきこと、(5) 取扱容易にして運轉に多數を要せざること、(6) 運搬可能なること、等であつて、蒸汽機關の如く多量の燃料及び水を要し、始動に先立ちて準備に長時間を費し、運轉に數人を要し、石油機關の如く加熱して可燃性瓦斯を發生せしむる手数を要し、瓦斯機關の如き可搬性なきもの等に比

すれば其利便著しく且大なるを以て、破損故障を生じ易き缺點はないでもないが、今日にては改善せられて其缺點は大いに除去せられ愈其應用範圍を大ならしめて居る。

かかる便利なる瓦斯倫機關と唧筒とを結合せしめたものが即ち瓦斯倫唧筒である。而して瓦斯倫機關の力を唧筒に傳ふるにはギヤ式とチェン式とがある、加之瓦斯倫機關が高速廻轉をなすの特性を利用し、ロータリー式及びタービン式唧筒に應用され、唧筒の形態を一層小ならしめて可搬性を増し、然も揚水量及び水壓を大ならしめ、腕用唧筒、蒸汽唧筒の缺點の大部分を補ひ得たのである。

我國に瓦斯倫唧筒の紹介せられたるは明治四十二年であつて、大正二、三年頃に至り我國にて製作せらるるに至つた、其當時は發動機は主として外國製品を用ひ、之れに國產唧筒を連結したものが多かりしが、今日にありては發動機唧筒共に國內にて製作せらるるの域に達し、其製造者數も三十を以て數へられ、従つて製作者間に激しき競争行はれ此競争は一面に於ては弊害もあつたか、又一面に於て瓦斯倫唧筒普及の一助をなした。

自動車唧筒 自動車唧筒は自動車に唧筒を装置し、自動車運轉用の瓦斯倫機關を其儘利用して唧筒を運轉するもので、現場に到達した自動車の機關を停止することなく、單に連絡を切り替ふるのみにて、直ちに唧筒を活動せしめ得るものである。瓦斯倫唧筒の缺點は、其の運搬に人力又は馬力を用ふること、神速を尙ふ消防車として缺くる憾がある、然るに自動車唧筒は完全に其缺點を補ひ、加ふるに必要な人員水管其他の器具をも、併せて同時に運搬し得るの利點はある、然し形状大なると重量多く、狹隘の地及び惡路に於ては全く其活動を阻害される缺點がある。

大正三年東京上野公園に開催せられた大正博覽會に、英國製メリューエザー式と獨逸製ベントツ式と二種の自動車唧筒が出品され、初めて我國に自動車唧筒が紹介され、前者は横濱市に、後者は名古屋市に納入せられて、我國に於ける自動車唧筒使用のトップを切つた。次て大正七年東京及び大阪に各一臺か購入せられ、東京にては大正八年從來使

用し來たれる蒸汽唧筒の半數を自動車唧筒に變更し、同九年には全部を之れに替ゆる等長足の普及を全國に及ぼした我國の自動車工業は、發達の著しきものありとはいへ、未だ完成の機に達せず、従つて自動車唧筒の製造も一二の製作者を除きては、國產消防自動車は完成せられず、多くは外國製自動車シャシーに、國產唧筒を取り付けた所謂アツセンブリー式であることは止むを得ない、去り乍ら唧筒工業の發達著しき今日、よしそれがアツセンブリー式であっても、米國のアツセンブリー車に比し何等遜色なく、寧ろ國情に適合したるものが製作せらるるに至つた。

從來我國にて使用せらるる自動車唧筒は、井戸、貯水池、又は水道消火栓より給水せらるるもの殆ど全部であるが水利悪しき地において、相當量の水を貯ふるタンクを有する自動車ポンプが使用さるるは、外國に其例を見るところである。警視廳にても水道破壊其他の萬一の場合に應ずる爲め、タンク附自動車唧筒を購入するの計畫があると傳へらるるは、注目すべきである、又昨年(昭和九年)栃木縣日光町に於て、タンク附唧筒自動車にて撒水車兼用のものを採用したが、これも唧筒自動車利用の一方策であることを失はぬ。

オートバイポンプ オートバイポンプは、瓦斯倫機關を有する自動自轉車に、唧筒を連結したもので、自動車に比し形態重量共に小であり、自動車の通行不可能の狹隘地にも侵入することを得て自動車唧筒の缺點を補ひ、瓦斯倫唧筒の大缺點たる運搬の不便を取り除く目的を以て考案せられたものである、而して其は最初は其の名の示す如く二輪車を主としたが、近年我國に於けるオート三輪車製作益盛となるに従ひ、今日にては殆ど三輪車となつた。

オートバイポンプは、最初オートバイ又はオート三輪車に装置され居る瓦斯倫機關を、直ちに唧筒動力として應用することが行はれた。然るに此等の瓦斯倫機關は空氣冷却装置なるを以て一箇所に停止し、唧筒の運轉の爲め其の機關に激しき運動を爲さしむるときは、三十分位にて過熱され、遂には機關の故障又は破壊の原因となる惧あり、且つ馬力も小であつて唧筒用動力として不適當である、従つてオートバイポンプは、消防用唧筒として、大なる期待を持ち

得るものではない。茲に於て最近に至つては、オートバイ又はオート三輪車の機關を唧筒運轉に使用せず、別に水冷却装置ある機關を有する瓦斯倫唧筒を、オートバイ又はオート三輪車に装置し、オートバイ又はオート三輪車は、單に運搬用としたものが作製さるるに至つた。

オートバイポンプの考案は一度首肯し得らるるも、其機關の關係より早く既にオートバイ又はオート三輪車は、單なるガソリンポンプの運搬用に供するに過ぎざる改革の行はるるに徴しても、一時の過渡期的産物であつて、近き將來に於ては其跡を消防界より消すであらう。殊に今日各地に於て道路の改良、區劃の整理着々行はれつつあり、自動車唧筒の活躍範圍次第に大なる時、愈其の感の大なるものがある。

ケミカルポンプ ケミカルポンプは又消火器唧筒とも稱せられ、最も簡單に其概念を得るためには、各家庭、工場等に備へ付けらるる藥品消火器の大仕掛のものと想へば間違ひないのである。歐米にては家屋の構造及び風土の關係上家屋全體が焼失するが如き火災少く、工業的、化學的、火災が多いのである。従つてケミカルポンプの發達著しく、我國地方部落に於て小型ガソリンポンプの設備に忙しき今日、彼の地の地方部落に於てはケミカルポンプの設備に吸々たる状態である、最近バリよりの報導によれば同地消防隊はケミカルポンプの一種でシャボンの泡を噴出する装置の特殊なる唧筒を採用し、非常なる好成绩を擧げて居るといふ。

ケミカルポンプの有名なるは、米國のフォーマイド、チャイルド、フォモン、アムデリコ、獨逸のミニマックス、佛蘭西のブイロンSEB、英國のアイフ等があり、各其獨特の構造と、使用藥品とを誇つて居る。

我國にてケミカルポンプ設置の先鞭をつけたるは大阪市であつて、大正十二年之れを採用した、警視廳にても近くケミカルポンプ設備の計畫があるといふが、我國に於ける耐火建築の普及と化學工業の發達は、次第に此種ポンプを必要とすると同時に、其發達見るべきものがあるであらう。

ケミカルポンプの發達につれて、必然的に起るものは防毒装置である、之れケミカルポンプは藥品を使用し、少量の水を以て大面積を被覆し窒息消防をなさんとするにあり、ここに化學變化を生じ、毒瓦斯を發生するが故である。防毒マスクに就ては、後章に於て述ぶることとする。

消防船 港灣碇泊中の船舶や、岸壁上屋の火災に應ずるため、設計建造された特種の船を消防船といひ、狭い港灣内にあつて敏速なる活動をなす必要上、出來得る限り小型に然も相當大なる速力を出し得る様々案されて居る、現代の商船は次第に大型となり、海面より上甲板までの舷の高さ數十尺に達するため、消防船に裝備せらるる唧筒は、非常に強力なるものを必要とし、又近來商船の燃料は重油其他を使用するもの多く、船舶火災は油類の火災多きを以てフオーマイド發生及び送込設備を備へて居る。

從來の消防船は多く蒸汽力によつて運轉されたが、不時の出火を考慮し何時にても出動し得らるる様不斷に鑛を焚き相當蒸汽を上げ置くを必要とする不便あると、瓦斯倫機關の發達とは、近來一般に蒸汽機關を廢し瓦斯倫機關が採用せられて居る。

第二款 唧筒構造上の發達

唧筒の種類 唧筒は應用せらるる原理によつて之を分類すれば、壓力應用唧筒と遠心力應用唧筒との二種となり、壓力應用唧筒は更に其構造により往復唧筒と廻轉唧筒の二に區分せられ、遠心力應用唧筒は渦卷唧筒と呼ばれて居る又唧筒は構造上弁の有無によつて有活栓、無活栓の二種となり、往復唧筒は前者であり、廻轉唧筒及び渦卷唧筒は後者である。

往復唧筒には單働式と複働式との二種かあり、廻轉唧筒には真空とロータリポンプとがあり、渦卷唧筒に誘導材根を装置したものをタービンポンプと呼ぶのである。

之れを表示すれば



而して之を發達の順序よりいへば左の如くである

- 1 單働往復唧筒
- 2 複働往復唧筒
- 3 真空廻轉唧筒
- 4 渦卷ポンプ
- 5 タービンポンプ
- 6 ロータリポンプ

往復唧筒 往復唧筒とは圓筒内に於て唧子が往復運動をなし、よつて吸水及び排水作用が行はるによつて生じたる名稱であつて、活栓即ち弁を有するにより、活栓唧筒又は有弁唧筒と稱せられ更に單働式と複働式とに別たれる。

單働式往復唧筒 單働式往復唧筒は、吸水口と排水口とを有する圓筒と、其の圓筒内部を往復運動する唧子とよりなり、圓筒の吸水口及び排水口に、それ／＼各一個の弁を取り付けた唧筒である。此種唧筒の最も簡單なるものは龍吐水である。

其構造を簡単に説明すれば、圓筒内の底部吸水口の内面に皮製の弁あり、圓筒内の唧子が其弁の方向に向つて動くときは塞され、反對に弁の反對の方向、即ち弁より遠かる方向に向つて動く時は、弁は開く様に装置されて居る。之を吸水弁と呼ぶ。別に排水口の外部にも亦弁があつて、唧子が吸水弁の方向に動きて吸水弁の塞かるる時に開き、逆に吸水弁の開く時に閉する様装置され、之を排水弁といふ。圓筒内を往復する唧子の周囲には、一つ又は二つの小溝を設け、之れに布又は宋呂が填充され、溝より盛り上り、之れによつて圓筒の内部と唧子の周囲との接觸を密接ならしめ、圓筒と唧子との間隙から水又は空氣の漏れざる様に作製されてゐる。唧子の中央には長き桿が固定され、其桿は圓筒外に延び、其の尖端には桿に直角に握り手があつて、之れによつて唧子を圓筒内に往復せしめるに便してある。

今水を充たしたる桶又は盥の中に龍吐水を挿入し握り柄を取りて唧子を底部に向つて押せば、吸水弁は塞り反對に排水弁は開き、圓筒内の空氣は排出せられ、次いで唧子を引き上げるときは圓筒の唧子下は眞空状態となり、之れと同時に吸水弁は開かれ、排水弁は閉るを以て、桶中の水は唧子下に向つて流入し、唧子が圓筒の上部に達するときには圓筒内は殆ど水を以て滿さるるに至る、而して再び唧子を押し下ぐれば吸水弁は閉ち排水弁は開き、圓筒内の水は排水口より排水管に奔出し、唧筒外に流出する而して唧子の往復運動が繰返さるる間は此作用は繼續されるのである。

單働式往復唧筒は、唧子の一往復に只一回の吸水作用と、排水作用の行はるるに過ぎず、従つて排水口を通り噴水管より噴出する水は間歇的にとぎれ／＼となる、而して之れがため唧筒に衝動を與へ、其反動は噴水管に及び、定められた一點に水を注ぐことは不可能であり、且つ噴出する水の速度は一定しない缺點がある。此の缺點を補ひ且つ數人にて操作し得せしむるため考案されたものが雲龍水であつて、水槽中に二個の唧筒を併列装置し各唧筒の排水を同一噴水口に導き二個の唧筒の中央に支點をもつ搖桿に唧子桿を連結し、搖桿の左右に數人を配して左右交互に上下

せしめ、左方の唧筒が排水作用をなすとき右方の唧筒にては吸水作用をなし、絶えず噴水管より噴水せしめんとした然るに雲龍水も亦、間歇的噴水を防止すること出来るのみか、數人により操作され壓力を増したる結果、水の衝撃を増し、時に噴水管を破裂せしめ、又は筒先の組員を倒すことあり、唧筒の振動は大となり、水槽より溢れ出る水を大ならしめた。茲に於て考案せられたるものが空氣室である。

空氣室の作用 空氣室(エヤーチャンバー)は、水槽内二個の唧筒の中間に設けられた中空の金屬製室であつて、其上部は密閉され、下部の一方が開く、而して其口は唧筒の排水管よりする水路に連絡される、故に唧筒か排水衝程に移るとき、即ち唧子が押し下され唧筒内の水が排出せらるるとき、其の水の一部は排水口より水管を通じ噴水口より噴出し他の一部は空氣室内の空氣を壓縮して其の中に侵入する、而して吸水衝程に移るとき、即ち唧子が引き上げらるるとき、排水弁が塞がれ排水壓力を減するを以て、空氣室内に壓縮され居る空氣のため、空氣室内に侵入したる水は押し出され、水管を通り噴水口より迸出する。此空氣室の作用は噴水を間歇的ならしめず、従つて弁の衝撃と機械の衝動を緩和するのみならず、噴水の速度は稍一定され、水管の破裂其他を防ぎ得るのである。腕用唧筒にては空氣室は普通圓筒の容積の約一倍半乃至二倍の大きさに設計され、龍吐水に類する金屬製輕便唧筒にも、空氣室を備ふるものがある。

複働式往復唧筒 單働式往復唧筒か唧子の第一衝程に於て吸水し、第二衝程に於て排水し、二衝程即ち唧子か圓筒内を一往復して、初めて一回の排水をなすに止り、噴水は間歇的となるを以て、唧子の一衝程毎に、即ち唧子の圓筒内の往にも復にも、一回宛の排水をなさしめ、間歇の間を短かくし、弁の衝撃と機械の振動を少なくし、不斷に噴水せしめんとし、案出せられたるものであつて、殊に蒸汽力を應用する蒸汽唧筒の出現によつて、其必要を大ならしめ、遂には蒸汽唧筒には、單働式の影を見ざるに至つた。

複働式往復唧筒の構造を容易に想像するには、二箇の唧筒圓筒を一つに集め一箇の唧子によつて之れを活用するものと思へばよい、即ち兩端を密閉した一箇の圓筒（尤も其一方の中央には唧子桿の出入する穴には「パッキング」を裝填して唧子桿を緊密に保持し、然も運動を容易ならしむる裝置を施す）の中央に唧子室を設け、其の周圍を二室に分ち、一室を吸水室、他の一室を排水室とし、吸水室は吸水口によつて吸水管に、排水室は排水口によつて噴水管に通ずる。唧子室内には唧子があつて、之れに付けらるゝ唧子桿によつて、唧子室内を往復せしめられ、唧子に唧子桿の取り付けらるゝ方を外方、唧子桿なき方を内方と呼ばれる、而して唧子室の内方と外方との兩端に、吸水室側に吸水弁排水室側に排水弁を、相對して一對つゝ二對、都合四箇の弁を裝置す、語を代へていへば唧子室の内方の端の吸水室壁に、唧子室に向つて開かるゝ吸水弁を設け之れに對し排水室壁に排水室に向つて開かるゝ排水弁があり、唧子室の外方の端にも、同様吸水弁と排水弁とがある。唧子か唧子桿によつて圓筒中の外方に引かるゝとき、上記四個の弁の中、内方の吸水弁と外方の排水弁とは開かれ、内方の排水弁と外方の吸水弁とは閉ぢられ、反對に唧子か圓筒の内方に押し込まるゝとき、内方の吸水弁と外方の排水弁とは閉ぢ、内方の排水弁と外方の吸水弁とは開く、故に此運動が繼續せらるゝとき、吸水室内の空氣は、唧子室を通じて排水室に排出され、吸水室は眞空状態となり、吸水管を通じて水は吸水室に侵入し來り、遂には唧子か外方に運動するとき、之れに伴れて開かるゝ内方の吸水弁より水は唧子室内方に侵入し、將に唧子が内方に向ふ運動に移らんとするときは内方は水によつて充満され、唧子が内方に運動するとき、内方の水は其時開かるゝ排水弁より排水室に奔出し代つて外方吸水弁は開かれ、唧子の外方は水によつて充満せられ、次で唧子が外方運動に移れば、外方の水は排出されて内方に水を満す、故に唧子の一衝程毎に水は排出され、噴水管よりは斷えず噴水を見るのである。

複働式往復唧筒は一衝程毎に排水が行はれ排水室はウォーターポケット（水溜）となり空氣室に近き作用をなすを以て

單働式のものに見るが如き甚しき間歇排水はない。然し之れに内燃機關（ガソリンエンジンの如き）を應用する場合は内燃機關の曲柄（クランク）の回轉運動を唧子の往復運動に變ずるの結果、唧子の速度は單弦運動、即ち衝程の中央に於て大となり上下兩端に於て小となるが故に、排水口より噴出する水の速度は常に一定せず、従つて之を調節する爲めには、空氣室の必要があるのである。

往復唧筒有効吸水の高さ 往復唧筒の吸水し得る高さは製作の巧拙にもよるが普通二十尺乃至二十五尺である。理論上よりいへば、水の上昇力は約十米といはれて居るが、唧筒か吸水を開始するに當り、吸水管内の空氣を排除するとき、吸水弁が閉塞運動を開始し、全く閉塞したる迄に多少の時間を要するを以て、其間に圓筒内にある空氣の一部は吸水弁の間隙から吸水管内に逆流し、又圓筒壁と唧子との緊密度が完全に保たれて居ない場合、其の間隙から空氣の漏洩浸入を見るを以て、水は理論通りに上昇せず、實際に於ては腕用唧筒にては二十尺動力唧筒にては二十五尺となるのである。

往復唧筒の長所 往復唧筒の長所とするところは

- 一、構造比較的簡單であつて、必要に應じては、例へば龍吐水の如き、携行に極めて便利なる小型のものをも製作せらる。
- 二、腕用唧筒の如きは構造簡單、使用法簡便であつて、之れが運轉に特殊の知識及び技能を必要としない。
- 三、必要に應じては可なり大なる壓力を加へ得るを以て高壓放水に適す。
- 四、長時間連續運轉して比較的放水壓力を減じない。
- 五、自己の運轉により吸水し得るを以て、吸水のため特別の裝置、又は附屬唧筒を必要としない。
- 六、土砂其他により摩滅せられたる部分等を容易に取り替へ得られ、修理亦簡便であつて、長年月に亘り使用に耐ゆ

る。

等が挙げられる。

往復唧筒の短所 往復唧筒には上記の長所があるが、次の如き缺點がある。

- 一、放水能力を大ならしめんとすれば、形状重量共に大となり取扱に不便を來たす。
- 二、弁を有するため泥水悪水又は潮水を使用するとき、又は吸い込まれた土砂によつて、弁に故障生じ易い。
- 三、弁の動作に多少の時間を要するを以て、圓筒内に吸入せられたる水が、吸水管内に逆流し、加へられたる力の全部を利用すること困難であり、効率悪し。
- 四、唧筒内の抵抗極めて大である。
- 五、操作上振動烈しく各部に損傷生じ易し。
- 六、唧筒の効率を良好ならしむる爲めには廻轉に制限があり、最高廻轉數一分間約三百回轉を以て限度となすが故に高速度廻轉機關に應用することを得ない之れ吸水弁が閉ぢ始めて閉ぢ終るまでに若干の時を要し、其の間に圓筒内の水の一部は吸水弁の間隙より吸水管に逆流し、廻轉數が増大すれば増大する程逆流現象が甚しくなる爲めである。
- 七、弁坐(バルブシート)に對する弁の衝撃甚しく、之を緩和する爲めゴム製の弁を使用する場合に於て、ゴムは油類又は酸類が浸潤し又は風化すれば脆弱となり、弾性を失ひ、其の動作不敏となり、唧筒の効率を著しく減退せしめる。故に時々少くとも一年に一回は、弁室(バルブボックス)の蓋を取り除きて弁を検し脆弱となりたるものは之を新品と交換すべき不便と手数とを要す。
- 八、噴水か間歇的に行はれ、空氣室が備へられても尙水の速さ常に一定ならず、其衝動は水管に波及し、爲めに水管

を破損するの處がある。

九、凡ての放水準備完了の後にあらざれば、唧筒の運動を開始し得ず、管筈に相當壓力加はるまでは噴水口を閉じ、之を支ふる必要がある。

ロータリーポンプ ロータリーポンプは、吸水管と排水管とを有する金屬製の匣中に、並行の回轉軸に固定した同型若しくは異型の二個の回轉體が、回轉體相互及び匣の内壁に對し常に密接し、空氣及び水の漏洩することなき様に構成され、其の回轉體の回轉により匣内の空氣を匣外に排出し、匣内を真空状態となし以て吸水作用を誘致し、次で吸水作用によつて吸入したる匣内の水を排出する唧筒であつて、瓦斯倫機關の發達につれ高速度回轉をなす瓦斯倫機關に往復唧筒を應用せんとせば、往復唧筒の効率を減じ強ひて之をなさんとせば、唧筒圓筒の數を増加する必要ありて形狀を大にする不便あるを以て、之れに代り高速回轉機關の力を全部唧筒に傳達せんとして、案出せられた唧筒である。

一般に使用せらるゝロータリーポンプの回轉體の型状には種々あるが、消防用唧筒は排水速度を可成的一様ならしむる必要あるを以て並行する二軸に固定される回轉體は、同形の齒輪狀をなすものが普通に使用されて居る。これ此唧筒がギヤ唧筒と呼ばれる理由である。齒輪型回轉體の側面は唧筒匣の内壁に密接し、且つ各回轉體の凸起部は匣の内壁に密接し、一方の回轉體の一つの凸起部は、他の回轉體の一つの凹部と順次にカミ合ひ然も其カミ合も緊密に接觸して間隙を生ずることなく、排水管のある方向に向つて回轉す、即ち左の回轉體が左轉すれば、右の回轉體は右に回轉する如く装置されて居る。故に回轉體が回轉運動を起せば、順次に構成せらるゝ回轉體の凹部と唧筒匣壁との間の空間の空氣は、匣壁に添ひて排水管内に排出され。唧筒匣及び吸水管内を真空状態とし、次第に吸水管より水は吸ひ上げられ、同様に回轉體の凹部と匣壁との間に充たされた水は、次から次に排水口から排出される。今一個の回轉體に六個の凸起部あれば、凹部亦六個あり、其一回轉には六回の排水が行はれ、二個の回轉體により都合十二回の排

水が順次に行はるゝこととなる。故に之を往復唧筒に比すれば、十二個の單働式のもの各三十度の角度に於て曲柄軸に取付けるか、乃至は六個の複働式のもの各六十度の角度に於て曲柄軸に取付けたると、同様の結果を得るのである。従つて間歇の間隔は殆どなきを以て空氣室の必要なのみならず、噴水口の水の速度は略一定し、機體水管等に衝撃を與へず、構造は簡單であつて且つ弁なきを以て、唧筒内の水の抵抗少なく、往復唧筒の如く吸水された水が吸水管に逆流することなきを以て、高速度回轉機關に直結しても能率を損することがない、而して往復唧筒に於て弁の故障の原因となつた泥土小砂利等も、水と共に排出され、之がために急に損傷や障害を來すことがない。

高速度回轉機關によつて運轉せらるゝロータリーポンプと之れと同等の排水量を有し同等の機關によつて運轉せらるゝ往復唧筒とを比較すれば、ロータリーポンプの方が形狀重量共に遙かに小である。

ロータリーポンプの吸上能力即ち水を吸ひ上げ得る高さは、其のポンプの製作の巧拙により非常の差があり、精巧ならざるものは往復唧筒に及ばざること遠きも、精巧なるものは垂直下二十八尺位の水は吸ひ上げ得るのである。

ロータリーポンプの長所

ロータリーポンプの長所としては左の諸點が擧げられる。

- 一、構造極めて簡單であつて取扱簡便である。
- 二、同一量の排水量を有する他種唧筒に比し形狀重量共に小である。
- 三、弁を有せざるを以て弁によつて生ずる故障は除去される。
- 四、高速度回轉機關に直結することを得然も動力傳導上の損失度が少ない。
- 五、自己の力にて排氣吸水をなし補助唧筒を必要としない。
- 六、泥水小砂利も水と共に排出される。
- 七、間歇短く排水速度一定され空氣室を必要としない。

八、構造堅牢で故障を生ずること少く、萬一故障箇所あるも容易に之れを發見することが出来る。

九、給油装置が簡便である。

ロータリーポンプの短所

ロータリーポンプの短所としては左の諸點が擧げられる。

- 一、ポンプ匣内の摩擦面比較的廣く従つて摩擦抵抗が大である。
- 二、一旦摩擦したる唧筒匣の内面は、部分的に之を取替ふることを得ない。
- 三、吸込み土砂のため摩擦部分に損傷を生ずること多く、従つて耐久力に乏しい。
- 四、回轉體の摩擦部分の甚しく摩滅したるとき、之れが調節をなすこと能はず、使用能率に限度があり其限度を超ゆれば回轉體の双方を取替ふる必要がある。
- 五、製作上の技工の特に優秀なるものにあらざれば、多少の機體の振動を免れぬ。
- 六、回轉體軸承ボールベヤリングが水氣の爲め損傷せられ、故障を惹起し易い。
- 七、摩擦面に酸化を生じ易く、常に空虛としクリスを充分に與へ置く等の手数を要す。
- 八、放水準備の完了せざる場合、唧筒の運轉を開始することを得ず。

タービンポンプ タービンポンプはセントラルポンプ(渦卷唧筒)の排水に壓力を生せしめ其水を遠方に到達せしめんがため誘導羽根を附したもので、ロータリーポンプと同じく、高速度回轉機關に連結して、消防の用に供せらるゝものである。

タービンポンプを知るには先づセントラルポンプを知らねばならぬ。セントラルポンプは遠心力を利用して水を排出せんとするもので、例へば水を盛りたる盥に木片を入れ、之れを圓を畫く様に動かし、次第に其速度を増せば、盥の中心の水は外方に集り來ると同様に於て、即ちセントラルポンプの渦卷室の中にイ

ンペラー(翼車)があつて、渦巻室の外周に切線の位置に排水管が取り付けられ、吸水口は翼車の中心にある。今翼車の中心部に開口する吸水口より、排水管を通し水が侵入し来り、渦巻室が水で満たされた時、翼車を高速度に回転せしむれば水は翼車の羽根に沿ひ遠心作用を起し、渦巻室の外方に向つて運動を開始し、渦巻室に對し切線の位置にある排水管より奔出すると同時に、遠心作用により翼車の中心部は真空状態となるを以て、こゝに開口する吸水管より水源の水は渦巻室に流入する。而して遠心力は回転する物體の重量に比例し、且回転数の二乗に比例するものなるが故に回転数が早やければ早い程遠心力は大となるにより、高壓力の水を有効に排出するには、インペラの直径を大きくし回転数を成る可く多くし、遠心力を増大ならしめなければならぬ。然るにインペラ中にて水に與へらるゝ壓力は半径に比例するが故に、中心部に於て小であり中心を離るゝに従つて大となる、されば結局流出する水の速さが一定でなく又排水管に對する水の衝擊が激しきため、構造其他の關係からインペラの半径には自から限度がある、従つて渦巻室は一般に高壓放水には適當でない。よつてインペラより噴出する水の衝擊を防ぎ壓力の減殺を小ならしめ噴水に壓力を與へて遠距離に到達せしむるために、インペラの外側に誘導翼を設けたるものが即ちタービンポンプである。翼車と誘導翼を有する渦巻室を二個以上並列し第一室の導翼より出た水を二室のインペラの中心部にある吸水口に導き、順次同様にし最後の導翼より出つる水を、排水管によつて排出せしむる様に設計するときは、各室の翼車を経る毎に逐次水の壓力を増し高壓放水をなし得るを以て、タービンポンプには少くも二個の渦巻室がある。之れタービンと命名せられた理由である。

渦巻室及びタービンポンプは共に遠心力を應用したるものであつて、インペラは渦巻室の内壁と密接せず、又遠心力は重量に比例するものなること前に述べたる通りであるを以て、空氣の如き氣體に作用する遠心力は微力であつてタービンポンプは排氣能力に乏しく、従つて渦巻室内の排氣を行ひて真空状態となし、吸水作用を誘導するため

別に排氣唧筒を装置するを必要とする、而して其の排氣唧筒にはピストンポンプ(往復唧筒)ギヤポンプ等も用ひらるゝが、最も普通に用ひらるゝは廻旋真空ポンプである。

廻旋真空唧筒は、唧筒匣の中に一個の回転體を偏心的に装置し、其の回転體には中心より放射狀に數條溝が刻まれ其の溝はそれ／＼金屬製の翼弁が嵌め込まれ其弁は溝中に滑走運動し得る様に作製されてある。回転體は偏心的に其の一部は唧筒匣の内壁に密接して装置され、他の部分は匣の内壁から離れて居るが、回転體を高速度に回転せしむるときは、溝中に嵌め込まれたる翼弁は遠心力作用によつて飛び出し匣の内壁に密接して回転し、順次に出来る翼弁による匣内の各區劃内の空氣の容積に差を生せしめながら匣内の空氣を排氣口より排出するを以て主唧筒たるタービン唧筒の渦巻室に通する排氣口より、渦巻室内の空氣を吸込み、次第に渦巻室及び吸水管内を真空状態となす、かくて水源の水は吸水管を辿りて主唧筒に吸ひ込まれ、渦巻室は満水される、此時真空唧筒の運動を止め、主唧筒の運動を開始せしむれば、直ちに放水が出来るのである。

タービンポンプの特長 タービンポンプには左の如き特長がある。

- 一、タービンポンプには弁の装置なきを以て泥水土砂を吸ひ込むも唧筒に故障を生せず、又ロータリーポンプと異り渦巻室内の翼車も室内壁に密接し居らざるを以て、摩擦を生ずること少し。
- 二、排水が連続的なるため唧筒に受くる衝動なく機體の振動がない。
- 三、特殊高速度發動機を除き唧筒を發動機に直結し得るを以て、動力傳導上の損失少なし。
- 四、唧筒の据付けを終れば、放水管の結合を終らすともポンプの運動を開始することを得、放水準備終れば直ちに放水することが出来る。
- 五、放水中に放水管が閉塞され、又は故障を生ずることあるも、唧筒に影響し故障を生ずるが如きことなし。

- タービンポンプの短所 タービンポンプの主なる短所を挙げれば下の如くである。
- 一、自己の機能のみにて吸水作用を起さしむること能はず、別に真空ポンプを設備する不便がある。
 - 二、放水壓力を高むるため數個の翼車を聯成せざるべからざるにより、其體積ロータリーポンプに比し尠大となり、且つ真空ポンプ装置等により一層重量を増す。
 - 三、構造複雑なるを以て、操作他の唧筒に比し困難にして、技術上の訓練を要す。
 - 四、比較的故障生じ易く、且つ故障個所の發見困難であつて、殊に附屬唧筒たる真空唧筒に故障生じ易し。
 - 五、放水管の延長に従ひ水管の抵抗により放水壓力著しく低下し、之れを補ふの途なきを以て水取と火點との距離大なるときは高所放水をなすこと能はざる場合あり。

第三款 唧筒附屬品

唧筒附屬品の意義 茲に唧筒附屬品といふは唧筒の延長ともいふべき水管と之れに裝備せらるべき管鎗結合管フットバルブ、ストレーナー、スタンドパイプをいふのである。水管は之れを吸水管と放水管とに別たれるが、一般には水管は放水管を意味し、吸水管は之を吸管と呼んで居る。ここにも此區別に従ふこととする。

吸管 吸管は唧筒の吸水口に取り付け水源より唧筒に水を吸入するもので、其良否は唧筒の放水能力に多大の關係を有するものである。

今日にても往々地方に於て見受けらるる波込み式の舊式唧筒は吸水装置なきため水運器を用ひて水を運び、唧筒に給水するを以て、従つて放水能力を増すには唧筒の水槽は大きく作製され、唧筒の重量は重く取扱は不便で、然も、水運搬のため多人數を要するが、吸水管の發明によりて唧筒の型は小となり、取扱に便利となり、水運搬の不便を除去し、消防能率を非常に大ならしめた。

初期に於ける吸管は、今日の放水管に等しき布水管が用ひられたが、摩擦抵抗多く、破損、漏水大であつて放水能率小なりしたため、之れが改良が企圖され、ゴム引布ホースとなり、ゴム管となり、遂に今日のコード入ラバーパイプにまで發達した。コード入ラバーパイプは吸管の耐壓力を強大ならしめ、外部よりの損傷を防ぐため、仲間に螺旋狀の綱線を入れ、其の内部及び外部をゴムにて洞かに仕上げ、水の吸ひ上げ作用に少しにても摩擦抵抗を避くることに注意し製作せられたる一種のゴム管である。其の一端に雌接手を而して他の一端に雄接手を取り付け、唧筒への取付け及び吸管の接合に資してあるは言ふまでもない。

ストレーナー (除芥器) ストレーナーは吸水管の最尖端に確りと結合され、水源に浮遊する塵芥土砂が吸管を通じて唧筒内に侵入し、唧筒を破損し又は障害を惹起し、放水を不能ならしむるを防止する目的にて使用されるものである。ストレーナーは金屬製のものもあるが、大部分は藤を以て作られたるものか用ひられて居る。之れ藤製のものには金屬製のもの比し破損の度少なく、形状は大なるも重量軽く、使用法輕便であり、且つ酸化による變質及び破損から絶對安全であるからである。

フットバルブ フットバルブは一度吸管に吸ひ上げられたる水が水源に逆流するを防止するために、吸管の先端ストレーナーの内部に装置せらるる一種の弁である。フットバルブの効用は吸管内の水の逆流を防ぐにあるが、之れを装置すれば「呼び水」をなし、又は消防作業中水管の延長を必要とする場合、非常なる便利が得られる。

唧筒の圓筒と唧子との密接度不充分にして水の吸ひ上げ困難なる時、水源と唧筒との高低揚水有効高さを超ゆるとき、タービンポンプの真空唧筒に故障ある時、等に於て「呼び水」と稱し、唧筒に水を注入し其の水を吸管及び唧筒内に止まらしむることがある。かかる場合若しフットバルブの装置なきときは、吸水管内の水は水源に流下し、切角の呼び水も役をなさぬが、フットバルブあれば容易に唧筒の操作が出来る、又延焼飛火或は放水方向の變更等により放水

管を延長する必要生じ、唧筒の運轉を一時中止する場合、フットバルブあれば唧筒及び吸管内の水は其の儘に保持せられ、水管の延長を終りたる時直ちに放水が行はるるも、之れなき時は往復唧筒なれば唧筒及び吸管内の空氣排出に勞力を費し、タービンポンプなれば真空唧筒を使用するを必要とし、此爲めに消防作業中の貴重なる勞力と時間とを失ふフットバルブは此の如く有用なる器具であつて、種々の型式のものが發明されて居るが、從來のものは重量容積共に大きく、取扱に不便なるのみならず、其構造上水の抵抗多く、唧筒の放水能率を著しく低下せしむるの不利あり、消防用唧筒に利用せらるること極めて稀であつた。然るに近年次第に改良を施したる新製品世上に現れ、「ジー、エス式吸水補助器」の如きは形も小さく、抵抗も少く、優良フットバルブの一つに數へられ、フットバルブの使用數を大ならしめた。タービンポンプの真空唧筒は兎州故障生じ易きを以て、万一に處する爲めタービンポンプに取り付けらるべき吸管には、フットバルブの装置は必要である。

スタンドパイプ スタンドパイプには水道消火栓用と井戸用との二種がある。一般にスタンドパイプは水道消火栓用のもののみを指す場合が多い。

水道消火栓用スタンドパイプは、消火栓が地下式なる場合、直接消火栓に吸管又は水管を結合困難なるか、又は吸管又は水管に支障を來たす惧あるとき、又は消火栓の口徑と吸管又は水管の口徑と異なり、直接結合の不能なるとき消火栓と水管又は水管を媒介結合するに用ひらるる金屬製パイプであつて、之れには單口と双口とがあり、其の頭即ち吸管又は水管を結合すべき部分は、自由に方向を轉じ得る様設計さるるを普通とし、其様式には種々のものがある井戸用スタンドパイプ 從來の井戸は開放式であつたが、近來は衛生上其他の見地より閉塞式井戸多く、之れに吸管を投入するは全く不可能である。開放式井戸にても之れに直接吸管を投入することは、種々の支障ある場合が少なくない故に此不便を除く爲めに用ひらるるものが即ち井戸用スタンドパイプであつて、多くは亞鉛鍍金を施したる鍍止

の鐵管を用ひ井戸側に固定されて居り、其地表の部分は水道消火栓用スタンドパイプと同様、雄捻子が切られ直接吸管を接合し得る様に作られ水中部分の先端七八寸の所に無数の穴を穿ち、其底部は密閉されストレーナーの代用とし中にはフットバルブが装置され居るものもある。而して其最も簡單なるものは鐵管の代りに竹管を以てするもので、竹管の先端一尺位を地上に出し竹管と吸管との接合にはゴム管を用ふるのである。此場合ゴム管は自轉車の古チューブを以てすれば廢物利用ともなるべし、若し大なる竹管を用ひるときは、印籠織ぎとし、吸管の接合に便する工夫を必要とする、竹管の水中にある部分は無数の穴を穿つこと、鐵管を用ふるときと同しくするのである。

水管 唧筒が汲込式なりし時代においては、唧筒を以て成火點に近く据付けたが、吸管式となりては逆に唧筒は可成的水源に近く据付けねばならぬ、ここに於て生れたるものが即ち水管である、水管とは唧筒より火點に水を導き又は水源に近き唧筒より火點に近き唧筒に送水する管であつて、正しくは送水管といふべきである。

水管の初め造られたるはラバーホースであつてゴムを以て作られた、ラバーホースは彈力に富み強き水壓に耐え、摩擦抵抗も少く、唧筒能率に及ぼす影響少く、理想的なるも、容積嵩み、重量重く、運搬取扱共に不便なるのみならず高價にして保存に困難といふ大なる缺點があり、今日にては吸管として用ひらるる外、水管としては其影を潛むるに至つた。

ラバーホースの缺點を補はんとして生れたるものが布ホースである。

布ホースは亞麻糸にて織り上げたものでラバーホースに比し柔軟で容積も小であり、取扱保存共に容易であり且つ廉價で、然も相當壓力にも耐え得る、されど摩擦抵抗多く、耐久力少く、漏水の虞が多いことが缺點である。紡織術及び織機の進歩により、今日にては織目なき丸織となり、仕上も改善されて摩擦抵抗の小なること昔日の比ではないが、未だ其の缺點を皆無ならしむるには至らない。

ゴム引ホース ゴム引ホースは布ホースの欠點を除き、ゴムホースの特長を取り入れんとして考案されたもので、布ホースの内面にゴム製中袋を密着せしめたホースである、内面平滑で摩擦抵抗少なく、唧筒能率を低下すること少きなも、布ホースに比し重量重く價格稍高く、其使用範圍は布ホースに及ばない。

接合管 接合管は接手とも呼ばれカツプリングとも稱へられて居る、水管接合用の金具である。原始的であり且つ最も廣く用ひられつつある接合管は、捻子式の砲金又は眞鍮製のものである、此種接合管は接合管の生命とする水管の接合の緊密を保ち、接手よりの離脱は殆ど完全に防ぎ得るも、接合に時間を要し、水管に燃れを生ずるの欠點がある然るに消防は一分一秒を争ひ、且つ水利と建築の關係上、火點と唧筒との間隔は次第に遠かり、數本の水管を結合するを必要とするに當り、水管の接合及び燃れ直しに時間を要するは、消防上遺憾あるを以て、連結分離が簡單に行はれ、高所狹隘の場所でも容易に操作することを得、水管に燃れを來さざるか、又は燃れたる水管の燃れ直しを行はずして、通水に従ひ自然に燃ゆるが如き接手であつて、然も接合緊密で離脱の虞なく、堅牢であつて破損の度少なき優良接手を必要とし、各國に於て接手の改良が企てられ、其種類數十種に及び、我國にても町野式、堀式、中島式昭和式等が發明された、而して其の何れもが、從來の捻子式を一時に取替へることの不可能なるべきを考慮し、捻子式にも應用し得る様特殊補助機をも考案されて居る。

接手を度々取り替ふるが如きは、只に經濟上面白きことならざるのみならず、水道消火栓及び隣接叫村の唧筒又は水管の接手をも考慮に入れざるべからずして、接手の撰擇には慎重なる注意を要す、之れ新式接手の比較的傳播力少なき原因となつて居る。

管 鎗 管鎗は又筒先とも稱せられて居る。龍吐水に取り付けらるる木製噴水管は水管と管鎗とを兼ねて居た。唧筒に水管が使用せらるに至り、別に筒先が造られ之を水管の尖端に裝置し放水することとなつた。

管鎗は唧筒能率に重大なる關係を有し、其の製式口径等につきては研究改善が行はれ、一路放水用、數路放水用、平板放水用、撒布用等の諸種があつて、それぞれ其用途を異にして居る。

一路放水用管鎗は最も廣く用ひらるるもので、其の内部の平滑なるもの、彈導のあるもの、等があり、唧筒の排水量、水源の水量、放射距離等により其の口径を變すべきである。

數路放水用管鎗は、屋根裏、地窖内等に於ける放水に用ひ、平板噴水用は低所又は注水面積の擴大を要する場合に撒布用は瓦斯濃煙の密閉された室内に用ひらるるものである、又萬能管鎗と稱し、一個の管鎗にて各種管鎗に兼用し得るものもあるが、其使用法複雑なると、破損故障多く、一般にはあまり使用されない。

放水銃 放水銃も亦管鎗の一種である、高層建築の火災には放水有効射程を大ならしむる必要ありて強力な壓力が加へられる、然るに壓力強大なれば、人力を以て管鎗を保持すること困難なるのみならず危険を伴ふ、此危険と不便とを除くため、恰も高射砲の如き外觀を有する放水銃が考案された。

水管車 水管は常に唧筒車に用意されべきであるが、唧筒車に備付けたるものみにては不足することあり、又唧筒を使用せず直接水道消火栓に水管を結合し消火する場合がある、故に之れに應ずるため水管のみを運搬する水管車が用ひられる、水管車には轆車を備へ、之れに水管を巻き付け、水管を擴むるに便利にされて居る、而して其の運搬には手挽、馬輓、自動車等があり、唧筒自動車には手挽水管車を用意されることが多い。

明治三十二年東京に水道消火栓が設置され、之れと同時に各消防署分遣所に水管車を配置したるは我國に於ける水管車使用の嚆矢とするといはれて居る。

纏はもと軍陣にて將師の側に樹て其の所在を示す標識としたものであつて、徳川時代江戸に武家火消の制を設けしとき、之を火事場に携行し、其組の出動を知らしめたのが消防纏の起原である、而して定火消、大名火消等の武家火消に限らず、町火消にも亦纏を使用せしむることとなり、享保三年十月、其の雛形を定め、四年四月北町奉行大岡越前守、南町奉行中山出雲守、中之町奉行坪内能登守寄合ひの上、町年寄、肝煎、名主等の町役人五名を各町より出頭せしめ評議し同年六月火消目印纏を取り極め、五年八月七日町火消組合繪圖を以て改めて大纏控の制を定めた。

當時の纏は「だし」のみにて「ばれん」なく「だし」は金銀箔を置き、これに其組の方域を記した布二幅長七尺の吹流を下げ、又掟を記した布二巾長八尺の堅織を添へた。後享保十五年従來の吹流を廢して纏に「ばれん」を附し昔の馬印の形とし、「ばれん」にも金銀箔を置いた、寛政三年八月纏に金銀箔を置くことを禁し、白塗に改め「ばれん」も長さ三尺に限られた、又町毎にあつた小纏も天保の改革の際一切之を廢止し、一組に纏一本と定められたが、代纏といふ豫備の纏二三本を置くことは許された。

初め町火消は武家方の屋上に纏を掲げることが禁じてあつたが、其後武家火消と打ち交りて何れの場所にも纏を立て、自由に消防に従事し得ることとなつた、而して纏持は其組の先頭に立ちて纏を打ち振り打ち振り、「ばれん」にて火の子を打ち拂ひながら進んで消口の占領に當り、屋上に纏を樹て、注水の目標とし、猛火に包まれるも退くことなく火中にて纏を燒盡する時は代纏を取つて之れに代へ、其組の士氣を鼓舞するに力めた。第一に纏を樹てたる組は後より來りし者が纏を下ろさざる限り退却することは、恰も武士が戰場にて退却すると同じく大なる恥辱とした、之れが自然に慣例を形造り第一に纏を上げたものは最後まで止まる不文律となつた、かくの如くなりしを以て火掛の組員も纏持の保護のため之れに筒先を集中し消火を助けたこと一通ならずと雖も、纏を打ち振り士氣を激勵し乍ら屋根

の焼け落ると共に、職に殉じ燒死した纏持の壯烈な物語は多く傳へられて居る。故に古來纏は消防精神の表象として尊重せられ、纏持は頭取副頭取に次ぐ重位とされたのである。

斯くて時代は移り世は變り、消防組の組織も消防の方法も非常に變化し、纏は消防器具としての價値は大いに減じたが、明治大正を過ぎ昭和の今日に至るも、消防組の表識としての纏は恰も軍隊に於ける聯隊旗の如く尊重せられ、殊に消防組の功績を表彰する金馬籠の制度の設けらるるに及び、一層其の感を深からしめた。

第二款 旗

今日消防に用ひらるる、旗は警察旗、組旗、部旗、指揮旗等に別たれて居るが、往時にあつては組旗のみであつた。消防組旗の起源は江戸の町火消の掟を記した幟に源を發し、地方にては奉行所在地に近接する町村に設けられた駄付け人足に、各の村名を記した旗を持ちて駄付けしめたことに起因する、而して纏と共に引續き使用され、其後明治時代に入り各縣にて其の様式を定めた、之れが今日の組旗及び部旗である。指揮旗は徳川時代には之れを使用したる例を見ない様であるが明かでない。大正時代には指揮旗を鞘に收め、其の拵へを一見指揮刀の如くし、腰に吊した地方もあつたが、今日にては之を嚴禁して居る。指揮旗には組頭用のものと小頭用のものとがある。

警察旗は消防組の指揮指導に當るべき警察署長が現場に出張したるとき、其の所在場所を明かならしむる爲めに制定せられたものである。

第三款 提 灯

高張提灯 組及び部にある組旗及び部旗が、夜間其の所在を示すに不便なるため、之れに代りて用ひらるるものが組及び部の高張提灯である。

徳川時代において組の高張提灯には、其の組の纏を繪いたが、今日にては文字を以て組名、部名が記され、其様